

のである。

祇王や、小宰相や、千手や、横笛や、大原御幸の女院やに關する叙述の文章の面白味なども、之れに準じて味はひて戴きたい。

第十 過分の太政大臣

一

『平家物語』の趣味のもう一つは、『平家』全體の根本中心の味と同じ質の物語を積み重ねて、その根本中心の味を廣くし、深くし、厚くし、高くし、大きくした事である。事實でいへば、妓王、俊寛、成親、西光、攝政基房、叡山の座主、木曾義仲等の、大いに榮えて忽ちに衰へた、小さき榮枯盛衰の挿話を前置として、最後に六十餘州に蟠踞した奢る平家の倒壊を、高調子に寫した事である。私は此の榮枯急轉の準備挿話の一つとして、成親、俊寛等の謂はゆる謀叛に關する一二篇を引きたいと思ふ。

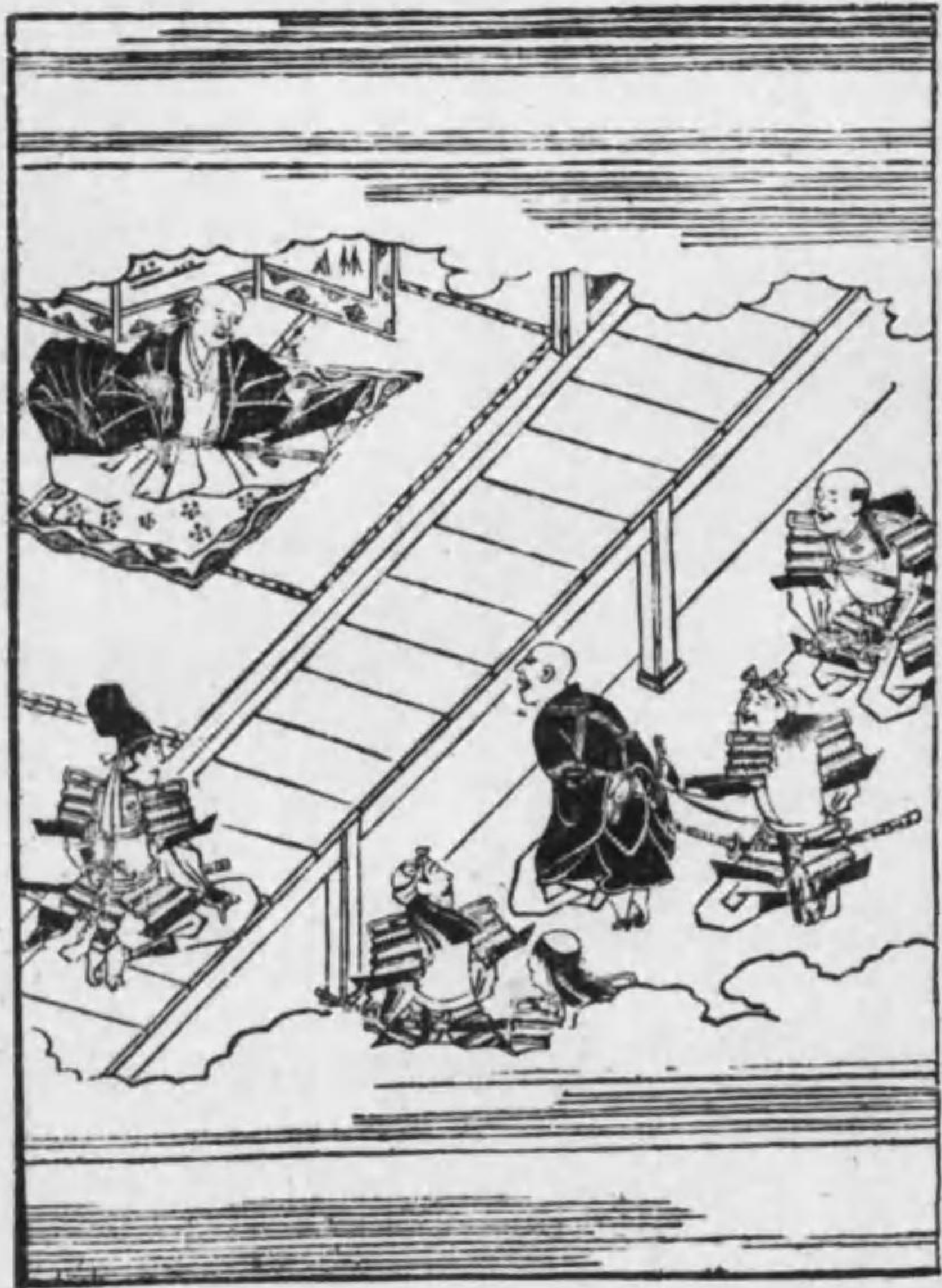
まづ「西光被斬」の一節を引いて見る。さる程に、清盛の横暴に對する不平や、新大納言成親の野心などが原因となつて、成親、俊寛、康頼、成經、西光、行綱等が、後白河法皇を奉じて、平家一門

を傾けようと企てた。そして其の謀が圖らずも、第一に力と頼んだ多田藏人行綱が返忠から漏れて、先づ張本人の成親が捕へられ、次ぎに俊寛、康頼等が捕へられ、つゞいて智辯膽力當代無双の西光法師が捕はれて、西八條なる平家の第に引き居ゑられた。此の時に於ける清盛と西光とが思ひ切つた暴言惡罵の應酬は、男性的なる兩雄の正面衝突の痛快なる光景を見せて居るが、さういふ方面の描寫としては、恐らく此の物語の前後に通じて類ひなきものであらう。

西光法師此の由を聞いて、我が身の上とや思ひけん、鞭を打つて急ぎ院の御所へ參る。六波羅の兵ども、道にて行き逢ひ、西八條殿より召さるゝぞ、急度參れと言ひければ、是れは奏すべき事あつて、院の御所へ參る。やがてこそ歸り參らめと言ひければ、悪い入道めが。何事をか奏聞すべかんなるぞとて、しや馬より取つて引き落とし、中に縛つて西八條殿へ提げて參る。日の始めより根原與力の者なりければ、殊に強う縛めて、御坪の内にぞ引つ居ゑたる。入道相國大床に立つて暫し睨まへ、あな惡や當家傾けうとする謀叛の奴がなれる委よ。しやつ爰へ引き寄せよとて、縁の際へ引き寄せさせ、物履きながら、しや面をむず／＼とぞ踏まれける。本より己

一七〇

等が様なる下藹の果を、君の召使はせ給ひて、成さるまじき官職を成したび、父子ともに過分の振舞をするに見しに合はせて、過たぬ天台座主流罪に申し行ひ、剩へ當家傾けうとする謀叛の輩に與してけるなり。有りのまゝに申せとこそ宣ひけれ。西光本より勝れたる大剛の者なりければ、ちとも色も變ぜず、惡びれたる氣色もななく、居直りあざ笑つて申しけるは、院中に近う召使はるゝ身なれば、執事の別當成親卿の、軍兵催され候事にも、與せずとは申すべき様なし。それは與したり。但し耳にあたる事をも宣ふものかな。他人の前は知らず、西光が聞かんずる所にては、左様の事をばえこそ宣ふまじけれ。抑、御邊は故刑部卿忠盛の嫡子にて坐せしが、十四五までは出仕もし給はず、故中御門の藤中納言家盛卿の邊に、立ち入り給ひしをば、京童は例の高平太とこそ言ひしか。然るを保延の頃、海賊の張本三十餘人、搦め進ぜられたりし勸賞に四品して、四位の兵衛佐と申し、をだに、人皆過分とこそ申し合はれしか。殿上の交りをだに嫌はれし人の子孫にて、今太政大臣まで成上つたるや過分なるらん。本より侍ほどの者の、受領檢非違使に至る事、先例法例な



元祿版繪本平家物語

きにしもあらず、なじかは過分なるべきと、憚る所もなう言ひ散らしたりければ、入道相國餘りに腹を居ゑかねて、暫しは物をも宣はず、良有つて入道宣ひけるは、しやつが首左右なら斬るな。よく糺問して事の仔細を尋ね問ひ、其の後河原へ引き出だいて、首を刎ねよとぞ宣ひける。松浦太郎重俊承つて、手足を挟み、様々にして痛め問ふ。西光本より争はざりける上、拷問は厳しかりけり、白狀四五枚に記せられて、其の後口を裂けとて、口を裂かれ五條西の朱雀にして、終に斬られにけり。

語釋 院の御所。後白河法皇の御所の事。當時は「院政」と云ひ、政治の實權が上皇にあつた時代であるが、今上即ち天皇陛下の御所を「内裏」と申すのに對して、上皇、法皇の御住居を、「院」或ひは「院の御所」と申したのである。○急度參れ。「きつ」とは「き」とのつまつたので、前にも云つた通り、もとは「一寸」の意であつたが、それが「いそいで」「しつかり」「必ず」等の意に用ゐられるやうになつた。が、此處は「一寸、すぐ」といふほどの意であらう。此の少し前で、成親を西八條に呼び寄せる所にも、「きつ」と立ち寄り給へ」とあるが、それを「長門本」といふ異本に「急ぎ立ち寄り給へ」とある所を見ると、此の語には必ず「急いで」といふ意味があつたので、此の意味に用ゐられる所から、「急度」の字をあてられ、又「必ず」といふ如き嚴重な意味を含めては、「蛇度」とも書かれたのであらう。○悪い入道めが。何事を奏聞すべかんなるぞ。これは「悪い入道が何事を奏せんとするぞ」と、文脈が續いたので

はない。「この入道めが……」と、すつかり文章を切り、又改めて「何事を奏聞しようとするのだ？」と云つたので、委しく書けば、「此奴め、怪しからん奴だ。今迄さんぐ、悪巧みをして、君を惑はし奉つて居た癖に、又何事を奏聞しようといふのだ。」といふ事である。「奏聞すべからんなるぞ」は「奏聞すべくあるのであるぞ」の意。○しや馬。惡しい心持を添へる爲めの接頭語。「しや面」「いけづうくしい」「くそ、思々しい」などいふのと同じ味。亡友島村抱月は、かういふのを「情化法」と名づけた。一種の氣分情味を添加する詞姿だといふのである。○中にく、つて西八條殿へ提けて參る。地へ落さずに、馬と大地との間で縛つたといふ解釋もあるが、是れは恐らく、縛つてから、手取り足取りして宙に吊して、西八條まで持つて來たといふのであらう。鞭つた結果として汗を流す馬を、「汗馬に鞭つ」といふのと同じ筆法で、結果を先取りして文を活かしたのである。○日の始めより根元與力の者なり。自然に出來た詞で、學者の拵つたのでないから、地から掘り出した様な味で、堪らなく面白い。「日の始め」は「日の出の始め」早朝のあけくからといふので、「開關の抑」から、眞先に加擔した元兎だからといふ意。外の詞では、とても此の味が譯されぬ。○御坪。四方取り圍んだ中庭。○大床。廣廂、廣縁。○しや面をむすくとぞ踏まれける。「しや面」は例の憎々しさを見せた情化。「むすく」は「むすと坐す」「ムンズと組む」などいふのと同じで、「無造作に」といふ蠻的動作の意味に、物の相接する有様を活かして見せたのであらう。○本より己等が様なる下藤の果を。この「踏まれける」から、接續語なしに、すぐ詞に移つたつきが實によい。「己等」は、今の下司詞の「うぬ等」「手前達」といふ事。我が事を他に移したので、一人稱の代名詞を二人稱に使つて、罵詈の心持を現はしたの

である。下藤は身分の卑いと。藤は年の事で、下藤は未だ年功を積みぬといふこと。○成さるまじき官職を成した
 び。君の特別な御思召で、不相應な高官に任じ給うたといふことであるが、「成す」は「御成り街道」、「御成り座敷」
 などいふと同じく、君主の行爲を示す特別の動詞である。○振舞をするを見しに合はせて、過たぬ云々。「合はせ
 て」は「加之」又「の意。意味の上からは、寧ろ下につくので、「親子して出過ぎた眞似をしくさると見て居ると、そ
 れのみならず、合はせて、罪もおはせぬ比叡の座主明雲僧正を讒した」といふこと。○當家傾けうとする謀叛の輩。
 謀叛の國法上の本義は既に第一章に説明してある。謀叛はもと皇室に叛くの意であつたが、平家専權の結果、此の
 詞が平家に叛くといふ意味に用ゐられ、剩へ上皇、天皇が平家を御謀りなさる事に迄用ゐられる様になつた。それ
 は次ぎの「教訓」といふ章に、内府重盛の詞として、「當家の運命未だ盡きざるによつて、御謀叛已に顯はれさせ給
 ひ候ひぬ」と書いてあるのを見ても解る。○與してけるなり。「ける」と濁るのは當時の訛りである。○惡びれたる
 氣色。見苦しい臆した様子もなく、堂々と立ち向つたといふ事。○聞かんずる所。普通に「聞かんとする」の轉じた
 のであるといひ、田中大秀は「す」は「ぞ」の轉であるといふ。もとは多分第一の方の義であつたらうが、此の
 時代には、唯だ「聞く所」といふのと同じ意味に用ゐられるやうになつた。○えこそ宜ふまじけれ。「宜ひ得じ」で、
 「仰しやる事は出来ませぬ」といふ意。○例の高平太とこそいひしか。「高足駄を穿いてうろつてゐる平家の
 太郎長男坊」といふ悪口のあだ名。但し、此處の文章は少し言葉足らずの氣味がある。何となれば、唯だ「家成卿の
 邊に立ち入り給ひしをば、高平太とこそいひしか」といふ丈では、「高」の字の説明がつかない譯で、こゝに「高平

太」とあるのを理解させる爲めには、是非ともその前に、高足駄を穿いて出入したといふ事を知らせねばならぬか
 らである。「長門本」に、こゝをば、足駄の事を、忠盛と清盛と父子兼帯の事として、

入道殿の父忠盛は、中御門の藤中納言家成、卿の邊に、朝夕平足駄はきて閑道より通り給ひしをば、人高平太と
 申して笑ひしが、わ入道殿も忠盛の嫡子といひしかども、十四五迄は叙爵をだにもし給はず、冠をだにも給は
 らせ給はで、繼母の池の尼上に、小目見せられてありし時は、あは六波羅の高平太が通るはとて、京童は指を
 さして申ししが……王孫とはいひながら、數代久しく成りくだりて、殿上人の交はりをだにも嫌はれて、閑討
 にせられんとし給ひし人の子にて、今忝く即闕の官を奪ひ取つて、太政大臣まで成りあがりて、剩へ天下を我
 がまゝにせらるゝ、是れをこそ過分と申すべけれ。

としてあるのは、これに氣がついて改めたのであらう。但し、此の方が條理は多少立つてゐるが、文章の力は遙か
 に下つて居る。「源平盛衰記」には、こゝをば更に、

和入道は、いかに王孫とこそ名乗り給へども、昔の事は見ねば知らず、御邊の父忠盛は、まさしく殿上の交は
 りを嫌はれし人ぞかし。其の嫡子におはせしかば、十四五までは敘爵をだにも賜はらず、しかも繼母には値う
 たり、過ぎ難かりければこそ、中御門の藤中納言家成、卿の播磨守にておはせし時、受領の鞭を取り、朝夕に枳
 の直垂に繩緒の足駄はきて通ひ給ひしかば、京童部は高平太といひて喚ひしぞかし。其を恥かすとや思ひけん、
 扇にて顔を隠し、骨の中より鼻を出だして、閑道を通ひ給ひしかば、また童部が先を切つて、高平太殿が扇に

て鼻を挟みたるぞやとて、後には鼻平太鼻平太とこそいはれ給ひしか。……其が今太政大臣に成りたるをこそ下腐の過分とは申すべき。

と改めて居るが、これは多分、流布本に右の手落を見出だしたのみならず、長門本の試みた父子兼帯の記述をも、不純で讀者の氣を散らす嫌ひがあるとし、興味集注の方便として、清盛一人の事に書き改めたのであらう。尙ほ又屋上屋の複雑味を悦ぶ、作者の例の趣味からして、たゞの平足駄をば、繩撚のばら緒にして鬢的の仰山味を加へ、更に追加の餘興として、扇の骨の間から鼻頭を出すといふ猿樂ふ體の狂言味を加へたのであらう。かくして長門本、「盛衰記」と、段々條理が立ち、手が込んで、合理的に面白くなつて來ては居るが、文章の力と餘意とに於いて、いや降りに下つて來て居るやうに思ふのは、私一人の僻目であらうか。私はかやうな點から見ても、流布本が先づ出でて、長門本、「盛衰記」が後に出來た事が明らかであり、而してあらゆる加除差引の結果、流布本が藝術的に見て最も高い地位を占めて居ることが明らかであるやうに思ふのである。○勲賞に四品して。御褒美に四位を賜はつたといふ事。○侍ほどの者の。西光がもと朝廷直屬の侍、即ち北面の武士であつたから云つたのである。○先例、法例。已に前にしかとした事實もあり、又法律として道理上立派に許される事でもあるといふ意。○榜問は厳しかりけり。此の「けり」も、前に云つた「風は烈しく吹きたりけり」、「雪は斑に降つたりけり」と同じく、感投的挿入句の味はひで、「もう覺悟して居る上に、嚴しく榜問されるではないか」といふ味である。

二

淨海入道と西光法師。亂暴で品位の乏しい嫌ひはあるが、積極的活動性に富み、滿身負けじ魂で張り切つて居る此の二人の壯漢が、睨み合ひ罵り合ふ壯烈な光景が、力のある筆に寫されて、手に汗を握らせる趣がある。入道が大床に立ちはだかつて、無言のまゝ暫らく睨へ、やうやく口を開いて、「あな悪や、當家を傾けようとする、謀叛人めが成れる果の氣味よさよ。其奴こゝへ引き寄せよ。」といふあたりの詞使ひ、句の運びの面白さ。「しや馬」、「しや面」、「しやつ」、「むすく」などいふ、俗語の感投語を巧みに使つた面白さ。西光法師を叙しては、まづ「本より勝れたる大剛の者なりければ」と前置して、演説口調に疊みかけて、大雄辯を振はした面白さ。實に何とも云はれぬ妙味である。

ちとも色も變せず、悪びれたる氣色もなく、居直り嘲笑つて申しけるは、などは一寸した事ながら、五分の隙もない文章である。斯様な場合である、顔色がさぞ眞蒼になつて居るであらう、と見れば、一寸も平生に變はらない。顔色が變はらないまでも、態度がおどくして居る居らぬかを見ると、何の磊々落々と傍若無人で、更に悪びれた様子がない。そしてまづ、居すまひを正し、屹となつて後に、「あッハッハ」と、さげすみ笑ひを一つして、「扱いふには」といふ段取であ

る。絶妙といふべきである。

與せずとは申すべき様なし、それは與したり。

の繰返しなども實によい。「相談にあづからぬとは云はれませぬ。いかにもそれは與つて御座る。しかし少々耳障りの事を申されるが、餘人の前では知らず、此の西光の聞く所では、左様の事を仰せらるゝわけは行きまますまいぞ。」といふ味であらう。實に堪らない面白さである。それから段々と調子を高めて来て、最後に、「殿上の交りをだに嫌はれし人の子孫にて、今太政大臣まで成上つたるや過分なるらん。」と言ひ放つた所、入道が餘りの腹立に暫らくは物をも言ひ得ぬ所、理の當然に行きつまつて、「しやつが首めつたに斬るではないぞ」といふ所から、最後に、拷問して後に、口を引裂いて、斬る所に至るまで、實に傳神の筆と云つてよい。

かやうな理由により、私は此の一節をば、かとかの衝突を痛快に描いた點に於いて、軍記中比類なき名文であると思つて居る。

第十一 小松教訓

次ぎには同じく卷第二、新大納言成親の處刑に就いて、重盛が父を諫むる一段を引いて見る。これは當代第一の賢人と見られた小松内府を、作者がいかにか描いたかといふ點から見ても面白く、また遮二無二押し進まうとする動的人物の清盛が、愛子ながら若手の靜的な君子人重盛の諄々と説く、謂はゆる「教訓」によつて如何に惱まされたか、又同じやうに消極質の道德者たる重盛が、積極質の横暴家たる清盛によつて、如何に惱まされたか、造化が此の性質のかくも相反したる二人を親子にするこによつて、いかに殘忍なる、しかしながら非常に興味ある悲喜劇を見せて呉れたかといふ點から見ても、非常に面白いことであらう。

新大納言は一間なる所に推籠められて、汗水になりつゝ、哀れ是れは日頃のあらましごとの、洩れ聞こえけるにこそ。誰れ洩らしぬらん。定めて北面の輩の中にぞ、あるらんなど、思はじ事なう、案しつゝけて御座しける所に、後より足音の高らかにしければ、すは只今我が命失はんとて、武士共の參るにこそと思はれければ、さはなくして入道、板敷高らかに踏み鳴らし、大納言の御座しける後の障子を、さ

つと引きあけて出でられたり。素絹の衣の短らかなるに、白き大口踏みくみ、聖柄の刀押しくつろげてさすまゝに、以ての外に怒れる氣色にて、大納言を暫し睨へて、抑々御邊は平治にも、已に誅せらるべかりしを、内府が身にかへて申請け首を繼ぎ奉つしは如何に。然るに其の恩を忘れて、何の遺恨あつてか、當家傾けうとは、し給ふなるぞ。恩を知るを以て人とはいふぞ。恩を知らざるをば畜生とこそいへ。されども當家の運命未だ盡きざるに依つて、是迄は迎へたんなり。日頃のあらましの次第、直に承らんと宣へば、大納言全くさる事候はず。如何様にも人の讒言にてぞ候ふらん。よくよく御尋ね候べしと申されければ、入道言はせも果てず、人やある人やあると召されければ、貞能つと参りたり。西光めが白狀取つて参れと宣へば、持つて参りたり。入道これを取つて、推返し推返し二三返高らかに讀み聞かせ、あな悪や此の上をば、何とか陳ずべかなるぞとて、大納言の顔にさつと投げ懸け、障子を丁ど引き立て、出でられけるが、猶ほ腹を居ゑかねて、經遠兼康と召す。難波次郎、瀬尾太郎参りたり。あの男取つて、庭に引落せと宣へども、是等左右なうも

し奉らず、小松殿の御氣色いかゞ候はんずるやらんと申しければ、入道よし／＼己等は、内府が命を重んじて、入道が仰せをば輕うしけるござんなれ。此の上は力及ばずと宣へば、是等悪しかりなんとや思ひけん、立ちあがり大納言の左右の手を取つて、庭へ引き落し奉る。其の時入道心地よげにて、取つて伏せて喚かせよとぞ宣ひける。二人の者ども、大納言の左右の耳に口をあて、如何様にも御聲の出づべう候と私語いて引き伏せ奉れば、二聲三聲ぞ喚かれける。其の體冥途にて娑婆世界の罪人を、或ひは業の秤にかけ、或ひは淨玻璃の鏡に引き向けて、罪の輕重に任せつゝ、阿房羅刹が呵責すらんも、是れには過ぎじとぞ見えし。新大納言は我が身のかくなるにつけても、子息丹波少將成經已下、稚き者どもの如何なる憂目にか逢ふらんと、思ひやるにも覺束なし。さばかり熱き六月に、裝束をだにもくつろげられず、熱さも堪へ難ければ、胸もせき上ぐる心地して、汗も涙も争ひてぞ流れける。さりとも小松殿は、思召し放たじものをとば思はれけれども、誰れして申すべしとも覺え給はず。

小松大臣は、例の善惡に騒ぎ給はぬ人にて坐しければ、遙かに日たけて後、嫡子權亮少將維盛を、車の尻に乗せつゝ、衛府四五人隨身二三人召具して、軍兵共をば一人も具せられず、誠に大樣げにて坐したれば、入道を始め奉つて、一門の人々、皆思はずげにぞ見給ひける。大臣中門の口にて、御車より降り給ふ所へ、貞能つと參つて、など是れほどの御大事に、軍兵をば一人も召具せられ候はぬやらんと申しければ、大臣大事とは天下の事をこそいへ、かやうの私事を大事といふ様やあると宣へば、兵仗を帶したりける兵共、皆そゞろいてぞ見えたりける。其の後大臣、大納言をばいづくに置き奉つたるやらんと、此彼を引き明け引きあけ見給ふに、ある障子の上に蛛手結うたる所あり。爰やらんとて開けられたれば、大納言坐しけり。涙に咽びうつぶして、目も見上げ給はず。如何にやと宣へば、その時見つけ奉つて、うれしげに思はれたる氣色、地獄にて罪人どもが、地藏菩薩を見奉るらんも、かくやと覺えて哀れなり。何事にて候やらん、今朝よりかゝる憂目に逢ひ候。さて渡らせ給へば、さりとともこそ深う頼み奉つて候へ。平治にも已に誅せらるべかりしを、

御恩を以て頸をつがれまゐらせ、剩へ正二位の大納言まで經上つて、歳已に四十に餘り候御恩こそ生々世々にも報じ盡くしがたう候へども、今度もまた甲斐なき命を助けさせおはしませ。さだにも候はゞ、出家入道仕り、如何ならん片山里にも籠り居て、一筋に後世菩提の勧めを、營み候はんとぞ申されける。大臣さ候へばとて、御命失ひ奉る迄の事はよも候はじ。たとひさ候とも、重盛かうて候へば、御命には代はり參らせ候べし。御心安く思召され候へとて、父の禪門の御前におはして、あの大納言失はれん事は、よく／＼御思惟候べし。其の故は先祖修理大夫顯季、白河院に召仕はれ參らせしより以來、家に其の例なき正二位の大納言に經上つて、剩へ當時君無雙の御いとほしみ、首を刎ねられんと、然るべうも候はず、只だ都の外へ出だされたらんに、事足り候ひなんず。北野ノ天神は、時平の大臣の讒奏にて、憂名を西海の浪に流し、西宮の大臣は、多田滿仲の讒言によつて、恨みを山陽の雲に寄す。各、無實なりしかども、流罪せられ給ひにき。是れ皆延喜の聖代、安和の御門の御僻事とぞ申し傳へたる。上古猶ほ斯くの如し、況んや末代に於いてをや。賢王猶

ほ御誤りあり、況んや凡人に於いてをや。既に召し置かれぬる上は、急ぎ失はれずとも、何の恐れか候べき。刑の疑はしきをば軽くせよ、功の疑はしきをば重くせよとこそ見えて候へ。事新しき申事にて候へども、重盛彼の大納言が妹に相具して候。維盛又聶也。かやうに親しう罷成つて候へば、申すとや思召され候らん。一向其の儀では候はず。只だ君の爲め、國の爲め、世の爲め、家の爲めの事を思つて申し候。一年故少納言入道信西が、執權の時に相當たつて、我が朝には嵯峨皇帝の御時、右兵衛督藤原仲成を、誅せられてより以來、保元迄は、君二十五代の間、行はれざりし死罪を、始めて執行ひ、宇治の悪左府の死骸を掘り起いて、實檢せられたりし事なんどまでは、餘りなる御政とこそ存じ候へ、されば古の人も、死罪を行へば、海内に謀叛の輩絶えずとこそ申し傳へて候へ。此の詞に附いて、中二年あつて、平治に又世亂れて、信西が埋まれたりしを掘り起こし、首を刎ねて大路を渡され候ひき。保元に申し行ひし事の、幾程もなく、早身の上に報はれにきと思へば、怖ろしうこそ候へ。是れはさせる朝敵にても候はず、かたぐい恐れあるべし。御榮花残る所

なければ、思召さるゝ事はあるまじけれども、子々孫々まで、繁昌こそあらまほしうは候へ。されば父祖の善悪は、必ず子孫に及ぶとこそ見えて候へ。積善の家には餘慶あり、積悪の門には餘殃留まるとこそ見えて候へ。如何様にも、今夜首を刎ねられん事は、然るべうも候はずと、申されたりければ、入道實にもとや思はれけん。死罪をば思ひ留まり給ひけり。

其の後大臣中門に出でて、侍共に宣ひけるは、仰せなればとて、あの大納言失はん事、左右なうあるべからず。入道腹の立つまゝに、物騒がしき事し給ひて、後には必ず悔み給ふべし。僻事して我れ恨むなと宣へば、兵仗を帶したりける兵共、皆舌を振つて恐れ慄く。扱も今朝經遠兼康が、あの大納言に情なう當たり奉つたる事こそ、返すくも奇怪なれ。など重盛が還り聞かんずる所をば、憚らざりけるぞ。片田舎の侍は、皆かゝるそとよと宣へば、難波も瀬尾も、共に恐れ入りたりけり。大臣はかやうに宣ひて、小松殿へぞ歸られける。

語釋 小松教訓。「教訓」といふ語が當時、諫言の意味に用ゐられたのである。○一間なる所。柱間の一間のこと、即ち、其の間口が柱二本の間だけしかない狭い室といふことで、或る一室といふことではない。即ち柱間一間丈の一室といふこと。○汗水になりつゝ、頃は六月二日、即ち今の七月初めで、梅雨あがりの蒸し暑い盛りである、それに不安と恐怖とが手傳つて、水をあびたやうに、びつしよりになつたといふと。○日頃のあらまし事。先頃から企て、ゐた計畫。「あらまし事」は、昔の本には「有増事」など書いてあるが、意味はあらまほしく希望するといふので、「八坂本」といふ異本には、「日頃はかりし事はや洩れ聞こえける」とある。○北面。朝廷直屬の武人。○思はじ事なう。變な詞であるが、「思ふまいと思ふ事もなく」といふので、あ、成るか、かう成るか、かうしたら、あ、したらと、あらゆる事を思ひつくして、思はない事はもうあるまいと思ふ程、案じつくしたといふ事であらう。思はぬ事なう」よりも一段深い意味である。○素絹の衣。生絹にて製した法服。龜絹の衣とも書く。異本には「龜絹の表代」とも書いてある。模様のない白絹で製したもので、便利本位なる略式の俗装。山坂の登り降りに便する點からは「坂衣」ともいふ。慈恵大師の用ゐる始めたものといふ。太刀を帶すに便利なので武人も用ゐた。○大口。大口袴。もと束帯の時、表袴の下に穿くものであつたが、後には表にも穿くやうになつた。袴口が大きく明いて居る所から出た稱である。「踏みく、み」は、く、まして、即ち裾長にたるまして着てゐた事。○聖柄の刀。「坊主柄」とい

ふ意味で、柄に飾のない刀のこと。○首を繼ぎ奉つし。斬らるべき首をついで、殺さるべき命を助けてあげたといふ意味。面白い表現である。○畜生とはいへ、されども當家の運命未だ盡きざるによつて。荒々しい不嗜みな言葉であるが、傍若無人なる血性漢の激した様子が見えて面白い。但しこの「されども」は、前後の句を繋ぐ楔としては利いてゐない様に思はれる。○是迄は迎へたんなり。本來は「幸に捕縛して此處まで引連れて來た」といふのであるが、それを「此處まで御迎へした」と、美しく云つた禮儀の詞である。○陳すべかなるぞ。「陳す」は辯解釋明することとで、「辯解すべくあるのであるぞ」といふ意。○經遠兼康と召す。難波次郎、瀬尾太郎参りたり。難波次郎經遠、瀬尾太郎兼康といふ二人で、前には名乗で呼び、後には姓と諱とを呼んだのである。○是等左右なうもし奉らす。彼等二人は、右も左もなく無難作に引落しもしなかつた。○如何様にも御聲の出づべう候。どんなにしても、とにかく御聲を御出しなさい、といふ意。「喚け」といふのを、美しく云つたのである。○婆娑。梵語で此の世の事、○業の秤。淨玻璃の鏡。閻魔王廳の法廷に備へつてあるといふ佛者の傳説に名高い二つの檢罪器。業の秤は此の世で犯した罪業を量る靈妙な器械で、罪ある者がその前に立てば、器は自然に動いて罪の輕重を分明に現はし、淨玻璃の鏡は、罪ある者がその前に立てば、過去の犯罪が悉くそのまゝに現はれると云はれる。○阿房羅利。梵語のアポラクシヤス (AVORAKSAS) で獄卒の意、牛の頭、人の手、兩脚に牛の蹄のあるもの。○汗も涙も争ひて。人化の味で、汗と涙とが、おれが先に出る、何の後れるものか、おれが多く出た、いやおれの方が多いと云つて争ふといふ意。○善惡に騒ぎ給はぬ。善い事があつても悪い事があつても、取逆上せて騒ぐといふ事のない沈着大量の人。

○思はずにぞ。意外に。○兵仗。武器。○そやろいてぞ。「そやろ」すやろは何となく心の進むとで、即ち重盛の此の言葉を聞いて、「成程、恥かしい！」といふ氣持が、人々の心に電氣のやうに、さつと傳はつたといふ事。面白い詞をうまく使つたものである。○ある障子の上に。「とある障子の」とあつたのではないか。「ある障子」では落ちつかぬやうに思はれる。○蜘蛛。「くもで」は蜘蛛の手のやうにといふ意だといひ、蜘蛛の網のやうにといふ意だといひ、或ひは組手の意で、指を組んだやうにといふ事だといひ、いろ／＼の説はあるが、要するに木を縦横に結び固めたことである。○甲斐なき命を助けさせ。助けられても役に立たぬ命ながらといふ謙遜の語。○北野天神は：。此の時代にめであられた六朝駢麗式、朗詠集式の美しい對句。山陽山陰を、此頃は「センヤウ道」「センノン道」と云つた。○軽くせよ……重くせよ。流布本には「輕んぜよ……重んぜよ」とあるが、「刑の疑はしきをば輕んぜよ」といふと、「馬鹿にせよ」「侮れ」といふやうな味に聞こえる氣味があり、幸ひ長門本には、「軽くせよ」「重くせよ」とあるので、暫らく入れかへて見たのである。○積善の家。易に「積善之家必有余慶、積不善之家必有余殃」とあるのを踏まへた文句。積善はシャクセンと讀み、積悪はセキアクと讀む。當時の讀みくせである。○物騒がしき事し給ひて。無理非道なる事し給ひてといふ事を、和らけて丸く云つた美化の味である。丁度今いふ物騒にあたるであらう。○經遠兼康があの大納言……難波も瀬尾も共に恐れ入りたりけり。後に説明する「經遠兼康と召す。難波次郎瀬尾太郎参りたり」と同じく、同じ二人の名を、前には名乗で現はし、後には苗字で現はして變化をつけた遊板の筆。○還り聞かんずる所。此の頃の時代詞。廻りめぐつて我が耳に入る場合を考へて、なぜ遠慮はしなかつた

のだといふことである。

三

細かに見れば多少の申分はあらうが、概してよく出来てゐる。先づ清盛の入つて來た所が面白い。成親が境遇の激變に心を勞し盡くして、ぼんやりとしてゐる折から、覺音に驚いて、スハ！ 武士が來て、命を失はれるのかと脅える。と思ふと、さうではなかつたが、心の休まる間もなく、障子を排して現はれ出でたのは、更に恐るべき入道清盛であつた。と、かう書きつゞけて、それから入道の装ひを寫し、次ぎに烈火の如く憤つた入道の言動を、巨細に寫して居る。段取が實によく、文句の點綴も面白い。序ながら「スハ！」「さつと」「つと」「丁ど」といふやうな擬聲、擬態の詞、或ひは感投的の詞を連發的に使つて居るが、それが皆實によく利いて居る。

入道言はせも果てず、人やある人やあると召されければ、貞能つと参りたり。西光めが白狀取つて參れと宣へば、持つて参りたり。入道これを取つて、二三返高らかに讀み聞かせ云々

なども、實にうまく書きつゞけて居る。後世ぶりに改むれば、「誰れかある。」と呼ぶと、「貞能がすぐに來て畏つた。」「西光の白狀を持つて來い。」といふと、「すぐに持つて來た」といふのであらうが、稚

い對偶ふりを、小刻みに刻んで、「扱入道はそれを取つて押返し〜」と續けたところは、面白いではありませんか。それから

經遠兼康と召す。難波の次郎、瀬尾の太郎参りたり。

なども、一寸した文句だか、人知れぬえらい技巧を含んで居る。一體これは前なる「語釋」の所でも云つた通り、同じ二人の名を別の詞で繰返したのであるが、若し之れを同じ言葉で繰返して、「經遠兼康と召す。||經遠、兼康参りたり。」といひ、或ひは「難波次郎、瀬尾太郎と召す。||難波次郎、瀬尾太郎参りたり。」と云つては、全くつまらぬ文章となるであらう。井原西鶴の作の中に、「源氏物語借りに遣はしたるに、湖月抄送られて即座に其の埒も明きし。」と書いたのがあつた。「源氏物語」を、源氏の版本の一種なる「湖月抄」で繰返して、變化を附けたのである。これは例へば、「ビール」を持つて來いと命すると、すぐに麒麟を持つて來た。「酒をと命じたら、直ぐに正宗が前に現はれた。」といふ様なわけで、「經遠、兼康」を「難波次郎、瀬尾太郎」で繰返した味は、つまりかういふ修辭上の筆致の味に外ならぬ。古典の作家は、なか／＼かういふ處に苦心したものである。此處を異本の「八坂本」には、難波瀬尾と召されければ、經遠兼康参りたり。

としてあるが、これは流布本とは反對に、先づ姓を呼ばせて、地の文を名乗で繰返したのであらう。

「長門本」には

經遠兼康はなきかと宣ひければ、經遠兼康末貞盛國など参りたれば、

としてあるが、これは二人の名を四人の名で繰返して、數の上で變化を附けようとしたのであらう。つまり異本の作者名々が、自分の最善と信する所によつて、いろ／＼の工風を施したのである。

經遠兼康が重盛の氣色を案じて立ち兼ねて居ると、清盛がかさに掛かつて怒號するかと思ひの外、「己等は、内府が命を重んじて、入道が仰せをば輕うしけるござんなれ、此の上は力及ばず。」と、靜かに觀念したのは、強き風の柳の枝に弱る譬へで、愛子たり賢者たる内府の名に鋒を收めたのであらう。これももうまく面白く書いて居る。次ぎに、成親が自分の事、子等の事に七轉八倒の苦惱を續ける所を寫して、「胸もせき上ぐる心地して、汗も涙も争ひてぞ流れける。」といひ、そして「さりとも小松殿は」と、呼出の句を設けて後、

小松大臣は、例の善惡に騒ぎ給はぬ人にて坐しければ、遙かに日たけて後……

云々と、軍裝東揃ひの張り切つた空氣の間に、平和な文官裝束の悠々たる内府の姿を出した所も、文體までが俄にゆつたりした調子を帯びて來て、實にうまい。例へば暴風雨の間に麗日のうら／＼かに照り渡つた趣ともいふべきであらう。

最後によく出来て居るのは重盛の諫言である。これは無論、骨子を事實に取つただけで、文句や順序は大體、作者の考案に成つたものであらうが、情理を盡くしてゐる上に、言表はし方がいかにもよい。可なりの長せりふであるから、今ならば多少演説口調、講義口調になる所であらうが、其の言ひつゞけの間に於ける緩急、メリハリ、漸層の面白さはどうかであるか。例へば、

かやうに親しう罷成つて候へば、申すことや思召され候ふらん。一向其儀では候はず。唯だ君の爲め、國の爲め、世の爲め、家の爲めの事を思つて申し候。

の如き、「更に其儀では御座りませぬ。たゞ君の御爲め、國のため、世のため、家の爲めと思つての事で御座ります。」と疊みかけたところなど、いかにも近頃の大雄辯の演説を聞くやうではないか。そして又、此の四つの「爲め」「爲め」の順序が、第一に大君の爲め、第二に日本の國の爲め、第三に世間一統の爲め、第四に我等が平家の爲めと、いかにもよく順序づけられて、置き換へることの成らぬやうに出来てゐるのも、また稱すべき一つであらう。それから「餘りなる御政とこそ存じ候へ」、「謀叛の輩絶えずとこそ申し傳へて候へ」、「怖ろしうこそ候へ」、「繁昌こそあらまほしうは候へ」、「餘殃留まるとこそ見えて候へ」と、「こそ」の係結かゝりむすびの連續して並べられた事であるが、これも一寸見には、拙劣な單調さのやうに見えるけれども、事實は、父の意志を繼承ついでさしむべき擇拔えらばきの材料を、立てつけ

に列擧するところから、自然に同様の形を取つたのであり、一つは作者の感じた一所懸命の誠意熱情が、自然に最高調の「こそ格」を取つたのであらう。とにかく謂はゆる「小松教訓」の、此の重盛の諫言は、次ぎなる第二の諫言と共に、「平家」の中の出色の文字として許すべきものである。

序に「候」といふ語の使ひざまについて、私は先きに、當時は後世と違ひ、敬語としてのみ用ゐられたもので、特別の注意を要すると云つたが、此の章に於いても、成親、重盛、經遠、兼康等の詞に於いてのみ、「候」が用ゐられて、清盛の詞には更に用ゐられず、同じ重盛に於いても、成親及び清盛に對する時にのみ用ゐられて、臣下に對する時には、すぐに取除かれるのを見ても、其の消息が知られるであらう。

第十二 足 摺

さる程に新大納言成親卿は、備前の兒島に流され、やがて備前備中の國境なる有木の別所べつしよに移された。そして俊寛僧都と平判官康頼、丹波少將成經の三人は、薩摩瀧鬼界が島に流されたが、翌年中宮

御産の御祈りの爲めに、非常の大赦があつて、康頼成經の二人が赦されて都に召し還されることになつた。俊寛一人は清盛の憎しみが深くして、只だ一人硫黄の孤島に淋しく取残されたが、こゝに引く一章は、此の大悲境に於ける俊寛の容子の、又其の心情の描寫である。

御使は丹左衛門尉基康といふ者なり。急ぎ船より上り、是れに都より流され給ひたりし、平判官康頼入道、丹波少將殿やおはすと、聲々にぞ尋ねける。二人の人々は、例の熊野詣して無かりけり。俊寛一人有りけるが、これを聞いて、餘りに思へば夢やらん、又天魔波旬の、我が心を誑さんといふやらん、現とも更に覺えぬもの哉とて、慌てふためき、走るともなく、倒るゝともなく、急ぎ御使の前に行き向つて、これこそ流されたる俊寛よと名乗り給へば、雑色が頸に懸けさせたる布袋より、入道相國の赦文取り出でて奉る。これを開けて見給ふに、重科は遠流に免ず、早く歸洛の思ひをなすべし。今度中宮御産の御祈りによつて、非常の赦行はる。然る間鬼界が島の流人、少將成經、康頼法師赦免とばかり書かれて、俊寛といふ文字はなし。禮紙にぞあるらんとて、禮紙を見るにも見えず。奥より端へ讀み、端より奥へ讀み

けれども、二人とばかり書かれて、三人とは書かれず。さる程に、少將や康頼法師も出て來たり、少將の取つて見るにも、康頼法師が讀みけるにも、二人とばかり書かれて、三人とは書かれざりけり。夢にこそかゝる事はあれ、夢かと思ひ成さんとするれば現なり、現かと思へば又夢の如し。其上二人の人々の許へは、都より言傳てたる文ども、幾らもありけれども、俊寛僧都の許へは、言問ふ文一つもなし。されば我が所縁の者どもは、皆都の内に跡を留めずなりにけるよと、思ひ遣るにも覺束なし。抑、我等三人は同じ罪、配所も同じ所なり。如何なれば赦免の時、二人は召し還されて、一人爰に残すべき。平家の思ひ忘れかや、執筆の謬りか。こは如何にしつる事共ぞやと、天に仰ぎ地に俯して、泣き悲しめども甲斐ぞなき。僧都少將の袂にすがり、俊寛が斯様になるといふも、御邊の父、故大納言の、由なき謀叛の故なり。されば餘所の事と思ひ給ふべからず。赦されなければ、都迄こそ叶はずとも、せめては此の船に乗せて、九國の地まで着けてたべ。各のこれに御座しつる程こそ、春は燕、秋は田面の雁の音づるゝやうに、おのづから故郷の事をも傳へ聞きつ

一五六
 れ、今より後は、何としてか聞くべきとて、悶え焦がれ給ひけり。少將誠に、さこそは思召され候らめ、我等が召還さるゝ嬉しさも、さる事にては候へども、御有様を見奉るに、更に行くべき空も覺え候はず。此の舟に打乗せ奉つて、上りたうは候へども、都の御使如何にも叶ふまじき由を頻りに申す其上、赦されもなきに、三人ながら、島の内を出てたりなど聞こえ候はゞ、中々悪しう候ひなんず。成經先づ罷上つて、人々にもよく／＼申し合はせ、入道相國の氣色をも伺ひ、迎へに人を奉らん。其の程は日來御座しつるやうに思ひ成して待ち給へ。命は如何にも大切の事なれば、縦ひ此の瀬にこそ漏れさせ給ふとも、終にはなにか赦免なくて候べきと、様々に慰めのたまへども、僧都堪へ忍ぶべうも見え給はず。

さる程に舟出ださんとしければ、僧都船に乗つては降りつ、下りては乗ツつ、あらまし事をぞし給ひける。少將の形見には夜の衾、康頼入道が形見には、一部の法華經をぞ留めける。既に纜解いて、舟押し出だせば、僧都綱に取りつき、腰になり、脇に成り、長の立つ迄は引かれて出づ。長も及ばず成りければ、僧都船に取り付き、



是れ乘せ給へし具け行てし

たつた

さて如何に各、俊寛をば、終に捨て果て給ふか。日來の情も今は何ならず。赦され無ければ、都迄こそ叶はずとも、せめては此の船に乗せて、九國の地迄と口説かれけれども、都の御使如何にも叶ひ候ふまじとて、取りつき給ひつる手を引きのけて、船をば終に漕ぎ出す。僧都せん方なさに、渚に上り倒れ伏し、稚き者の、乳母や母などを慕ふやうに、足摺をして、是れ乗せて行け、具して行けと宣ひて、喚き叫び給へども、漕ぎ行く船の習ひにて、跡は白波ばかりなり。未だ遠からぬ船なれども、涙にくれて見えざりければ、僧都高き所に走り上り、沖の方をぞ招きける。彼の松浦小夜姫が、唐舟を慕ひつゝ、領巾振りけんも、これには過ぎじとぞ見えし。さる程に船も漕ぎ隠れ、日も暮るれども、僧都怪しの臥處へも歸らず、波に足打洗はせ、露に萎れて、其の夜はそこにぞ明かしける。さりとも少將は情深き人なれば、よき様に申す事もやと頼みを懸けて、其の瀬に身をも投げざりし、心の中こそばかなけれ。昔早離速離が、海巖山に放たれたりけん悲しみも、今こそ思ひ知られけれ。

二

語釋 例の熊野詣。康頼、成經の二人が紀州の熊野権現を信じ、熊野に似た鳥の一部に假宮を建て、権現を勸請し、毎日其處へ歩みを運んで參詣してゐたが、俊寛は生得不信心で、神佛を物ともせず、たゞ悲しんでばかりゐたといふ事が、前章に書いてある。それを承けた文句。○天魔波旬。人の善を爲す事を妨げる悪魔。魔は梵語羅の略で邪魔障礙の意。波旬は梵語播禪 (Pa-pi-sen) の訛つたので、障礙善といふ意。此の魔王、欲界第六天の頂に宮居し、其の數多き子女を人間界に降して、悪人を煽動し、善人を惱亂する故に、天界なる作善障礙の王といふ意味で、天魔波旬とは云つたのである。○俊寛よと名乗り給へば、雜色が頸に懸けさせたる布袋より、入道相國の敷文取出でて奉る。此の一段は大體、俊寛に花を持たせて、重々しく寫して居るやうに見える。多分作者が俊寛を以て、三人中第一位の人物とし、又その至極の悲境に同情した所から、斯様に重く寫したのであらう。俊寛自身の詞に、「候」といふ挨拶語を一度も使はずして、「俊寛よ」と言ひつ放しにさせたのも、地の文に於いて「名乗り給へば」、「奉る」と敬語を使つたのも、皆さういふ作者の創作心理の結果として現はれた現象である。○布袋。布の袋、湯桶よみにしたのである。○重科は遠流に免ず。變な文句で判然しない。いろ／＼の意味に取られるが、或ひは「汝等が謀叛の大罪をば、今迄の遠流生活で償はれたものとして免してやる。」といふ事か、或ひは重科は重き刑罰の意、遠流は遠流人の意で、「汝等遠流人に對し、重き刑罰をゆるして都に召還してやる。」といふ事か、多分この

二つの中であらう。私は多分第二の方かと思ふが、當時の此の種類の公文書などの用例をよく調べた上でなければはつきり言ふことが出来ぬ。○早く歸洛の思ひをなすべし。もう都に歸れるんだと思つて、早速悦べといふのであらう。面白いが、不思議な文句である。○非常の赦。赦書に赦を分けて常赦、大赦、非常赦の三つとして居る。常赦は普通の大罪までを赦すだけで、八虐(前に云つた謀反、謀叛、謀大逆、惡逆、不道、大不敬、不孝、不義)や故殺人は赦さぬが、大赦は大辟以下八虐、故殺人をも赦し、非常赦は大辟以下八虐、故殺人、私鑄錢までをも悉く赦す。此處に謂ふ「非常の赦」が即ち是れで、一種の法家の用語である。謠曲「俊寛」に「非常の大赦行はる、により」と「大」の字をつけてあるのは、俗に碎けて句調をよくしたのであらう。○禮紙、墨紙とも書く。書狀の上を巻く白い紙で、其の上に更に包紙を用ゐるのであるが、禮紙までが儀式上常具の品目になつてゐるのである。○三人とは書かれず。さる程に。「さる程に」は「其の中に」といふ意。軍記などの常文句で本來變な詞であるが、使ひ馴らして此の邊では、もうすっかり落ちついてゐる。そして、「三人とは書かれず」から「さる程に」へのつゞきも、非常に調子がよい。○少將の取つて見るにも、康頼法師が讀みけるにも。「取つて見る」、「讀みける」は、同じ事を別な語で言ひ表はして變化をつけたのであるが、若い方の少將が、「ドレ私が。」と云つて取つて見る、年とつた入道の康頼が「私も讀んで見ませう。」と云つて讀んであつたにもといふ風に書くのが面白い、といふので、かうしたのであらう。また成經と康頼とは、「取つて見るにも」、「讀みけるにも」と、敬語なしの書き捨てにし、俊寛には「これを開けて見給ふに」と、敬語をつけ、間近の處で斯様に區別してゐるのは、前に云つた趣意で、悲境の俊寛に花を持たせ、

同情をそ、いだったのであらう。○我が所縁の者ども云々。縁者知己の親しい人達は、平家の迫害に怖ぢ、連坐を恐れ、京都を退散したのであらうといふこと。○二人は召し還されて、一人こゝに残すべき、文法的にいへば自他の組み合わせが違つてゐる。正しくは「二人を召し還して、一人を残す」と、兩方を能動的にするか、或ひは「二人は召し還されて、一人は残る」と兩方を自動的にするか、すべきであるが、恐らく、「我れ一人をこゝに残すとは怪しからぬ」といふ、俊寛が無念の情を現はして、わざと、後を他動にしたのであらう。○天に仰ぎ地に俯して泣き悲しめども。『平家』の常文句だが、絶望の心持をいかにもよく現はして居る。○「甲斐ぞなき」から「僧都少將の袂にすぎり」へ、接續詞なしに續けた處が、簡潔でよい。○春は燕、秋は田面の雁云々。成經の舅、平宰相教盛の領地が肥前國鹿瀬の庄にあり、そこから衣食を送つて居たので、御事達の居らるゝ中は、故郷の便りも多少は聞かれたがと云ふ意。○少將誠にさこそは思召され候ふらめ。俊寛の詞には「候」がなく、少將の俊寛に対する詞には、「候」のあるのを注意すべきである。かういふ微妙な影を見逃がすと、現代語譯などが、すっかり死んでしまふであらう。○更に行くべき空。「歸り力、歸る勇氣もない」といふ事であるが、「空」の意味はわからない。田中大秀は「竹取物語解」の中で「氣を喪ひたるやうの意」と云つてゐるが、どうであらうか。私は遙かなる希望の地にあこがれる意をあらはした詞かと思ふ。○日頃おはしつる様に。是れまで通りに。○此の瀬。「瀬」はめつたにない機會の意。淵に對する瀬で、取附どころの意であらう。○あらまし事。諸註釋書には、荒々しい舉動の意に解釋して居るが、私はあらまほしく思ふ事の意で、空想的希望を述べたといふ事と思ふ。つまり「連れて行つて下さるとよいがなあ」、「せ

めて九州迄でも」など、いろ／＼と、希望を述べたといふのであらう。爰で荒々しい粗暴の振舞を演じては、人々の同情を失ふことになるから、そんな事をする筈がない。又「長門本」には、俊寛が他の二人と違ひ不信心であつた事を寫して、「神明佛陀の御名をも唱へず、あらしの熊野詣もせず」(さうありたい結構な熊野詣もせずの意)と云つて居り、また康頼入道の作と云はれる「寶物集」に、道行く二人の空想的希望を描いて、餅でも落ちて居ればよいがといふ所を、「二人道を行くとてあらし事に」と書いてある處を見ると、かた／＼これは空想的希望を意味する當時の慣用語であつたのであらう。さうすると、「いひ給ひける」と云はずして「し給ひける」と云つたのがをかしいやうだが、「言ふ」は「する事」の一種で、言ふ事を「する」と言つた例は、他の立派な古典に幾らもあるから差支あるまい。○夜の衾。寢る時にかける夜着、搔卷の類。○腰に成り、脇に成り、長の立つ迄は。綱に引きずられて行く中に、腰まで水に浸る、やがて脇まで浸る、浸り浸つて脊の立つ中は引かれて行つたが、といふ意。簡淨によく書いて居る。○さて如何に各々。「取付き」を承けて「俊寛をば」につゞく、續き工合、轉じ工合が實によい。○稚き者の乳母や母などを慕ふやうに。普通の人情や禮儀からいふと、第一に尊い生みの親の母を挙げ、次ぎに卑しい雇女の乳母を挙げて、「母や乳母などを慕ふ様に」といふべきであるが、源平當時の貴族階級に取つて、實母の御臺所は、生みツ放しで、養育はすぐに臣下の妻の乳ある者に託するので、母とは名のみで、子に親しみがなく、乳母の方が寧ろ深く子に親まれたので、その時代常識の人情が、此の文句の順序立に現はれて、此の不思議な逆まな言ひ表しをさせたのであらう。斯様な些細な詞使ひの中にも、時代思想が呼吸をついて居るから面白いのである。但しこ、

を「八坂本」には「母やめのとを」としてあるが、これは多分此の點に心づいて普通の常識的に改めたのであらう。○漕ぎ行く船の習ひにて跡は白波ばかりなり。多分「白波」に「知らぬ」意を掛け持たしたのであらう。斯ういふ場合の心持を、いかにもよく書いて居る。○松浦小夜姫。欽明天皇の朝に、大伴佐提彦が新羅に行く時、松浦の豪族の女小夜姫が、男との別れを悲み、船影を追うて、高い處へ高い處へ駆け登り、頂巾を振りつゝ、一念凝つて遂に石と化した。それから、その山を領振山、石を望夫石と云つたといふ傳説。○あやしの臥處。「あやし」は多く「怪」「賤」の二義を兼ねて居る。極めて粗末な卑しいところで、人の臥處が、獸の臥處か、こんな處に住めるか、住めぬかと疑はれるやうなひどい臥處といふと。○其の瀬に身をも投げざりし心の中こそはかなけれ。此の千歳一遇の機會、一度取りはづせば又逢ふ事の出來ぬ機會を取りはづしながら、思ひ切つて身を投げなかつたのは、實に氣の毒な情ない事であつたといふ意。かういふのが「平家」特有の調子であるが、諸行無常、盛者必衰、どうせ頼まれぬ憂世の末に望みをかけるとは、笑止な事！ かういふ中にはかない、物悲しけな、世の中を見切つた調子が、面白く出て居るではありませんか。○早離速離が海巖山へ放たれたりけん。壯里息里とも書いてある。もとは「淨土本縁經」といふ經文にある天竺の故事で、又鬼界の島の流人の一人、康頼入道の書いたといふ「寶物集」にも載せてある。南天竺、摩涅婆吒國の梵士長那の二子、七歳と五歳になる早離、速離といふのが、飢饉の年父が食を求めに遠く出かけた留守中、繼母に海中に連れ出され、岩石峨々たる孤島に置去にされて、飢死に、泣死にに死んだといふ哀話。俊寛の境遇にいかにもよく似通つた哀話である。

三

これが謠曲の「俊寛」、曲亭馬琴の『俊寛僧都島物語』を始めとして、明治大正に至るまで數多く現はれた、あらゆる「俊寛文學」の材料になつた大本の種子である。いふ迄もなく、同情のある叙事の筆を面白く運んだといふだけで、戯曲でも小説でもないから、場面の轉換や、科白の變化や、脚色の面白味等に於いて、物足らぬ所があるであらう。また作者の特別な哲學や人生觀を現はす爲めに書いたものでもないから、近代の人の要めるやうな、或る種類の深刻味は求められぬであらう。けれども事實を事實として書いたものと見、作者が想像の眼に描いた幻影を、其の儘に寫したものとすれば、實によく出来てゐると云つてよい。第一に筋の運び方が、いかにも自然でそして巧みである。まづ、御使が上陸して聲々に流人を尋ねる。|| 留守を守つてゐた俊寛が、唯だ一人、之れを迎へたが、赦免狀に自分の名が無いのを見て驚く。|| 所へ、他の二人が歸つて來て讀んで見たが、結果は同じく、自分一人だけが恩赦から除かれてゐる。|| 彼れは先づ天に仰ぎ地に俯して獨り愁歎する。|| 次ぎには、二人に對して哀願し愚痴をいふ。|| 二人に慰められる。|| 舟が出ようとする、狼狽して又哀願する。|| やがて、二人の形見が提出される。|| やがて、舟が纜を解いて出る。|| 慌てゝ綱に取りついたが、

引却けられる。|| 舟が段々遠くなる、跡に見えるのは白浪ばかり、|| 高きに登つて遙かに舟を招く。

|| 松浦小夜姫にも劣らぬ心持であつたであらう。其の夜は海邊に明かし、頼まれぬ人の情をあてにして、死ぬべかりし命を存へたのは果敢ないことであつた。|| といふのであるが、いかにも順序がよく立つて、うまく始め、よく續け、よく轉じ、よく收めて居るではありませんか。

第二には、俊寛に花を持たせて、同情して書いた所がよい。第三には、三人の流人と御使と四人の性格を、明らかに描いたといふ程ではないが、とにかく、残る者と、召し還さるゝ者と、二人を伴ひ一人を残して行く使者と、三方面の餘儀なき事情を、それ／＼に汲み取つて、簡單ながら、素直に自然に書いて居る所がよい。第四には、同じ事を繰返すにも、相應に變化をつけて、更に重複單調の感じを起させぬ所がよい。例へば、「二人とあつて、三人とは書かれず」といふ同じ事を書くにも、初めには俊寛一人の事とし、「奥より端へ讀み、端より奥へ讀み」と丁寧に書いて、(序ながら初めに「端より奥へ」と云はずして「奥より端へ」と書いたのなども、かういふ場合の人情を如實に見せて、注意が行き届いてゐる。)

二人とばかり書かれて、三人とは書かれず。

と言ひ、やがて二人の所作になつては、「取つて見るにも」、「讀みけるにも」と、あつさりと書いて、

二人とばかり書かれて、三人とは書かれざりけり。

「書かれてはゐないであつた」と、決定的、絶望的、咏嘆的に言つて居るのも、巧みな描寫といふべきであらう。或ひは「舟に乗せよ」の哀願も、三度まで繰返されて居るが、初めには、

赦され無ければ、都までこそ叶はずとも、せめては此の船に乗せて、九國の地まで着けてたべ。と、丁寧に敬語まで付け、次ぎには、「日來の情も今は何ならならず」と、皮肉の恨みを添へ、

「せめては此の船に乗せて、九國の地迄」と口説かれけれども、

と云つて、後を略し、最後には、前の依頼が、もう捨鉢的の命令と變はつて、

是れ乗せて行け、具して行けと宣ひて、喚き叫び給へども、……

といひ、而も「乗せて」「具して」と、詞を變へて、二度繰返して居るなど、同中に異あり、異中に同ある呼吸を、うまくも手に入れたものではありませんか。其の上に『平家』式の物がなしい哀調があらはれて、奢る平家の淋しく滅び行くべき運命を豫示して居る趣のある事などを思ひ合せると、此の一篇をば、短いながらに、よく人を寫し、事を寫し、時代を寫し、人間の運命を寫して居ると云つても、必ずしも過言ではあるまいと思ふのであります。

第十三 兩馬の鐵燒

—

諸行無常盛者必衰が『平家物語』の大切な基調だからとて、かう濕つぽい事柄ばかりがつゞいては、お話が滅入つて仕様がありません。ちと氣を換へて、勇ましい武人の心意氣の現はれた題材に轉じませう。まづ、卷第四、源三位頼政が高倉宮に平家討伐の、謂はゆる「謀叛」を御勧めして、旗上げをする、その初めの挿話として、彼れが郎黨渡邊競が、機轉の勇ましい物語を擧げて見ます。

明くる十六日、高倉宮の御謀叛起こさせ給ひて、三井寺へ落ちさせ給ふぞやと、申す程こそありけれ、京中の騒動斜めならず。抑、此の源三位入道頼政は、年頃日頃も有ればこそ有りけめ、今年如何なる心にて、謀叛をば起こされけるぞといふに、平家の次男宗盛卿の、不思議の事をのみし給ひけるによつてなり。されば人の世に有ればとて、坐ろに言ふまじき事をいひ、すさまじき事をするは、能く／＼思慮あ

るべき事なり。喩へば其の頃三位入道の嫡子、伊豆守、仲綱の許に、九重に聞こえたる名馬あり。鹿毛なる馬の雙びなき逸物、乗り、走り、心向け、世に有るべしとも覺えず。名をば木の下とぞ云はれける。宗盛、卿使者を立て、聞こえ候名馬を賜はつて、見候はゞやと宣ひ遣はされたりければ、伊豆守の返事には、さる馬を持つて候ひしを、此の程餘りに乗り疲らかして候程に、暫らく勞はらせんが爲めに、田舎へ遣はして候と申されければ、さらんには力及ばずとて、其の後は沙汰無かりけるが、多く並み居たりける平家の侍共、あつばれ其の馬は一昨日も候ひし、昨日も見えて候、今朝も庭乗し候ひつるなど、口々に申しければ、さては惜むござんなれ悪し乞へとて、侍して馳せさせ、文などして、一時が中に五六度七八度など乞はれければ、三位入道これ聞き、伊豆守に向つて宣ひけるは、たとひ黄金を以て丸めたる馬なりとも、それ程人の乞はうずるに、惜むべき様やある、其の馬速かに六波羅へ遣はせとこそ宣ひけれ。伊豆ノ守力及ばず、一首の歌を書き副へて、六波羅へ遣はさる。

戀しくは來ても見よかし身に添ふる

かげをばいかゞ放ちやるべき。

宗盛卿、先づ歌の返事をば、し給はて、あつばれ馬や、馬は誠に好い馬で有りけり。されども餘りに惜みつるが憎きに、主が名乗を鐵燒にせよとて、仲綱といふ鐵燒をして、既にこそ立てられけれ。客人來て、聞こえ候名馬を、見候はばやと申しければ、其の仲綱めに鞍置け、引き出せ、乗れ、打て、はれ、なんぞぞ宣ひける。伊豆守此の由を傳へ聞き給ひて、身に代へて思ふ馬なれども、權威に附いて取らるゝさへあるに、剩へ天下の笑はれ草と成らんずる事こそ、安からねと、大きに憤られければ、三位入道宣ひけるは、何條事のあるべきと思ひ侮つて、平家の人共が、かやうのしれ事をするにこそあんなれ。其の儀ならば、命生きても何にかはせん。便宜を窺ふにこそあらめと宣へども、私には思ひも立たれず、高倉宮を勧め申されけるとぞ、後には聞こえし。

これにつけても、天下の人、小松大臣の事をぞ、忍び申しける。或る時大臣參内の次に、中宮の御方へ參らさせ給ふに、八尺ばかりありける蛇の、大臣の指貫の左の

輪を這廻りけるを、重盛騒がば女房達も騒ぎ、中宮も驚かせ給ひなんずと思召し、左
 の手にて尾を押へ、右の手にて頭を取つて、直衣の袖の中へ引き入れ、些も騒がず、
 つい立つて、六位や候ふ、六位や候ふと召されければ、伊豆守仲綱、其の時は未だ
 衛府の藏人にて候はれけるが、仲綱と名乗つて参られたるに、此の蛇をたぶ。賜は
 つて弓場殿を経て、殿上の小庭に出てつゝ、御倉の小舎人を招いて、是れ賜はれと
 言はれければ、大きに頭を掉つて逃げ去りぬ。伊豆守力及ばず、我が郎黨の競を召
 して、これを賜ふ。賜はつて捨て、げり。其の朝小松殿より、好い馬に鞍置いて、
 伊豆守の許へ遣はすとて、さても昨日の振舞こそ、優にやさしう候ひつれ。是れは
 乗一の馬で候ぞ。夕に及んで陣外より、傾城の許へ通はれん時、用ゐらるべしとて
 遣はさる。伊豆守大臣の御返事なれば。御馬畏つて賜はり候ひぬ。さても昨日の御
 振舞は、還城樂にこそ、似て候ひしかとぞ申されける。如何なれば小松殿は、かや
 うに優なるためしも御座せしぞかし。此の宗盛卿は、さこそなからめ、人の惜む馬
 乞ひ取つて、剩へ天下の大事に及びぬるこそうたてけれ。去程に同じき十六日の夜



馬は誠は好い馬あてりけり

に入つて、源三位入道頼政、嫡子伊豆守仲綱、次男源大夫判官兼綱、六條藏人仲家、其の子藏人大夫仲光已下、混兜三百餘騎、館に火かけ焼き上げて、三井寺へこそ参られけれ。

爰に三位入道の年頃の侍に、渡邊源三競瀧口といふ者あり。馳せ後れて留まりけるを、六波羅へ召して、など汝は相傳の主、三位入道が供をばせて、留まつたるぞと宣へば、競畏つて申しけるは、日來は自然の事も候はゞ、眞先かけて命を奉らうとこそ存ぜしか、今度はいかゞ候ひつるやらん、かうとも知らせられざりつる間、留まつて候と申す。宗盛卿これにも又兼參の者ぞかし。先途後榮を存知して、當家に附いて奉公せうと思ふ、又朝敵頼政法師に同心せんとと思ふ。有りの儘に申せとこそ宣ひけれ。競涙を、はら／＼と流いて、たとひ相傳の好み候とも、如何か朝敵となれる人に、同心をば仕り候べき。只だ殿中に奉公致さうずる候と申しければ、大將さらば奉公せよ、頼政法師がしけん恩には、些も劣るまじきぞとて、入り給ひぬ。朝より夕に及ぶまで、競は在るか、候ふ、在るか、候ふとて伺候す。日もやう

やう暮れければ、大將出でられたり。競畏つて申しけるは、誠や三位入道は、三井寺にと聞こえ候。定めて夜討なんどもや向けられ候はんずらん。三位入道の一類、渡邊黨、さては三井寺法師にてぞ候はんずらん。心憎うも候はず。罷向つて擇討なども仕るべき。さる馬を持つて候ひしを、此のほど親しい奴めに盗まれて候。御馬一匹下し預り候はゞやと申しければ、大將尤もさるべしとて、白葦毛なる馬の、南鐐とて祕藏せられたりけるに、好い鞍置いて競に賜ふ。賜はつて宿所に歸り、早日の暮れよかし。三井寺へ馳せ参り、入道殿の眞先かけて、討死せんとぞ申しける。日もやう／＼暮れければ、妻子共をば彼處此處に立ち忍ばせて、三井寺へと出立ちける。心の中こそ無慚なれ。狂紋の狩衣、菊綴大きらかにしたるに、重代の着背長、緋緘の鎧着て、星白兜の緒をしめ、いか物作の太刀を帶き、二十四指いたる大黒の矢負ひ、瀧口の骨法忘れじとや、鷹の羽で矧いだりける的矢一手ぞ差し添へたる。滋籐の弓持つて、南鐐に打乗り、乗替一騎打具し、舍人男に持楯脇挟ませ、屋形に火かけ焼き上げて、三井寺へこそ馳せたりけれ。六波羅には競が屋形より、

火出来たりとて驚きけり。宗盛卿急ぎ出でて、競は在るか、候はずと申す。すは彼奴めを手延びにして、たばかられぬるは。あれ追懸けて討てと宣へども、競は勝れたる大力の剛の者、矢續早の手きゝにてありければ、二十四指いたる矢では、先づ二十四人は射殺されなんぞ。音なせそとて、進む者こそなかりけれ。

只今しも三井寺には、渡邊黨寄合つて、競が沙汰ありけり。如何にもして此の競瀧口をば、召し具せられ候はんずるものと、口々に申されければ、三位入道競が心を能く知つて宣ひけるは、無下に其の者捕へ搦められはせじ。入道に志深き者なれば、見よ只今参らうずるぞと宣ひも果てぬに、競つと参りたり。さればこそとぞ宣ひける。競畏つて申しけるは、伊豆守殿の木の下が代はりに、六波羅の南籙をこそ取つて参つて候へ、参らせ候はんとして奉る。伊豆守斜ならず悦び給ひて、やがて尾髪を切り、鐵焼をして、その夜六波羅へ遣はさる。夜半ばかりに門の内へ追ひ入れたりければ、既に入つて、馬共と噛ひ合ひければ、其の時舍人驚き合ひ、南籙が参つて候と申す。宗盛卿急ぎ出でて見給ふに、昔は南籙、今は平宗盛入道といふ、

鐵焼をこそしたりけれ、大將悪い競めを、斬つて捨つべかりける者を、手延びにしてたばかられぬることこそ安からね。今度三井寺へ寄せたらんずる人々は、如何にもして、競めを生捕にせよ。鋸で首斬らんと、躍り上り躍りあがり怒られけれども、南籙が尾髪も生ひず、鐵焼もまた失せざりけり。

二

語釋 申す程こそありけれ。申す直ぐに、言ふか云はぬに。○斜ならず。好い加減一通りでなく、大層に。○年頃日頃も有ればこそありけれ。妙な言ひ廻しの語法でよく解らぬ。是れまでも、無事におとなしくして居られるからこそ居つたであらうに、といふ事か。或ひは、是れ迄も謀叛を起こすならば起す機会もあつたであらうに、どうして擇りに擇つて、今年謀叛を起こしたぞ、といふ事か、多分此の二つの中であらう。後の方でもあらうか。○不思議の事。當時の特別な用例で、亂暴な事、怪しからぬ事といふ意。道理を超越した不可思議といふことではない。○世に有ればとて。成功して世に有り甲斐のある立派な境涯になると。有り甲斐なしに落魄れた事を「世になし」と云つて、「世になし源氏」などいふのがその反對の意である。○すゝろに。思ふまゝ、心の進むまゝに。○喻へば。此の時分の詞辯で、「申さば」といふのは「といふ位」の意。別に譬喩を引くといふのではない。若し字をあ

てるなら、寧ろ「例」の字であらう。○九重。琵琶の方では、クヂウと讀むといふことである。民間のみならず、雲深き宮中まで聞こえたといふこと。○乗り、走り、心向け。乗り心地はよし、早走りではあり、性質は素直で可愛ゆし、三拍子揃つて申分がないといふ事。○勞らせん。骨休めさせる事。○田舎。當時の讀みくせで、デンジャと云つたのである。○あつばれ其の馬は一昨日も候ひし、昨日も見えて候、今朝も庭乗し候ひつるなど……。侍共が口々に、「へい、圖々しくそんな事を申しましたか？」

甲「其の馬は、一昨日も居りましたがね。」

乙「なアに、昨日も見まして御座います。」

丙「今日の今朝も、現に、あの屋敷で庭乗をして居りましたよ。」

といふのである。漸層的に段々調子を高めて、「一昨日」が「昨日」になり、而して「今日」になり、「候ひし」(唯だ居たといふ丈)が「見えて候」(眼前に見た)になり、最後に「庭乗し候ひつる」(現に其の家の庭で乗廻しつゝあつた)になつた所が、面白いではないか。かうせり上げられて、暗愚の宗盛、かつと激して圖に乗つたのであらう。實にうまく書いてある。○扱は惜しむござんなれ。惜しむにこそあるなれで、「では、惜しさにだましたのだな。憎い奴だ。無心してやれ。」といふのである。「悪し。乞へ。」なども、一々終止段どめで、小刻みに切つた所が面白い。○たとひ黄金を以て丸めたる馬なりとも。簡潔で面白い。長門本には「當世あの人々の言葉をかけんをば、たとひ白がねこがねをまろめたる馬なりとも、惜しみおきては、家の中にて乗らんするか。使の又來ぬさきに、急ぎ其の馬

つかはすべし。」など、念を入れて書いてあるが、これでは少し冗漫過ぎて面白くない。悉くとは云へぬが、大體流布本が、文章的藝術的に見て、一番よく出来て居る様である。○戀しくは來ても見よかし。影に馬の毛付の鹿毛を添へたので、「それほど欲しく戀しくは、こちらへ來て見られるがよい。形に影は離れぬもの、私と愛馬の鹿毛とは、形と影との様に離れぬ仲ぢや。どうしてこれが手ばなされませうか。」といふ意。○鐵燒。燒金をあて、文字や繪などを現はすと、謂はゆる烙印。○其の仲綱めに、鞍置け、引き出せ、乗れ、打て、はれ、なんとぞ宣ひける。馬をすっかり人間扱ひにして、馬への詞を通して仲綱を嘲つたので、一つぐをコロくと獨立に列叙して、「鞍置け」、「引き出せ」、「乗れ」、「打て」、「はれ」と、終止どめに書いた所が面白いのである。かういふのを「鞍おき、引き出し、乗り、打ち、はれ。」と、束ねると、前の數句が悉く最後の一句の附屬句となつて了ふが、「鞍おけ」、「引き出せ」と、一つぐに極めると、其の一つぐが粒立つて、獨立して見えて來るから面白いのである。近松巢林子の「心中天の網島」に、馴染の遊女が一人の士と睦言して、拜んだり、囁いたりして居る所を、其の女の馴染客が、障子の外から覗いてゐる心持を寫して、「拜む、囁く、囁えるさま、胸をおさへさすつても堪忍ならぬ。」と書いて居る所がある。「拜む」、「さ、やく」、「囁える」と、一々終止言式に獨立させたから、一々の舉動が粒立つてありありと現はれ、同時に其等の舉動を一纏めに概括する餘裕のない男の、逆上させた心持を立派に寫し得たのであるが、若しこれを「拜み、さ、やく、且つ囁えるさま」といふ風に、束ねて寫したならば、叙事がすっかり死んで、知識的の概括記事となるであらう。

その仲綱めに、鞍おけ、引き出せ、乗れ、打て、はれ。

の趣致は、つまりかういふ面白味で、擬人と列叙との妙趣を、一舉にして表現したのである。○笑はれ草。笑はれる材料。嘲笑の目的物。○何條事のあるべきと思ひ悔つて。どれ程嘲弄したとて、何程の事があらうと、吾々を馬鹿にして、平家の人々が斯様な悪戯をするのであるといふ事。「しれ事」は愚かな事、馬鹿な真似といふ意。「何條」は「何んでふ」で「何といふ」といふ事。即ち「これといふ程の事をし得ぬ」といふ意。本來「條」の假名は「でう」であるが、誤つて「でふ」に用ゐたのである。○便宜を窺ふにこそあらめ。機會をねらつて謀叛を起さうといふ事。○忍び申しける。「しのぶ」は心中ひそかに感服する事。床しく思ひ出づるといふ事である。○指貫の左の輪。指貫は衣冠の時に穿く袴の一種。裾の輪に紐を指し通して締め括る所から出た稱。裏を表より少し長くするのが式で、其の赤い裏のきれが表より餘つて下つた所を輪といふ。つまり輪形をなした袴の裾といふ事である。○驚かせ給ひなんす。驚かせ給ふべしといふこと。こんな處の「なんす」は「なんとす」と解くよりも「なんぞ」と解く方があたるやうである。○つい立つて。無造作にすつと立つたといふ事。○六位や候ふ。「候ふ」は「居るか」といふ事。六位は六位の藏人のこと。藏人所の西の廂に六位の藏人の詰所があり、南の廂に五位の藏人の詰所があつた。こゝは「六位の藏人が居るか」といふ意味で、重ねて呼ばれたのである。そして内府は無論「六位の藏人や候ふ」とは呼ばずして、「六位や候ふ」と呼ばれたのであらう、又さう呼ぶのが自然であらうが、一つは其の次ぎに「……と召されければ、伊豆守仲綱、其の時は未だ衛府の藏人にて候はれけるが」と受けさせるので、重複せぬやう、變化をつけ

る爲めに、前後で補ひ合ひ、助け合はせたのである。これを若し「六位の藏人や候ふ」と召されければ……六位の藏人にて候はれけるが」と、同じ事を丁寧な繰返しては、すつかり下手な繰返しの野暮な文章となるであらう。昔の文章家の注意が可なり細かい所に及んで居ることが、之れによつて知られる。○賜ぶ、賜はつて。前の句の尻をすぐに受けて、尻取文句の連鎖式にしたところが面白い。○弓場殿 校書殿のこと。清涼殿の南に校書殿と云つて、書冊を納めておく建物がある。其の東北に弓場がある。賭弓を行ふ所であるが、此の愛嬌の遊戯で記憶される弓場の隣接して居るのに因んで、校書殿が弓場殿とも稱へられた。○是れ賜はれ。これを戴いて行つて然るべく處分せよ、といふ命令の味。○伊豆守力及ばず、我が郎黨の競を召して。蛇を捨てさせる位には、小舎人や小使位が相應で、歴とした我が郎黨を煩はすのは勿體ないが、始末する物が「蛇」といふ厄介物なので、據らなくといふのが、か及ばずの意味である。○優にやさしう。當時の武人には、かういふ事が優にやさしいと思はれたと見える。悠然と落ちついて、心の裏の勇敢を心憎く包むといふのであらう。○乗一の馬で候ぞ。うまい文句である。乗り心地よき日本一といふ意。○陣外より傾城の許へ。傾城は傾國傾城など云つて、容色を以て君主を迷はし國をも城をも傾けしむる魅力のある美人の事、専ら遊女の事に用ゐられる。夕方其の日の勤務が済んで、衛府の官人の詰所から馴染の女へ通ふ時といふ事。重盛なかく味な事を云つたと見える。○大臣の御返事なれば。詞不足で曖昧だが、大臣への御返事だから、長つて恭しく述べたといふ事であらう。諸本にこの通りある。○還城樂。舞樂の曲の名で、懸蛇樂とも見蛇樂とも言ひ、作り物の蛇を弄んで舞ふ曲といふ事である。此の曲はもと、唐の玄宗皇帝が韋后

を誅して城に還つた時に作つたもので、但しその舞には蛇つかひの振がないといふ事である。長門本にはこれを重盛が仲綱を褒めた詞として、「其の朝に、内府自筆に狀を書きて、仲綱がもとへ遣はされける。よべの御振舞、還城樂とこそ見奉つて候ひしか。是れへ申してこそ参らすべく候へども、驚馬一疋、秋霜一佩まるらせ候。」と書いてある。長門本の作者が、變はつた見識の趣向を見せたのであらう。重盛も蛇をつかんで来たのだから、蛇つかひに見立てられてもよからうが、蛇つかひの藝としては、仲綱の方に見立てるのが自然らしい。「驚馬一疋秋霜一佩」なども、ひどく面白い。○いかなれば小松殿は優なるためしもおはせしぞかし……。『いかなれば』は、小松殿以下宗盛卿云々迄を一團と見て、それにかゝるのであるが、分けて見れば、「この宗盛卿は」にかゝるとも云はれる。全體の意味は、「小松殿は一寸した事に對しても、かういふ優美風流な取扱をされたではないか。兄君の此の御手本があるのに、何とて、此の宗盛卿は、それ程の事が出来ぬ迄も、せめては、人の馬を無心するなどいふ亂暴をせぬ丈の嗜みなりともないのだ？ この卿が平家の棟梁であり乍ら、人の惜しむ馬を奪ひ取つて、そのみならず、天下の大事を惹き起こしたといふのは、情ない事であるといふ意。これは文脈が中途から逸れたので、本來は「いかなれば宗盛卿は……人の惜しむ馬を奪ひ取つて天下の大事に及びぬるぞ。……及びぬるこそうたてけれ。」といふべきを略したのであらう。「この宗盛」の「この」は、一つはかの重盛に對して、「この宗盛」といふため、一つは憎々しい味を出す爲めの添詞。「うたて」は物のいやが上に重なる事で、おもに悪い事の重疊することに用ゐられるやうになつたのである。○混兜三百餘騎。「ひたかぶ」とは、本装束の甲冑武者ばかりが、ひた／＼と續いたといふ事で、三百餘騎

が全部兜をつけて居たといふ事。○年頃の侍。幾年來久しく目をかけて来た侍といふと。○渡邊源三競の瀧口。源三は俗の名。瀧口は官名、禁中警固の武士。御溝水の落ち合ふ處に陣してゐるので瀧口といふ。○六波羅へ召して。六波羅は平家の邸宅のある所。即ち宗盛が平家の屋敷へ呼んだといふと。○相傳の主。父祖代々相傳へて仕てゐる主君。○これにもまた兼參のものぞかし。「これにも」は我が屋敷にもといふこと。汝はかねて當邸にも出入して居る者ではないかといふ意。○先途後榮を存じて。これから先々の事を考へ、平家に仕へれば、後には大いに立身するといふことを合點して。○朝敵頼政法師に同心せむ。琵琶の方では「ライセイハフシ」と、音で讀むことになつてゐる。「法師」といふ語があるから、僧侶のやうによむのである。朝敵である頼政法師の味方をしようと思ふか。○相傳のよしみ候とも。父祖代々仕へたといふ宿縁はあつても。○殿中に。此の六波羅の御殿の中の意。○當人の宗盛に向つていふから、汎語を以て「御やしき」といふ方が禮なのである。○恩。待遇。○競はあるか。候ふ。あるか。候ふ。これも地の文を省き、對話文で文を運んだので、宗盛が「競は居るか。」といふと、競が「居りまする。」といふ。又宗盛が「居るか。」と云ふと、「居りまする。」と問ひつ答へつしてゐるといふと。後の「あるか」は「競はあるか」を略して變化をつけたのである。○大將出でられたり。前の「入り給ひぬ」に對したので、「入る」は奥に入つたと。「出でられ」は侍所に出て来た事。○心憎うも候はず。「心にくう」は奥ゆかしいといふと。即ち彼れは尊ぶべき武人だと畏敬されて、恐るゝに足る程の者もなし、出で向つて、雜兵には目をかけず、よい武者を選み討ちにしたいと思ひますが、それについて残念なは、然るべき馬を持つて居りましたのを、つい此頃親しい者

に盗み取られました事で、といふこと。「さる馬」は然るべき立派な馬。○尤もさるべし。いかさまさうもあらう。尤、最、ともにもとは最大級の副詞であつたが、近ごろは「最」が専ら最大級の副詞に用ゐられ、「尤」は専ら「いかにも」とか「但し」とかいふ意味に用ゐられる様になつた。○南嶽。純白の馬といふ意味の美名。煖廷、南廷とも書く。南嶽は、もと上等の銀の事で、白金即ちプラチナの事であるともいふ。此の馬、白蘆毛とて雪白なる故に、しか名づけたのである。○心の中こそ無慙なれ。「無慙」は佛語、もと恥づるなきの意で、破戒無慙、放逸無慙などつづけて用ゐるが、こゝは轉じて「むごい」氣の毒「同情に堪へた」といふやうな意。無慙馬の意で無慙と書くべきだといふ説もある。かうして迄相傳の主君に盡くす心根を考へると、實にむごい氣の毒の至りだといふと。○狂紋の狩衣の菊綴おほらかにしたる。「狂紋」は豹文又は平紋とも書いて、種々の色模様をまぜて色どつたもの、「菊綴」は、直垂狩衣などの縫留に、組緒を綴ちつけ、其餘りをわがねて押しひらめたる總のと。その様が菊の花に似たので菊綴といふ。「おほらか」は大きくて、普通のものより大形にしたこと。○重代の着背長。祖先傳來の家寶の鏡。着背長、唯だ着脊とも書く。大將分の着用するもので、普通のより少し脊を長くする所から云ふ。また着長の義にて腹巻、胸丸より草摺の長ければ、ともいふ。○星白兜の緒をしめ。兜の鉢の上なる小凸起を星といひ、その星に銀を被せたのを「星白」といふ。「緒をしめ」は、兜をしつかりと冠つて、しのびの緒を結んだといふ事。○いかものづくりの太刀を佩き。「いかもの」は「噴物」或ひは「怒物」と書く。すべて作りの大きく嚴めしき事。○二十四さいたる大中黒の矢負ひ。「二十四さいたる」は箆にさしたる矢の數。「大中黒」とは矢の羽の模様。鷹の羽の中程が

黒く上下の白きを中黒といひ、黒き所の長く續いたのを大中黒といふ。二十四本、廿五本は大人の武人に普通の數で、鎮西八郎は三十六本を負ひ、十三歳の頼朝は十二本を負うたとある。○瀧口の骨法忘れじとや、鷹の羽ではいだりける的矢一手ぞさし添へたる。瀧口の武士の特得無二の作法を忘れずして、此の際にも紀念しようといふ心から、征矢の外に鷹の羽ではいだ的矢二筋をもさし添へたといふ意。瀧口の武士の幼い者は、御免を蒙り、禁庭で的矢を射て、御覽に供する故實がある。それから瀧口の武士は箆に征矢をさす外に的矢一手を添へるので、これを瀧口獨特の面目としてゐるのであつた。「骨法」は瀧口が誇りの骨とも眞髓ともいふべき特別作法といふこと。「鷹の羽」は熊鷹の羽。「一手」とは内向き外向きの二本の事。「的矢」は人を射るのでなく、的にあてる儀式の矢のこと。○滋藤の弓。重藤とも書く。藤蔓をしけく巻いてある故の稱。弓の幹を黒くし、白き藤を長さ一寸位づつ、間を五分位づつ隔てて繁く巻いた弓。大將分の持弓である。○乗替一騎うち具し。「乗替」は自然の事のあつた場合に乗りかへる副馬のこと。馬其ものにもいひ、その副馬に乗る武士をもいふ。こゝは騎馬の家來一人召連れたといふので、競自身の乗る馬は宗盛から貰つたが、並の馬は別に持つてゐるのであらう。「盛衰記」には宗盛から二頭の名馬を買つたとあり、長門本には三頭を買つたとある。○舍人男に持楯脇ませ。「舍人男」は馬の口取のこと。「持楯」は歩楯と同じく、地上に並べる楯楯に對し、手に持つて矢を防ぐので、細長い形のもの。歩武者の用。○星形に火かけ焼きあけて。競自身の家に火をかけ焼きすて、。○すは奴めを手延びにしてたばからぬるは。「すは」は「ソレ！」といふ程の意の感投詞。最後の「は」も同じく感投詞。「手延び」は處置の手遅れになつたと。手飼の動物などをしつ

けるには、繫いだ繩を手許にしかと引きよせておくべきに、伸びをくれ過ぎて、つい逃げられたといふ隠喩の味であらう。「扱は、奴めの見張を怠り、油断してたまされたか。」といふ程の意。○音なせそ。黙つて居ろく。返事をすると、追討を命ぜられるぞといふと。○唯今しも。沙汰ありけり。「唯今しも」は、折も折とて六波羅では、「競が逃げた。」「それ追ひ討て。」「オ、怖や、追つては命があるまい。」など云つて騒いで居る丁度其の折に、といふ味。「沙汰」は噂。○無下にその者捕へ搦められはせじ。「無下」には、「めつたに」位の意。「さればこそとぞ宜ひける。」それ見たとぞか。と仰せられた。「すぐに來るであらうぞ。」といふか言はぬに、競がもうやつて來た。それ見よと云はれた。……君臣相許す武士道の現はれも床しいが、文章も實によく出來てゐる。○舍人驚きあひ。大勢の別當共が彼れも是れもびつくりして。○三井寺へ寄せたらんする人々。頼政の楯籠つてゐる三井寺へ押寄すべき討手の面々。○南嶽が尾髪も生ひず、金焼もまた失せざりけり。生捕にせよの、鋸で首を斬るのと云つて、躍り上り跳ね上つて怒つたが、詮なき腹立や、無駄な豫定の計畫や。いかに怒つた所で、大事な南嶽の毛も伸びまい、恥辱の鐵燒も消えまいぢやないか。外方向いて、平凡な事を云つてゐて、しかもその皮肉が實によく利いてゐる。

三

『平家物語』は平家が榮華の絶頂から歿落に至る迄を、盛者必衰といふ佛教思想の背景をつけて書いたものである。戦と戀と無常との三者を巧みに交錯させ、同時に調和させて書いた、我が國唯一とも

いふべき大叙事詩である。「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり」といふ、しめやかな調子の句で序説を起こして、無数の挿話の十一巻を疊んだ後に、「先帝御入水」のクライマックスを現じ、それから静かに哀絶の悲劇の名残の尾を曳いて、建禮門院が小原の閑居の記事に、その寂しい流通の筆をとどめてゐる、その一篇の結構の壯麗なること、而して何とも云はれぬ美しい悲哀を見せてゐること！この點が同じ軍記物語とはいひ乍ら、他の『保元物語』や、『平治物語』や、『源平盛衰記』や、『太平記』などのかけても及ばぬ點である。そしてこれが此の作が單なる軍物語ではなくして、詩味の豊かな叙事詩だといはれる所以である。

『平家物語』の最も偉大なる價值と趣味とは、無論、その十三巻に通じた全體觀の上にあるが、其の一章々々を獨立させて見た断片觀の上にも亦、云ふに云はれぬ面白さがある。本課の「競」も亦其の一つで、立派な獨立性を持つた一つの物語と見らるべきものであるが、其の味の一つは、先づ興味ある場面の、賑かに而も自然に、意表に出でつゝ、而も不思議に統一されて、次ぎから次ぎへとつゞく事である。先づ、頼政が謀叛の動機は？と云つて、好奇心をそゝるべき問題を提出する。そして其處に名馬木の下に關する仲綱の愛惜と、宗盛の強無心と、皮肉の辱めと、頼政の憤慨とを叙する。次ぎには宗盛と比較して、内府重盛が寛容風流の蛇話、劇中劇ともいふべき、エピソードの中のエピソード

ドが挿まれる。扱いよく、高倉宮を擁しての三井寺行きとなる。同時に置去りにされた瀧口競が、故主の薄遇を種に一狂言を書き、故主に棄てられ、二君に見えるといふ二重の灰色な恥辱の間から、意外にも崇高なる武士道の花を咲かせる。而して自ら面目の花を咲かせるのみならず、同時に老主人の頼政には、武將らしい先見の明の名を成させ、若主人の仲綱には、木の下烙印の恥を雪がせる。而して最後に暴慢不思議の言行によつて、大事件「宮軍」の種を蒔いた宗盛が、報復の苦き盃を満喫させられ、雲上の内大臣が、哀れや尾髪もない畜生となつて、地だんだ踏んで悔しがる。といふ、この通り出意表的な、堪らない興味の場面々々の連続であるが、それが實に仲よく自然に連つて、一種の統一された全一の印象を與へるといふのは、面白いではないか。

興味の第二は、それとなく興へる物訓へである。隱約風化の教訓である。元來鎌倉室町の文學には知識的教訓的なる傾きがあつて、文學史家の中には、此の傾向に最大特色を見出だす人（例へば芳賀矢一博士の如き）もあるが、『平家』にも、やはりさういふ所があつて、此の物語のおもなる興味の一つをなして居る。此の章の「競」なども、此の特色を最も豊かに分前したものであらう。さて本文を見ると、先づ初めに、「人の世にあればとて、すゞろに言ふまじき事を言ひ、すまじき事をするは、よくよく思慮あるべき事也。」と、抽象的總括的の注意を與へて、あとはすツツかり、藝術の分野に自由の

筆を驅使して居るが、その間にも、それとなく人に道を考へさせ、身を顧みさせるところがある。先づ、仲綱が名馬を愛するのはよいが、物惜しみして、虚言までして長上を詐り、而して人目につく處で、毎日其の馬を弄んで居るのは、貪慾、不信、不謹慎の譏を免れぬであらう。宗盛が言行の言語道斷なることは言ふまでもない。天下を料理する執柄第一の身でありながら、他人の、目下の、而も敵筋なる源家の若者の玩愛に目を着けて、權柄づくに無心をするさへあるに、強もてに奪ひ取つて、取つた後に、贈主を皮肉に弄ぶなどは、見下げ果てた根性と云はねばならぬ。之れに對して見上げたのは小松内府重盛で、些細の事をも見のがさずして、我が玩愛を贈り、而も其の間に寛厚風流の味を見せるなどは、誠に敵を懐け、仇をも感せしめる用意と云ふべきである。かくして源三位頼政は、私怨を報いんがために、十二分の用意をも整へずして王族を煩はしたが、これは一面不忠でもあり、また不謹慎でもあらう。瀧口競に至つては、此の章の花形主人公として、忠義と機智と武勇とに於いて、武人の典型ともいふべき光りを見せて居る。かれは大事に伴はれずして主を恨まぬのみならず、それを利用して更に君恩に報いんとした。その報恩の狂言を首尾よく演じ了へんが爲めに、先づ主家を辱めた宗盛に一喜一憂の煮湯を飲ませた。堂々と都を立ちのいて、瀧口好みの装ひに職の誇りを見せ、その知れ渡つた手竝は追手の追撃を不可能ならしめた。「寺」に着いては、老いたる入道をして、先見

の誇りに微笑ましめ、若き仲綱をしては、久しく胸に痞へた木の下事件の留飲を下げさせた。世界第一の阿呆は、此の宗盛である。彼れはその心根の卑しさが因となり、他の馬欲しさに蒔いた種を刈らねばならなくなつて、仇を扶持する。名馬の愛馬はまんまと欺き取られる。剩へ畜生扱ひまでされて、悔しまぎれに當てにもならぬ鋸引きの駄々を捏ねた。並べれば斯うであるが、それが少しも表立たずして、讀者が「うまく書いて居る。」「優れた藝術品だ。」と、感に入つて居る中に、いつしか一種の人生觀的教訓を吹き込まれるやうになつて居るのである。面白いではありませんか。

「興味、第三は、第二の興味を他の方面から見たので、多少重複の嫌ひはあるが、人情の面白く出て居る事、殊に君臣相許す、武士道の根本義の面白く出て居る事である。身に副ふ影のやうに愛して居る名馬を手放しかねるのは、人情であらう。そして惜しむ餘りに虚言を構へるのも、一種の深い人情であらう。瞞されたのに腹を立て、追ッかけ無心の、矢の催促をするのも、高家の驕慢兒としては自然の人情であらう。」殊に巧みな日和見と楫取とによつて、同族皆滅の間に只一人成功して來た老巧の入道が、「今の時勢に、あの人達が目をつけた物を、白金黄金で丸めた馬だとして、惜しむべきではない。惜しんだところで、家の内で馬乗りが出来るか。」など云つて、因果を含める所は、實に尤も過ぎて涙もこぼれぬべき人情である。又これを大きな時代進轉の上から見ると、頼政一家が保元以來慘

憺たる苦心によつて、辛うじて築き上げ、持ちこたへて來た榮華が、一朝に夢と消えて、それが大きな平家一族のやがて逢ふべき運命を豫示して居るのも面白く、此の慾と意地との不純なる動機から出た犠牲の合戦が、一種の捨石となつて、源氏興隆の端を開くのも、造化の配劑の微妙な自然さを見せて、何とも云はれぬ味である。それから、競が源三位入道に一身を捧げて、あらゆる辛苦を物ともせぬ忠節、入道が年頃の郎黨に打ち込んで、危急存亡の場合に露ほども疑はぬ信頼、そして此の二つがびつたりと相合した即刻の光景を寫して、

見よ只今參らうするぞと宣ひも果てぬに、競つと參りたり。さればこそとぞ宣ひける。

と云つた味はひ、面白いではありませんか。

興味の第四は、同類糾合の面白さである。此の一篇は馬に始まり、馬に央し、而して馬に終はるやうに出來て居る。而も三匹の馬が悉く名馬で、その馬の取扱方がまた悉く變はつて居るから面白い。第一は仲綱の「木の下」で、宗盛がくれろといふ。否だと答へる。是非くれろとせがむ。仕方なく、未練の歌を添へてやる。貰つた上で皮肉をいふと云ふのである。第二の馬は、重盛が「乗一の馬」である。これはやるにも及ばぬ名馬を、期待もせぬ所へやつて、しかも八方に快感を興へ、日本一の男を上げるといふのである。第三は宗盛が雪白、プラチナ色の「南鏡」である。これは我が慾の爲めにマン

マと欺き取られ、向うの敵に二重三重の手柄をされて、而して自分は馬を通ほして、すつかり畜生道に墮獄する、といふのである。汝に出づるもの汝に返るといふが、これは馬で出た話が馬に戻るの、而も初めの馬は、無理に乞ひ取つて、返さずして人物を下げ、後の馬は悦んで興へて、而して早速返されて、同時にあつたら顔へ散々に泥を塗られる。あつた事實を大體そのまゝ寫したのではあらうが、同じ様な事を繰返しながら、すつかり變化をつけて、同中に異あり、異中に同ある妙味を十二分に發揮して居る所が面白いではないか。無論かういふ事は、必ずしも作者が特別に趣向したのではなからうけれども、出来た上について見れば、此の點にも兎に角捨てられぬ妙味があると思ふ。

第五の興味は、これは聊かこじつけの様ではあるが、主人公の「競」の名を中心として、一篇全體が「競争」の場面連續に成つて居るといふ事である。一編の首尾が「競イデオロギイ」で出来てゐるといふ事である。『少々愚デオロギイの氣味はあるが』先づ仲綱と宗盛とが「くれる」「やらぬ」で、曳々聲の競争をする。此の競争は幸に老頼政が水を入れたので收まつたが、宗盛が事後の處置振に激して、今度は老功の頼政が昂奮して、平家と競争を始めた。つゞいて挿話として、重盛對宗盛の馬を挾んでの腕較べ競争がある。やがて宗盛と競との智慧競べ、競と平家の侍との膽力比べがあり、また頼政と渡邊黨との先見競べがあつて、到頭瀧口競の大勝利になるといふのである。かう見ると、此の一編が

根柢に於いて、主人公瀧口競の名と精神とによつて繋がれてゐるので、これも、暗々の中に此の文の一大興味を成して居るのであらう。

第六の興味は文章の面白味である。此の文章のうまさについては、已に語釋の處にもほつ／＼言ひ及んで居るが、尙ほ二三を拾ふと、前にも云つた、

「あつばれ其の馬は一昨日も候ひし。」「昨日も見えて候。」「今朝も庭乗し候ひつる。」など、口口に申しければ……」

は、三人三様の告口を、切れ／＼に、しかも漸層的に書いてゐて實に面白い。支那には市に三虎といふ諺もある。論理學には漸層の似而非推論 (fallacy of climax) といふものが、人を誑かす主なる謬論として説かれて居る。例へば、裏切の事實の更に無い人物についてでも、段々噂、陰口の調子を高め、^{「彼奴は裏切する氣かも知れぬ。」}といひ、「裏切しさうだ。」といひ、「裏切したらしい。」といひ、「裏切したといふことだ。」「裏切した。」「確かにした。」「怪しからん。」と、調子を進めて行けば、成程さうかと人が信するやうにもなるであらう。『平家』のこの文句のあしらひには、言ひ表はし方に、さういふ妙味があり、又教訓があつて非常に面白い。

それから三位入道の教訓に「たとひ黄金を以て丸めたる馬なりとも、それ程人の乞はうするに……」

など、比喩が實に面白い。それから「其の仲綱めに鞍置き、引き出せ、乗れ、打て、はれ。」と、一つの命令を獨立させて、言ひ切つたところなど、宗盛が激して取りのぼせて居る趣や、憎々しさを如實に見せて、實に列叙式詞姿の妙を極めて居る。それから、

いかなれば小松殿は、斯様に優なるためしもおはせしぞかし。此の宗盛卿は、さこそなからめ、の「此の」であるが、この二字の爲めに、宗盛が目に見える様になり、作者が、握りかためた拳固に息を吹きかけて、宗盛の頭を叩らうとしてゐる所が見える様で、實に面白い。『平家』にはかういふ一寸した語ながら、特殊の氣分を如實に寫し出だす呼吸に於いて、なか／＼優れた所がある。それから最後に、「競は在るか。」候ふ。「在るか。」候ふ。「とて伺候す。」も、面白いが、殊に面白いのは後の、

宗盛卿急ぎ出でて、「競は在るか。」候はず。」と申す。

の皮肉の味である。これは前なる「あるか」候ふ「／＼」を踏まへて利用した皮肉で、宗盛は「競は在るか。」と云つて、「候ふ」(控へ居ります)と言ふ競自身の返答の續く事を豫期してゐたのであるが、それが他人の聲で、「候はず。」(居りません!)と答へたので、だしぬけの意外にびっくりして、「すは奴めを手延びにして」と慌てたのである。即ち前例を踏まへて意外の味を見せたので、何とも云はれぬ妙味である。昔話にかういふ事があるではありませんか。昔歴々の大名達が或る處に會合された。

話の進む中に、大名達が銘々自分々の屋敷の自慢話を始めた。或る大名は、「邸の庭に酒瓶を置いて、酒を湛へたところが、狸々がまゐる。」などいふ。或る大名は、「牡丹を植ゑたところが、唐獅子が來ては狂ひ居る。」などいふ。すると先刻から笑つて聞いてゐたさる大名が、「手前の庭に桐の木を植ゑ申したところが」といふと、傍らの大名が、口を挿んで、「ハハア鳳凰が來ましたかな。」と云つて笑つた。一同もそれに連れてどツと笑つたが、前の大名すましたもので、「イヤ左様ではござらん。下駄屋が參り申す。」と云はれたので、一同すつかり參つて頭をかいたといふ話がある。云はゞ斯ういふ味で、向うの豫期があるのに乗じて、其の裏をかき、期待をばづした皮肉の面白味である。宗盛は期待がはづれたので意外に驚く、讀者は好い氣味好い氣味と、手を拍つて宗盛を笑ひつゝ、同時に此の文章の牙えに感ずるといふ味であるが、かういふ機轉の文章も、『平家』には處々にしば／＼ある。

無論これは局部々々の短い文句を拾つて見たのに過ぎぬ。『平家』の文章の最大妙味は、その全體を一團として見たところにある。同時にこれを諒解していただきたい。

四

第七の興味は『平家』の作者が、つ拔目のない藝術的敏感である。親切な、克明な、而して大膽な寫實の間に於ける油斷のない想像力の運用である。具體的にいふと、本筋の事件を立派に寫す間に、適切な補助挿話を見出だして全體を引立たせて行く手腕である。私はその最も好い例の一つを、此の章に於ける小松内府の蛇挿話に見出だす。此の挿話は本筋のヒーロー仲綱に關係し、同時に宗盛の兄なる寛厚風流の賢宰相重盛に關係して居る點から見、縁の近さと對照の鮮かさから見て、此處に取り入れらるゝに頗る適當なるものであらう。其の中に名馬の出て来る事は、木の下、南嶽の間に挿まれる話として、また頗る適當なるものであらう。けれども其等よりも更に適切で、此の一篇の記事全體の效果の上に偉大なる貢獻をなして居るものは、瀧口競の點出である。何故であるか。讀者は此の挿話に於いて、先づ瀧口競と近づきになるであらう。而して仲綱に信賴された此の快男兒の面影に心を惹かれつゝ、段々に讀み進むと、やがて頼政が三井寺引揚げの幕となつて、そこに謎のやうな一種特異の姿を現はしたのが、前の挿話に於ける古馴染の瀧口競ではないか。而も前に端役を勤めてゐた競が、今度は檜舞臺の上に堂々とシテ役を勤めて、我が武士道をも揚げ、同時に老若二人の主君の面目をも起こして居るではないか。讀者は之れを見て、「イヤア、彼奴が出て来たぞ!」、「やり居るわい!」やり居るわい!」と、會心の微笑に領きつゝ、舊知の仲間の成功を祝する氣分で、心の内に拍手し、

喝采し、歡呼し、踴躍するであらう。此の異常な、人を打つ面白味は、全く前の挿話に於ける襷染の準備の贏ち得たるものではないか。此の場合に於いて、前の蛇挿話に競を點出した襷染の準備が、いかに後なる本筋の興味の發揚に與つて力があるかは、此の瀧口の挿話なしに突然三井寺引揚げの記事に進んだ場合の物淋しさを想像すれば、容易に理解し得る事である。また此の蛇始末の役目を競以外の他の郎黨が勤めた場合に、後の本筋の記事が、いかに唐突孤立の物足らぬものとなるかも、容易に想像し得ることであらう。私は競の點出が作者の周到なる考慮の結果であるか、偶然の思附であるか、或ひは又事實そのまゝの敷き寫しであるかを知らぬが、とにかく此の挿話に於ける競の存在が、此の一篇の文學的價值と興味との上に偉大なる寄與をなして居る事は、疑ふべからざる事である。長門本と『源平盛衰記』とは、此の蛇處分の役目を競の同族の渡邊省に勤めさせて居る。これは恐らく、此の異本作者が例の複雑主義の現はれて、人物を多くして、變化を附け場面を賑はさんが爲めであらうが、其の藝術的企圖としての失敗は、右の説明によつて明らかなる事である。

そも、添景挿話は、本筋の完成引立に對して微妙甚大の關係を有するもので、其の選擇に關する作家の苦心は一通りのものではない。ジョン・ラスキンが、物を畫く畫家の心得について云つてゐることに、畫家はまづ物の姿を忠實に現はさうとつとめねばならぬが、同時に、直接なる、物質的の現象よ

りも、更に眞實に、更に高尚なる空想的現象を掴んで之れを活用せねばならぬ。此の事の實現はあらゆる美術に大切なる仕事で、而してそれは絶対に想像の領域に屬する事である。(Having learned to re-present actual appearances faithfully, visionary appearance will take place to you which will be nobler and more true than any actual or material appearance; and the realisation of this is the function of every fine art, which... consist absolutely in imagination. の前後を見配つての自由譯)といふやうな事を言つて居るが、ラスキン協會員のマアシャル、メーサー氏 (Marshall Mather) が、之れを例説して居る言の概略に、讀者は英國近代の名高い風景畫家ターナー (Turner) の傑作「戦艦テメレル號」 ("The Fighting Temeraire") を知つてゐるであらう。「テメレル」はトラファルガーの海戦にネルソンの率ゐた艦隊の中、旗艦に次いだ大艦であるが、ターナーの作は、此の名譽の大軍艦が生涯の役目を果たして後、老廢艦として、再び出づまじく港に引き入れらるゝ最後の光景を描いたもので、其の構圖は一方にテメレルの巨艦があり、他の一方にはそれを引いて行く、形は小さいが曳く力の非常に強い蒸氣船がある。これが此の畫の主體で、外に添景として、空の一方には夕陽が物悲しげに最後の光を投げて居り、一方には東の空に今上つたばかりの新月の影が見えてゐる。さて問題は此の夕陽と新月とであるが、作者は此の通りの光景を一度實際に見て、それを畫布の上に再

現したものであらうかといふに、決してさうではあるまい。作者は恐らく一度も斯様な光景を見なかつたのであらう。而して斯ういふ組み合わせとしては、一度も見なかつた夕陽と新月とを、どうして此の場合に配合したかといふと、前者を取り入れたのは、此の一日におさらばを告げんとして、物悲しい最後の光を投げて居る夕日、久しく海波の上で相伴つた此の老廢軍艦の末期をば、別かれを惜むかの如くどんよりと照らしてゐる夕日をあしらす事が、此の場合に於けるテメレルの氣分を現はすに、最も適當だと考へたからであらう。また後者を取り入れたのは、東の空に出たばかりで、まだ光は弱いが、やがて中天に輝くべき新月が、小さい形をして樂々と巨艦を牽いて居る新しい汽船の、急速に發展すべき隆々たる運命を象徴せしめるに、此の上もなく相應はしいと考へたからであらう。要するにターナーは、戦艦テメレルを主題とする此の畫の中心生命を發揮するに適した材料を、廣く八方に求めた結果、唯一最適の添景として、此の夕陽と新月とを得たので、而して此の二つは、共に此の畫家が想像力によつて求め得たところである。

といふやうな事を云つて居る。話が岐路に入つてくどくなつたが、小松内府の蛇挿話くつたはに於ける瀧口競は、まさしく「テメレル」に於ける「夕陽」「新月」ではないか。話は更に横路に入るが、私は常に古文學に引用される古事、古歌、古文などについて、此の種の妥當性の研究の必要なる事を感じてゐる。

例へば『源氏物語』などには、屢々催馬樂風俗歌の類が引き出されるが、多くの註釋研究には、唯だその歌詞の意義についての解釋が與へられて居るのみで、其の特別の歌謠が、何故に其處に引かれたか、又引かれねばならぬかの説明が殆んどない。私の見る所では、『源氏』に於ける成句引用の藝術的値は、第一に其の妥當性にあるので、假りに催馬樂、風俗歌の類だけについていふと、數十篇を存する此の種の歌謠の中で、其の場合々に最も適當で、それ以上に相應はしいものがないといふ妥當者が、あらゆる場合に引かれてゐる様に思はれる。一例を擧げると、『若紫』の卷の中に、源氏が久方振りに葵の上を訪ねられると、女君が例のしぶつて早速出て來られないので、源氏はわびしさに和琴を弾きながら、「常陸には田をこそ作れ」といふ風俗歌を口ずさまれたといふ事を、かう書いてゐる。

例の女君、とみにも對面し給はず。物むつかしう覺え給ひて、あづまをすが搔きて、常陸には田をこそ作れといふ歌を、聲はいとなまめきて、すさび居給へり。

これは常陸の風俗歌と云はれてゐる、

常陸にも田をこそ作れ、あだ心かぬとや君が、山を越え、野を越え、雨夜行きませる。

の一部を擧げたのであるが、此の歌の初めの句の意味は、愚考には、國の常陸に何等の關係があるのではなく、直路に、側目もふらず、一心不亂に田を作つてゐるのといふ事であらう。全體の意は、

私は此の通り、一所懸命に田を作り、家事にいそしんで居るのに、君は吾れを疑つてか、雨夜といふに、野山を越えて、あだし女を呼びに行かるゝ。と云つて、女が男を怨んだので、たとへば、

一心不亂に田つくる我れを、君は疑うてあちら行く、野越え山越えあちら行く。

といふやうな味であらう。而して源氏が此の場合に此の風俗を口ずさんだのは、私は妻戀しさにたまさか來たのに、その妻が例の濫つて、早速は顔も見せず、うち解ける氣色もないのが、ぢれつたい、忌々しい、といふ意を寓せて、「一心不亂にかうして來るに、妹は疑うてあちら向く」といふ下心の不平を漏らされたのであらう。かう考へると、此の歌は源氏の心をそつくり代辯して居るので、此の場合に於ける源氏の心をこれ以上に象徴し、其の心持の表現をこれ以上に引立てるものは、あらゆる郢曲の中に唯だの一つもあらうとは思はれぬ。その唯一無二ともいふべき、掛替の無いのを選択し引用して、當面中心の記事を引立て、作の藝術價値を高めたのが紫式部の偉いところであらうと思はれるが、此の『平家』の一章に於いて、蛇挿話に於ける瀧口競の點出は、まさしく「若紫」の源氏の此の場合に於ける「常陸の風俗歌」ではないか。

かくいへばとて、無論私は此の「兩馬の鐵燒」の一章を、批難すべき點の全くない完全無缺の作と思ふのではない。一二の難を拾へば、先づ仲綱が「木の下」を宗盛に送る時に、

戀しくは來ても見よかし身に添ふるかげをばいかゞ放ちやるべき。

の歌を添へたといふのは、少し理の聞こえぬ話で、穩かには、此の歌をば、まだ拒絶して送らぬ中の作と見るべきであらう。『盛衰記』の作者は、此の不自然不合理に目を着けたのか、之れを中間に於ける拒絶の歌として、

伊豆守は我れだに猶ほ見飽かず、不得心なりと思ひて、猶ほも無しと答へければ、大將は負けじと、一日に二度三度使を遣はし、六七度遣はす日もありけれども、惡しく惜しみて終にやらず、一首かくこそ讀みたりけれ。

戀敷は來ても見よかし身に副ふるかげをばいかゞ放ちやるべき。

と改めて居る。文章はやゝこしく、あくどくて、とても流布本に比ぶへくもないが、筋、趣向の自然といふ點に於いては、『盛衰記』を以て優れりとすべきであらう。

後の方で、もう一つ、競が所持の馬を親しい奴めに盗まれたからと云つて、宗盛から南鐐を乞ひ受け、やがて、三井寺に引きあげる所に、「滋藤の弓持ちて、南鐐に打乗り、乗替一騎打具し、」と書いてあるが、敏感なる讀者は必ず、此の「乗替一騎」の出所に不審を立てるであらう。而して名馬ならぬ凡馬は、盗まれた馬以外にまだ一頭持つてゐたのか、宗盛に對して盗まれたと云つたのは瞞しの手

段であつたのか、或ひは其の一頭は他から盗んが來たのかと想像するであらう。而して此の不安に氣がついたのか、『盛衰記』は宗盛が、初見參の引出物として、競に二頭の名馬を與へた事として、

随分祕藏し給ひたりける、小糟毛といふ馬に具鞍置き、遠山といふ馬引き具し、黒毛威の鎧兜皆具し賜ひてけり。

と改め、而していよゝ三井寺に馳せ參する折には、

大將より賜ひぬる鎧着て、小糟毛に乗り、遠山に乗替の童乗つて、郎等三騎家の子二騎、都合七騎にて、三井寺へとて打出でけり。

と書いてある。長門本は更に念を入れ、二頭の中の一頭に、仲綱が舊愛の木の下したを入れて、先づ初參したる引出物にとて、芦毛なる馬の太く逞しきと、黒鹿毛なる馬の逸物なるとに、鞍置いて賜ひたり。

と書き、而して「御用の時は必ず返上すべく候」といふ約束のもとに、黒鹿毛に代へて木下丸を競に賜はつてけり。

と改めて居る。また三井寺行には、

木下丸には競乗つて、芦毛には乗替の童を乗せ……

と書き、而して、寺に着いて仲綱に見せると、その芦毛が宗盛の秘藏する京中第一の名馬南鎌であつたので、仲綱は大いに悦んで、左右の股に「宗盛」といふ鐵燒をして放つたと書いて居る。或ひは長門本が初めの改作で、『盛衰記』は長門本の餘りなるやゝこしさに眉を顰めて、折衷式に簡單化したのであるかも知れぬ。とにかく長門本も『盛衰記』も、文章として見、藝術品として見れば、共に遙かに流布本に劣つてゐるけれども、流布本の無理不自然を救つた點は大分ある。而して此の點が長門本、『盛衰記』等、主なる異本作者の最も著しい功績と認むべきものであらう。

流布本の此の一章に於ける缺點は、拾へばまだ／＼あるであらう、又他の部分についても大體同じ事が云へるであらうが、私はそれにも拘はらず、之れを一種の名篇とするに躊躇せぬ。また長門本や『盛衰記』や、その他の異本が流布本に優つて居る點も澤山あるであらうけれども、私はそれにも拘はらず、流布本の優越を信じて疑はぬと同時に、流布本の先出をも信じて疑はぬ者である。

『盛衰記』の陰口を叩きながら、『盛衰記』に輪をかけたやうな冗漫に陥りました。ちと氣を變へて、別の場面に移りませう。

第十四 日本一の剛の者

一

源三位頼政は武運拙くして、やがて宇治河畔の叢の露と消えたが、彼れが傳へた以仁王の令旨は、諸國の源氏を飛礫された蜂のやうに起たしめた。第一に起つたのは木曾の冠者、後の旭將軍源義仲である。彼れは木曾の山間より起こつて越後に出で、北國路を都へ／＼と押し上つたが、燧ヶ城、俱利伽羅が谷、篠原と、捷戦のしつゞけに、疾風枯葉を捲くが如くに邁進し、行かぬ先に奢る平家を都から追ひ落して、第一に源氏の白旗を王城に押し立てた。こゝに引かうと思ふのは、此の折の捷軍の一つ、卷第七、越前、國篠原の合戦に於いて、幼い折の義仲に縁のあつた平家方の老勇將、齋藤別當實盛の討死する所、及び、木曾がその首を實檢する所の悲壯な物語である。

落ち行く勢の中に、武藏國の住人、長井の齋藤別當實盛は、存ずる旨ありければ、赤地の錦の直垂に、崩黄威の鎧着て、鉞形打つたる兜の緒をしめ、黄金作りの太刀を帶き、二十四差いたる截生の矢負ひ、滋籐の弓持つて、連錢葦毛なる馬に、金覆

輪の鞍を置いて、乗つたりけるが、御方の勢は落ち行けども、唯だ一騎返し合はせ返しあはせ防ぎ戦ふ。木曾殿の方より、手塚太郎進み出でて、あなやさし如何なる人にて渡らせ給へば、御方の御勢は、皆落ち行き候に、唯だ一騎残らせ給ひたるこそ優に覚え候へ。名乗らせ給へと詞を、懸ければ、まづかういふ和殿は誰そ。信濃國の住人、手塚太郎金刺光盛とこそ名乗つたれ。齋藤別當、扱は互によき敵、但し和殿を下ぐるにはあらず、存する旨があれば、名乗る事はあるまじいぞ。寄れ、組まう、手塚とて、馳せ雙ぶる所に、手塚が郎等主を討たせじと、中に隔たり、齋藤別當に押し雙べて無手と組む。齋藤別當、あつばれ己れは、日本一の剛の者と、くんでうずよ、なうれとて、我が乗つたりける鞍の前輪に押付けて、些も動かさず、頸掻き切つて捨ててげる。手塚太郎、郎等が討たるを見て、弓手に廻り合ひ、鎧の草摺引き上げて、二刀刺し、弱る所を組んで伏す。齋藤別當心は猛う思へども、軍には、し疲れぬ、手は負うつ、其の上老武者ではあり、手塚が下にぞなりにける。手塚太郎馳せ來たる郎等に首取らせ、木曾殿の御前に参り畏つて、光盛こそ奇異の

曲者と組んで、討つて參つて候へ。侍かと思候へば、錦の直垂を着て候。又大將軍かと思候へば、續く勢も候はず。名乗れ〜と責め候ひつれども、遂に名乗り候はず。聲は坂東聲にて候ひつると申しければ、木曾殿あつばれ是れは、齋藤別當にて有るござんなれ。それならんには義仲が上野へ越したりし時、稚目に見しかば、白髮の糟尾なつしぞかし。今は早七十にも餘り、白髮にこそなりぬらん、鬚鬚の黒いこそ奇しけれ。樋口、次郎兼光は、年來馴れ遊んで、見知つたるらん、樋口召せて召されけり。樋口、次郎只だ一目見て、あな無慚齋藤別當にて候ひけりとして、涙を流す。木曾殿それならんには、早七十にも餘り、白髮にこそ成りぬらん、鬚鬚の黒いは、如何にと宣へば、良有つて樋口、次郎、涙を抑へて申しけるは、さ候へば其の様を申上げんと仕り候が、餘りに哀れに覚え候うて、先づ不覺の涙のこぼれ候ひけるぞや。されば弓矢取は、いさゝかの所にて、思出の言をば、兼ねて使ひ置くべき事にて候ひけるぞや。齋藤別當常は兼光に逢うて、物語し候ひしは、六十に餘つて、軍の陣へ向はん時は、鬚鬚を黒う染めて、若やがうと思ふ也。其の故は若殿

原に争うて、先を懸けんもおとなげなし、又老武者とて、人の侮らんも口惜しかるべしと申し候ひしが、誠に染めて候ひけるぞや。洗はせて御覽候へと申しければ、木曾殿さも有るらんとて、洗はせて御覽ずれば、白髪にこそなりにけれ。

又齋藤別當、錦の直垂を着ける事も、最後の暇申しに、大臣殿へ參つて、かう申せば實盛が身一つには候はねども、先年坂東へ罷下り候ひし時、水鳥の羽音に驚き、矢一つをだに射ずして、駿河の蒲原より逃げ上つて候ひし事、老の後の恥辱、唯だ此の事に候。今度北國へ罷下り候はゞ、定めて討死仕り候べし。實盛元は越前國の者にて候ひしが、近年御領に附けられて、武藏國長井に居住仕り候ひき。事の譬の候ぞかし。故郷へは錦を着て歸ると申す事の候へば、何か苦しう候べき、錦の直垂を御免候へかしと申しければ、大臣殿優しうも申したりけるもの哉とて、錦の直垂を御免ありけるとぞ聞こえし。昔の朱買臣は、錦の袂を會稽山に翻し、今の齋藤別當實盛は、其の名を北國の巷に揚ぐとかや。朽ちもせぬ空しき名のみ留め置きて、骸は越路の末の塵と、なるこそ哀れなれ。去んぬる四月十七日、平家十餘萬騎にて都

を出てし事柄は、何面を向ふべしとも見えざりしに、今五月下旬に、都へ歸り上るには、其の勢僅かに二萬餘騎、流れを盡くして漁る時は、多くの魚を得ると雖も、明年に魚なし、林を焚いて獵る時は、多くの獸を得るといへども、明年に獸なし。後を存じて、少々は残さるべかりけるものと、申す人々も有りけるとかや。

二

語釋 存する旨。思ふ理由の意で、「深い考があつて」といふと。本來「存する」は、一人稱的に自分のみ使ふべき詞で、三人稱的に他人に使ふべき詞ではないが、一例へば「私は存じます」とはいふが、「彼れは存する」とはいはぬ、——これは當時の慣用語として許さるべきである。○鉄形打つたる。兜の目庇の上に附ける前立物の一種、鉄の形したる故にいふ。或ひは慈姑形の轉で、慈姑の葉に似た所から名づけたともいふが、俗説であらう。「打つ」は、附けたといふ事の通り詞。○連錢葦毛。葦毛に灰色の丸き斑のある馬。その斑の散らばつたのが錢を連ねた様に見えるからの美稱。○金覆輪。黄金で縁を取つた鞍。○あな優し……優に覺え候へ。これは文法的に見ると、照應を缺いた喰違ひで、横逸れした文である。「如何なる人にて、渡らせ給へば」と疑問の形で書き出すならば、「唯だ一騎残らせ給ふぞ」と、やはり問ひ掛かりの形式で止めねばならぬので、「如何なる御方なれば、唯だ一人蹈み留

まりなさるのは、立派ですわい。」では、文法的には物にならぬ筈である。しかし是れは、興奮して勢込んで言ひ續けた結果、中途から逸れたので、一種の修辭上の味として許さるべきである。つまり初めには、「ど、いふ御方なれば、味方の御勢が悉く落ち行く中に、唯だ、一騎、踏み留まつて御戦ひあるぞ。」と云はうとしたが、前句の従部たる客語を、途中で主語に換質して、「唯だ、一騎、御踏み止まりとは、御見上げ申しますよ。」といふ風に極めて了つたので、即ち(一)「如何なる人なれば一騎、残れるぞ。」(二)「一騎、残れるこそ優なれ。」といふ二つの文章を、中間の句を掛持にする事によつて、一つに統べ括つた曲味の文章と見るべきであらう。かういふ文章は、文法的には不法であるが、修辭上からは、時としては許され、時としては難ぜらるべきもので、つまり用ゐられる場合と、文章家の使ひこなす力次第で、價値の定まるべきものである。○和殿は誰そ。我が殿の意で、我君、我上臈、我入道、我妹など、皆同じ使ひざま。○互によき敵。互に不足のない相手である。○下ぐる。輕蔑する。○寄れ、組まう、手塚。「さア寄れ、組まう、手塚よ。」と、切れぐに、例の列叙的、斷叙的になつて居る所が面白い。○あつばれ己れは、日本一の剛の者と、くんでうすよ、なうれとて。「やあ汝は一雜兵の身を以て、此の齋藤實盛といふ日本一の大剛の士と組んで討死するといふのか。」といふ意。こゝを、謡曲の「實盛」には、「日本一の剛の者と軍諍すよとて」と書いてあり、古來いろ／＼の説があつて、或ひは「軍上手」の意といひ、或ひは「組み上手」の意といひ、或ひは「組んで打つよ」、「組んで落つよ」の意といひ、或ひは「組んで失すよ」(組んで討死するよ)の意といひ、「なうれ」については、「なあ己れで」これ貴様がの意であらうなど云つて來たが、小野高尙の「夏山雜談」に、「此の意は、我が如

き日本一の兵と組むといふかとして組みたりし事なり、「でふす」といふ詞は、今も越路にいふとなり。又「のうれ」とは、實盛が生國越前國の詞なり。今も越前にては詞の後に「のれ」といふ詞ありとなり。俗歌に「加賀のかに越前のれに都のゑ東男ののさをかしき」といふ事もあるなり云々」とあるので、大體が解決された様に思はれる。即ち「なうれ」は、越前詞で「のか?」といふ意味の疑問の感投詞である。「組んでうす」は今も秋田邊に用ゐられて、雅言にすると「組みてんす」にあたるといふ事で、つまり「組まうとする」といふ意であらう。即ち取りすべていふと、「汝は生意氣にも、此の日本一の豪傑と組まうといふのかホレ!」といふ事。「日本一」は、活版本にニホンイチと振假名したのもあるが、これは無論「ニツ、ボンイチ」と讀まねばならぬ。「剛の者」は謡曲には澄んで「カウノモノ」と讀ませてある。「平家」でも多分澄んで讀んだらうと思ふ。「くんでうすよ」を謡曲では「グンデフズヨ」と讀ませてあるが、「平家」の古版に「組デフズヨ」とある所を見ると、「平家」でも「ク」を澄まして讀んだのであらう。○齋藤別當心は猛う思へども、軍にはし疲れぬ、手は負うつ、其の上老武者ではあり、手塚が下にぞ成りにける。は、文句の選み方から順序立まで、なか／＼うまく出來てゐる。○侍かと思候へば錦の直垂。錦の直垂は大將軍の着るもので、督以上でなければ許されぬ例なので云つたのである。○坂東聲。坂東は足柄山、碓氷峠以東の相模、武藏、上總、下總、(後に安房分立)常陸、上野、下野、陸奥(後に出羽分立)の八ヶ國。但しこゝでは、「關東邊」、「東國聲」と云ふ位のつもりで云つたのであらう。○齋藤別當にて有るござんなれ。「あるにこそあるなれ」で、「あるのであるな」といふ事。○白髪の糟尾なつしぞかし。白髪まじりの胡麻糟頭であつたといふ事であらう。糟は不純な分子の交れる意。「な

つしは「なりし」のつまつた音便。此の處近頃の版本には、多く「糟尾」と書いて「かすを」と振假名してあるが、古版本に「糟尾」と書いて「かすう」を假名をつけたのがあり、異本に「白髪のかすうなりしが」とあるのがあり、又謠曲の「實盛」にも「鬢びけのかすうなりし程に」と讀ませて居る所を見ると、「かすう」と讀むのが本當で、察するに、古本に片假名で「ウ」と書いたのが「ヲ」と誤られ、その誤つた「ヲ」に尾の本字をあてる様になつて、段々と誤を重ねたのであらう。「かすう」の意は曖昧だが、案するに、馬の毛色に、灰色に白き差毛のまじつたのを糟毛といふ、其の意味と、「かすか(微、薄)の意味との二義をかねて、「白まじりの手薄な胡麻鹽になつてゐた」といふとであらう。

○鬢鬚。ピンやヒゲのといふのを束ねて云つた當時の俗語であらう。ピンビゲと讀む。○弓矢取。武人の事、弓取ともいふ。○聊かの處にても思出の詞云々。「一寸した場合にも、後に人から思ひ出され床しまれるやうな言葉を、前以て述べて置くべきとて御座りましたぞ。」といふ意。「候ひけるぞや」の「ける」は、「現在實盛の例で解りましたが、今思へば、かねて言ひおくべき事で御座りました。」といふ味はひである。○不覺の涙。不覺悟の涙の意で、こんな場合にめ、しく泣くのは不覺悟でお恥しいがといふ意、といふが、多分覺えずそらろに流れるといふとであらう。○常は兼光に逢うて。今ならば「常に」といふ所で、これは當時普通の使ひざまである。○大臣殿。内大臣平宗盛の事。内大臣を和名でウチノオホイマウチキミといふ、其の中の「オホイ」だけを取つて云つたので、大殿様といふ程の意である。○かう申せば實盛が身一つにては候はねども。異本に「かう申せば」の一句を除いたのもある。此の一句、一寸落ちつかぬやうに見えるが、これは多分「改まつてかう申すと、いかにも實盛一人だけの事のやう

に聞こえまする、無論さうでは御座りませんが」といふべきを括つて略したのであらう。略し過ぎた嫌ひはあるが、理窟もつくし、又却つて一段面白くもある。○近年御領に附けられて。御領地附きの役人になつて。○朱買臣。吳の國會稽の人、家貧しく、薪炭などを賣つては書を読んでたが、後漢の武帝に用ゐられて、生れ故郷の會稽の大守に任せられた。其の時に錦の衣をきて歸つたといふ故事である。○朽ちもせぬ空しき名のみ留め置きて、骸は越路の末の塵と、なるこそ悲しけれ。一寸見ると、不朽の美名を留めて、北國の果で死んだのが可哀相だといふことに聞こえるが、さういふ意味ではない。是れは「平家物語」の作者の悲觀的な皮肉な人生觀が面白く現はれたところで、眞意は「このはかない空(かた)な世に、名も朽ちてしまへば結句さつぱりしてよいが、なまなか朽ちもせぬ空名だけを留めて、大事な身體がこれがあつてこそ、花や月も楽しまれ、榮華の味も味は、れる其の身體が越路の場末の塵あくたになるといふのは、何と氣の毒な事ではないか。」といふ事であらう。實にたまらない奥深い哀音が、文字の間から響いて來るやうに思はれる。西行法師が、陸奥に下り、實方中將の舊跡を弔うて詠んだといふ歌に、

朽ちもせぬその名ばかりをとどめおきて、

枯野のす、きかたみとぞ見る。

といふのがある。『平家』の作者は、或ひは之れを踏まへたのかも知れぬ。或ひは時代思潮の影響で、西行も『平家』の作者も、同じ様にこんな事を考へてゐたのかも知れぬ。○流れを盡くして云々。『呂氏春秋』に鳩と澤而漁、豈不獲得、而明年無魚。燒藪而田、豈不獲得、而明年無獸。」とある、大本はこれであらうが、併しながら近き縁

は「貞觀政要」に、魏徵が唐太宗を諫めた詞として、「流れをつくして漁る時は、多く魚を得ると雖も、魚盡きて明年に魚なし、林を焼いて獵する時は、多く獸を得ると雖も、獸つきて明年に獸なし。」と書いてあるのであらう。「貞觀政要」は平安朝以來、鎌倉時代にも、爲政者其他上流に讀まれた本で、「假名貞觀政要」も出來た位であるから、多分これから出たのであらう。其の他にも、「平家」が此の書物に負うて居る例がぼつ／＼ある。○「候」の用例。前にも度々述べたが、鎌倉時分に於ける「候」の用例について、此處でも一寸注意して戴きたい。手塚太郎は實盛を自分より一枚上の先輩と見たので、「御方の御勢は皆落ち行き候に、唯だ一騎殘らせ給ひたるこそ優に覺え候へ。」と云つてゐるが、實盛は光盛を眼下に見て居るので、「候」は一つもつけずに「和殿を下ぐるにはあらず、存する旨があれば、名乗る事はあるまじいぞ。」と云つて居る。そして、其の實盛が主君の宗盛に對する時には畏つて、「實盛が身一つにては候は、ねども、……逃げ上つて候ひし事、老の後の恥辱唯だ此の事に候。今度北國へ罷下り候は、い、定めて討死仕り候べし。事の譬の候ぞかし、錦の直垂を御免候へかし。」と云つて居るが、主人の宗盛は「優しうも申したりける物かな」と云つた丈で、「候」とは云はぬ。「又光盛は名乗れ」と責め候ひつれども、遂に名乗り候はず、聲は坂東聲にて候ひつる。」といひ、樋口次郎は「さ候へば、其の様を申上げんと仕候が、餘りに哀れに覺え候て、先づ不覺の涙のこぼれ候ひけるぞや。」と云つて居るが、二人の主君たる義仲は、「齋藤別當にて有るござんなれ」、「白髮の糟尾なつしぞかし」、「鬚鬚の黒いこそあやしけれ」、「樋口召せ」といひ、「木曾殿さも有るらんとて」といふだけで、假初にも「候」とは云はぬ。是等の例によつて、當時「候」が敬語として特別の場合にのみ用ゐられた事、作者が此の語によつて、人物の貴賤、尊卑、傲慢、謙遜、意氣の軒昂消沈等に關する微妙な心の影を顯はすに、可なり苦心をしたことがわかるであらう。

三

今迄に述べたやうな事は成るべく繰返さぬ事にして、私が特に此の一章に於いて感ずるのは、自然に筆を運んで居る中に、人知れぬ技巧を含蓄させて居る事である。此の章の中心題目は言ふ迄もなく、實盛が「白髮染」と「錦の直垂着用」との二件であるが、その段取の進み方を見ると、「篠原の合戦に平家方が總崩れして落ちて行く中に、齋藤別當實盛が唯だ一人返し合はせて戦ふ。手塚太郎が名乗り出でて、組打して遂に實盛の首を揚げる。幾ら問うても名乗らぬので、其の首を木曾殿の前に持つて行く。木曾殿は一見して實盛のかと思つたが、鬚や鬚の黒いのが怪しいので、樋口次郎を呼んで見せ、洗ひ上げた結果明らかにそれと知れる。又錦の直垂の着用は、敗戦の討死を覺悟し、故郷に錦を飾る爲めに、豫め宗盛の許しを得たのであつた。かくして實盛は壯者を裝ひ錦衣を纏うて、英雄的の最後を遂げたが、しかしなまなかの名などを残して、北國場末の塵芥となつたのは氣の毒な事である。」とかういふので、いかにも自然に、そして無造作に書き進んで居るやうに見える。又さう見た丈でも可

なりに面白く出来てゐるのであるが、尙ほよく注意して味はへると、初めにまづ「存する旨ありければ、赤地の錦の直垂云々」と書いて、讀者の好奇心を刺戟し、後段を叙する爲めの一種の素地を作つて居る。思ふに注意深き讀者は、之れを見て、必ず、「存する旨」とは如何なる仔細か？と怪しむであらう。而して最後の錦衣歸郷の物語を見るに及んで、「いかにも」と理解して、留飲の下るやうな愉快を感ずるであらう。それから手塚との戦に移つて、眼前なる合戦の模様を懸命に叙して居るが、其の間にも、後段を活かす工夫は一寸の間も忘れずして、名乗らぬ仔細を意味ありげに書き、老武者とは思はれぬ壯烈な態度を花やかに寫して居る。手塚太郎はまんまと瞞されて、壯齡の勇士を討つたつもりになつた。但し、大將軍らしい服装をしながら續く勢のないのを訝つて、其の首を木曾殿の御前に持參した。實盛は多分、其の假裝の首が木曾殿の前に齎らされ、而して木曾殿及び舊友樋口次郎の鑑識を得る事を豫期したのであらう。而して作者は、其の心持をお詔に寫し出だし、實盛が返し合はする健氣な態度から、「武勇」、「錦衣」、「從者なし」、「名乗らず」、「坂東聲」と、數々の條件を具して、木曾殿の前に提出せしめた。木曾殿は一見して實盛と感じたが、今度は手塚が心にも留めなかつた「鬚の黒い事」に怪みをなして樋口を呼んだ。樋口は一見、「齋藤別當にて候なり。」と答へて落涙したが、木曾殿の間を待ち、やゝあつて涙を抑へて、しめやかに其の仔細を述べた。かくて實盛の期待はまん

まと實現され、此の事實推移の消息は十二分に作の上に現はされ、そして讀者は輕き怪しみと深き感激とを感じながら、段々讀み進む中に、すつかり實盛が心の奥に味到するのである。結語は

洗はせて御覽すれば、白髪にこそなりにけれ。

と、有つた通りの書きツ放しで、何等の評語をも着けて居らぬが、此の書き放しな無言沈黙の描寫の中に、實盛の洗はれた白髪首を中心にして、若年の名將軍と、樋口、手塚の二勇士等とが、首を垂れ、聲を呑み、寂然として老雄の美しい心掛に感じて居る様子が、有り／＼と示されて居る。面白いではありませんか。

これで「白髮染」の一事は完了したが、残る一事の「錦の直垂」は、木曾殿の一味には無關係の事であるから、すつかり切り離して「又、齋藤別當が錦の直垂を着た事についても、一條の哀れな物語がある。」といふ調子で、別に話を起こしたのも面白い。そして朱買臣の似よつた故事を添へ、空しき美名に涙する特異な人生觀を添へて、一段の結尾としたのも面白い。「去んぬる四月」以下は、唯だ筋のつなぎに添へた一節と見るべきであらう。

部分々々の文句を運ぶ手段の面白さについては、凡そ「語釋」の處に述べたが、「人」を寫す上の技倆としては、總崩れの間踏みとゞまる勇士の優しさに感じ、禮を厚くし辭を卑くして勝負を求め手

塚太郎、身後百年の名を惜しんで、清く身を處し、高く自ら持する老雄實盛、それから涙を以て舊友の思出を語る樋口次郎、老雄の眠つた首を厚く遇する木曾將軍まで、それらの面目が、自然に面白く寫されて居り、暗愚の大臣殿宗盛までが、「優しうも申したりけるものかな」と、老雄の悲壯な意中に同情して、立派な人間らしい美しさを與へられて居る。かやうな一二の逸話を掻いつまんで寫した斷篇に對して、深い意味の性格論を持ち出すでもなからうが、とにかく總じては、當代の武人の面目を、細かには、人々それらの面目を、可なりによく寫して居るといふことが出来るであらう。

四

こゝで序に述べたいと思ふのは、謠曲に於ける軍物語Ⅱ謠曲に於ける軍記ともいふべきものⅡの事である。謠曲内外二百番の中に、軍物語を歌つたのが凡そ二十餘篇あり、其の大部分は材を『平家物語』に得たものであるが、それは事柄も文章も殆んど『平家』そのまゝと云つてもよい。唯だ一つ趣の違つて居るのは、『平家』の現を夢にし、或ひは『平家』の現寫式を回顧式に變へた事で、これが軍記に對する謠曲作者の主要なる加工ともいふべきものであらう。「現を夢に」といふのは、例へば、宮軍の宇治川合戦が、『平家』では、其の合戦を事實の合戦として書いて居るが、謠曲の「頼政」では、頼政の

幽靈が行脚僧の讀經供養に對する謝禮として、夢中に顯はし出だす幻影として寫されてゐる類ひである。「現寫式を回顧式に」といふのは、安徳天皇の御入水が、『平家』では現在の事實として書いてあるが、謠曲の「大原御幸」では、後白河法皇が建禮門院を大原の寂光院に御たづねあつた折に於ける、女院が昔偲ぶの御物語として寫されて居る類である。謠曲を大成した世阿彌元清は、能を老體、女體、軍體の三つに大別して、軍の能を最もおもなる能の一つとして居る。彼れはまた「失せて又出る幽靈能」と云つて、幽靈の能をば能の中の最も誇るに足るべき一種と見て居る。彼れは又、源平の名將の人體の本説ならば、ことに平家の物語のまゝに書くべし。

と云つて居る。かういふ事々を併せ考へると、あの謠曲を大成した大文豪が、『平家物語』を立派な名文として、其の上に出づる事の容易ならぬもの、其の時代を書く以上は、そのまゝに用ゐて然るべきもの、之れを種類の違つた文藝たる謠曲に用ゐる場合にも、さまで變改する必要のないものと思つたのであらう。そして又『平家』の文をそのまゝ用ゐるにしても、其の用ゐる所と用ゐる方を變へて、或ひは幽靈能の一部に幻影として出だし、或ひは後ジテが回顧の物語として出だすといふ所に、獨創の手腕と、人真似ならぬ加工振とを見せようと思つたのであらう。その一例として、私はこゝに謠曲「實盛」の一節を引いて、前に掲げた『平家』の本文に對照して見ることにする。文は行脚僧の讀經に對す

る實盛の幽霊の感謝から始まる。

サシ、シテ「時至つて今宵逢ひ難き御法を受け、慚愧懺悔の物語、猶ほも昔を忘れかねて、しのぶに似たる篠原の、草の陰野の露と消えし有様語り申すべし。シテ語り、扱も、篠原の合戦破れしかば、源氏の方に手塚の太郎光盛、木曾殿の御前に馳せ参じて申す様、光盛こそ奇異の曲者と組んで首取つて候へ。大將かと見ればつゞく勢もなし。又端武者かと思へば錦の直垂を着たり。名のれ名のれと責むれども終に名乗らず。聲は坂東聲にて候ひしと申す。木曾殿聞召され、天晴れ長井の齋藤別當實盛にてやあるらん。それならば義仲が上野にて見し時、鬚鬚のかすう成りし程に、今は定めて白髪たるべきが、黒きこそ不審なれ。樋口の次郎や見知りたるらんとて召されしかば、樋口参り、唯だ一目見て、涙をはらくと流いて、あな無慚やな、齋藤別當にて候ひけるぞや。實盛常に申し、は、六十に餘つて軍せば、若殿原と争ひて、先をかけんもおとなげなし。又老武者とて人々に、侮られんも口惜しかるべし。鬚鬚を墨に染め、若やぎ討死せんずるよし、常に申し候ひしが誠に染めて候。洗はせて

御覽候へと、申しもあへず首を持ち、下回御前を立つてあたりなる、此の池浪の岸に臨みて、水の緑も陰うつる柳の絲の枝垂れて、上氣はれては風新柳の髪を梳り、氷消えては、波舊苔の、鬚を洗ひて見れば、墨は流れおちて本の、白髪と成りにけり、實に名を惜む弓取は、誰れもかくこそ有るべけれや。あら優しやとて皆感涙をぞ流しける。又實盛が、錦の直垂を着ること私ならぬ望み也。實盛都を出てし時宗盛公に申す様、故郷へは錦をきて、歸るといへる本文あり。實盛生國は、越前の者に候ひしが、近年、御領につけられて、武藏の長井に居住仕り候ひき。此度北國に、罷下りて候はゞ、定めて、討死仕るべし。老後の思ひ出これに過ぎじ御免あれと望みしかば、赤地の錦の直垂を下し給はりぬ。然れば古歌にももみぢ葉を、圓分けつゝ行けば錦着て、家に歸ると、人や見るらんと詠みしも此の本文の心なり。されば古の、朱買臣は錦の袂を會稽山に、ひるがへし、今の實盛は名を北國の街にあげ、かくれなかりし弓取の、名は末代に有明の、月の夜すがら懺悔物語申さん。

「語り物」を劇の能にする爲め、切れ目繼ぎ目の角々で、掛詞や古句引用などの加工はしてあるもの

の、大體『平家』のまゝであることが、これで知られるであらう。而して用ゐる所、使ひ方の加工を除けば、あとは殆んど『平家』そのまゝで、文章として見れば、謠曲に於ける軍記は、特に言ふに足るほどのものでない事がわかるであらう。

謠曲に取り入れられた軍記の御話をした序に、第二の現寫式を回顧式にした方の例として、謠曲「大原御幸」の最後の一節を引いて見る。是れは次ぎの第十六に掲げる『平家』の「先帝御入水」や『源平盛衰記』の文章に據つたもので、本來は『平家』の本文を引いて、その次ぎに出すべきものであるが、縁の近いものを束ねて、説明に便するのである。次ぎなる『平家』の本文を一讀されて後に、再び之れを御讀み下さるやうに願ひたい。

法皇誠まことに有難ありがたき事ことどもかな。先帝せんていの御最期ごさいごの有様ようさま、何とか渡り候まをひつる御物語ごものがたりり候へ。女陸にょりく其そのの時の有様ようさま申まをすにつけてうらめしや。長門國ながとくに早はや柄へとやらんにて、筑紫ちくしへ一先ひとづ落ち行くべきと一門いっもん申し合あひしに、緒方おのりかたの三郎さぶらうが心替こころかりせし程ほどに、薩摩さつまがたへや落おさんと申し、折節おれせふ、上のぼり潮しほにさへられ、今はかうよと見えしに、能登のの守教しやう經けいは、安藝あきの太郎たろう兄弟あにがたを左右さうぶの脇わきに挟くわみ、最期さいごの供たぐひせよとて海中なかつに飛とんで入いる。新中納言しんちゆうなごん

知盛ちもりは、沖おきなる船ふねの碇いかりを引き上げ、兜かぶととやらんに戴かき、乳母あは子この家長ちやうぢやうが、弓ゆみと弓ゆみとを取りかはし、其そののまゝ海うみに入りけり。其そのの時とき二位に殿どの鈍色にぶいろの二衣ふたつぎぬに、練袴れんばくのそば高く挟はんで、我が身みは女人にょにんなりとても、敵かたきの手てには渡わたるまじ、主上しゆしやうの御供ごたぐひ申まをさんと、安徳あんとく天皇てんかうの御手ごてを取り船ふねばたに臨まむ。何處いづへ行くぞと勅ちやく詔みことごとありしに、此こゝの國くにと申まをすに逆臣ぎやくしん多く、かくあさましき所ところ也なり。極樂ごくらく世界せかいと申まをして、目出度めでたき所ところのあの波なみの下したにさむらふなれば、御幸ごゆきなし奉ほうらんと、泣なくく奏そうし給たまへば、扱あは心得こころえたりとて、東あづまに向むかはせ給たまひ、天照あまてる太神かみかみに御暇ごいそ申まをさせ給たまひてまた、下回したまわ十念じゆんの御爲ごためめに西にしに向むかはせおはしまし、女陸にょりく今いまぞ知る御裳ごみ裾すそ川がはの流れながれには、浪なみの底そこにも都みやこありとはと、これを最期さいごの御製ごせいにて、千尋ちぢゆんの底そこに入り給たまふみづからも、續つづいて沈しづみしを、源氏げんしの武士ぶし取り上げて、甲斐かいなき命いのちながらへ、再び龍顔りゆうがんにあひ奉ほうり、不覺ふかくの涙なみだに袖そでをしほるぞ恥はかしき。

これは『平家』や『盛衰記』のあちこちを綴り合はせたものではあるが、謠曲が『平家』の文を凡そ其のまゝに取つて、用ゐる處と用ゐる方とを變へたもの、一種の換質換位を施したものである事は、これで知ら

れるであらう。

第十五 悶絶壁地のあつち死

一

私は次に此の物語の主人公、心も詞も及ばぬ榮華を極めた入道相國清盛逝去の一章を引いて、此の物語の特色の一部を説明して見たいと思ふ。

同じき二十三日院の殿上にて、俄に公卿僉議あり。前右大將宗盛、卿進み出で申されけるは、先年坂東へ、討手は向うたりと申せども、させる高名したる事もなし。今度は宗盛大將軍を承つて、東國北國の凶徒等を、追討すべき由申されければ、諸卿色代して、宗盛卿の申狀、ゆゑしう候ひなんぞとぞ申されける。法皇大きに御感ありけり。公卿殿上人も、武官に備はり、少しも弓箭に携はらん程の人々は、宗盛を大將軍として、東國北國の凶徒等を、追討すべき由仰せ下さる。同じき二十七日

門出して、既に打立たんとし給ひける夜半ばかりより、入道相國違例の心地とて、留まり給ひぬ。明くる二十八日重病を受け給へりと聞こえしかば、京中六波羅韋きあへり。すは仕つるは、左見つる事よどぞ囁きける。

入道相國病ひ附き給へる日よりして、湯水も咽へ入れられず、身の内の熱き事は、火を焼くが如し。臥し給へる所、四五間が内へ入る者は、熱さ堪へ難し。只だ宣ふ事としては、あたゝとばかり也。誠に只事とも見え給はず。餘りの堪へ難さにや、比叡山より、千手井の水を汲み下し、石の船に湛へ、それに下りて寒え給へば、水夥しう湧き上つて、程なく湯にぞなりにける。若しやと笕の水を任すれば、石や鐵などの焼けたる様に、水迸つて寄りつかず、おのづから中たる水は、焰となつて燃えければ、黒烟殿中に充ち満ちて、炎渦巻いてぞ上りける。

閏二月二日の日、二位殿熱さ堪へ難けれども、入道相國の御枕に寄つて、御有様見奉るに、日に添へて頼み少なりこそ見えさせおはしませ。物の少しも覺えさせ給ふ時、思召す事あらば、仰せおかれよとぞ宣ひける。入道相國、日來はさしも勇々

二六四
 しう坐せしかども、今はの時にもなりしかば、よにも苦しげにて、息の下にて宣ひけるは、當家は保元平治より以來、度々の朝敵を平げ、勸賞身に餘り、忝くも一天の君の御外戚として、丞相の位に至り、榮花既に子孫に残す。今生の望みは、一事も思ひ置く事なし。唯だ思ひ置く事とは、兵衛佐頼朝が、首を見ざりつる事こそ、何よりもまた本意なけれ。吾れ如何にもなりなん後、佛事孝養をもすべからず、堂塔をも立つべからず、急ぎ討手を下し、頼朝が首を刎ねて、我が墓の前に懸くべし。それぞ今生後生の孝養にて、有らんずるぞと、宣ひけるこそ、いと罪深うは聞こえし。若しや助かると、板に水を置いて、臥し轉び給へども、助かる心地もし給はず。同じき四日の日、悶絶躰地して、遂にあつち死ぞし給ひける。馬車の馳せ違ふ音は、天も響き大地も揺ぐばかりなり。一天の君萬乗の主の、如何なる御事ましますとも、是れにはいかでか勝るべき。今年は六十四にぞなられける。老死といふべきにはあらねども、宿運忽ちに盡きぬれば、大法祕法の效驗もなく、神明佛陀の威光も消え、諸天も擁護し給はず。況んや凡慮に於いてをや。身に代はり命に代はらんと、忠を



水影うし湧きつて程な濁るにぞ

存ぜし、數萬の軍旅は、堂上堂下に竝居たれども、是れは目にも見えず、力にも拘らぬ、無常の刹鬼をば、暫時も戦ひ返さず、又歸り來ぬ死出の山、三瀬川黄泉中有の旅の空に、只だ一所こそ赴かれけれ。されども日頃作り置かれし罪業ばかりこそ、獄卒と成つて、迎へにも來りけめ。哀れなりし事どもなり。さてしも有るべきことならねば、同じき七日の日、愛宕にて煙になし奉り、骨をば圓實法眼頸にかけ、攝津國へ下り、經の島へぞ納めける。さしも日本一州に、名を揚げ威を振ひし人なれども、身は一時の煙と成つて、都の空へ立ち上り、骸は暫し徘徊ひて、濱の眞砂に戯れつゝ、空しき土とぞ成り給ふ。

二

語釋 二十三日は治承五年二月の其の日。○先年坂東へ討手。治承四年九月、維盛を大將軍とし、忠度を副將軍として、大軍東國に向ひ、十月二十三日の夜半、富士川の水禽の羽音に驚いて逃げ歸つた軍の事で、言を食立たせぬ爲め、恥辱の大敗走を、「させる功名したる云々」とは云つたのである。○勇々しう候ひなんす。「それはえらい思立で」と云つて、敬意を表したといふ事。「候ひなんす」は、「候ひなんとす」の意味に取つては譯がわからなくなる。

「候ひなんぞ」の意とすれば、多少尤もらしくなるが、思ふに此の頃は、武人が武張つた詞を好む所から、わけもなく、かういふ詞を濫用したので、畢竟「御勇ましい事で御座ります」といふ事であらう。○東國北國の凶徒。東國の凶徒は頼朝の軍、北國のは義仲の軍。○違例。氣分が不斷とはちがふといふので、病氣の事。○すは仕つるは、左見つる事よ。一人が「サアやつたぞ」といふと、他の一人が「それ見た事か」、「好い氣味、よい氣味」と云つたといふので、平家を怨む民共が、あの罰あたりの入道め、其の中に病氣をするだらうと思つて居たが、「ソレ、果たして仕たちやないか、それ見た事か、かう來なくツちや嘘だ。」などと、コソ／＼、ヒソ／＼噂し合つたといふ事。うまい處に俗語を挿んだので、實に面白く生きて居る。○病ひ付き給へる。「病ひ」は動詞として働かしたので、今の「病み附いた日から」といふ意。病氣がついたといふのではない。○四五間。間は柱間の事で、今の六尺一間の事ではあるまい、間は多分凡そ一丈内外位の寸法であらう。○「あた／＼」。あつ／＼といふ叫び聲。「あつ／＼、あつたつ／＼、といふのである。これも俗語で、とても利いて居る。此の病は、『百鍊抄』に「身熱如火、世以爲燒」東大興福之現報」などあつて、大佛を焼いた祟りとして、火の病など云はれたのである。○それに下りて寒え給へば……寛の水を任すれば。普通ならば、「其の石船の中へ入つて、熱い體を冷やさう」とすると、「寛の水をそ、ぎかけると」といふ所だが、さういふと、俗に卑しくなるので、「病室から下りて來て冷えようとする」（能動的に「ひやす」と云はずして、自然的に「冷えよう」といふと、上品に床しくなる。例へば「物を嗅ぐ」といへば下品だが、自然的に「香ふ」と云つて、「梅が香をにほふ」などいへば、上品になる様な類ひである）といひ、「水に寛を傳つて

来て、思ふまいに落ちさせらる」とは云つたのである。かういふ詞は廻りくどいやうであるが、一種の嗜み詞で、平安朝の文の美を成す主なる要素の一つであつた。「平家物語」の文章の面白味の一面は、かういふ優雅な詞と俗語とが、不思議によく馴染んで、當時の時代相をよく現はして居る所にある。○よにも苦しげにて。いかにも苦しうにての意。○唯だ思ひ置く事としては、兵衛佐頼朝が、首を見ざりつる事こそ、何よりも又本意なけれ。これも前に屢云つた横逸れの文章で、文法に合はせて普通に書けば、「唯だ思ひ置く事は頼朝の首を見なかつた事で、それが何よりも本意なく思ふ所である。」と云ふべき所であるが、「頼朝が首を見ざりつる事」の一句に、前後兩方への掛持をさせて、早手廻しの、無理な、しかし面白い省略式の變態文章を成さしめたのである。○佛事孝養。孝養はキョオヨオと讀む。此處は死後の親によく事へる意で、追善供養の事である。○板に水を置きて。流れ水の仕掛にして新陳代謝させた事。○悶絶躓地して遂にあつち死ぞし給ひける。悶絶は病苦に悶えて絶え入つた事。「躓」は腰抜け、足痿えの意で、「躓地」と熟すれば、ヂタバタして苦しがつた事になる。「あつち死」については、私はまだはつきりした解釋を見た事がなく、中には「わからぬ」とか、「好い加減に書き直したのであらう」とか云つて居る註釋家もあるが、これは熱に苦しんで「アツチ、アツチ、アツチ」と叫び死に死んだといふ事に相違ない。例の俗語を大膽に、そして非常によく活かして使つたもので、「悶絶躓地」といふ漢語と、「し給ひける」といふ雅言と「あつち死」といふ俗語とが相隣接して、いかにもよく調和して居る所、實に何とも云はれぬ妙味である。そしてかういふのが又大體から見て、「平家」全體の妙味でもある。「盛衰記」に「あわて死に」としてあるのは、此の意味を理解しなかつた爲め

か、或ひは之れを卑俗として換へたのであらう。

三

右は文句の部分々々を分けて見ての話であるが、全體を通覽して、私は人の病狀や死様を是れほど痛快に、莊嚴に、偉大に書いた文章は、まづあるまいと思ふ。尤も『古事記』の昔には、伊邪那美命の死屍から、恐ろしい雷神のいくつも發生した事を書いた物凄い記事もあるが、人の世となつて後に、「病死」を書いたものとしては、恐らく是れが吾が古今の文學の中の随一であらう。一代の熱性漢が、焼くやうな高熱に悶えて七顛八倒し、比叡の靈水を汲み下させては、石船に湛へ、篋に任せ、板に流して、冷えようとする。水船の冷水は忽ちに熱湯と變じ、そゞぎ掛ける水は、寄りかねてはね飛ばされ、觸るれば焰となつて、黒煙が廣い殿中に充滿する。其の間に熱！暑！あたく！あたく！と大聲に叫びながら、我が一代の勳功と榮華とを述べ、神をも、佛をも、今生をも後生をも一排し去つて、追善の孝養としては、唯だ日本に於ける唯一の競争者、敵將兵衛佐頼朝が生首を墓前に掛ける事を命ずる。そして絶え入り絶え入り、地だんだを踏んで、あつち、あつち、あつちと叫び死に死ぬる。そして死んだ後の天下の騒ぎは、天も響き大地も揺ぐばかりであつた。

悶絶躓地して、遂にあつち死じにし給ひける。馬車うまぐるまの馳せ違ふ音は、天も響き大地も揺ぐばかりなり。一天の君萬乗の主ちちの、如何なる御事ましますとも、是れにはいかでか勝るべき。こんな壯烈な、大きい、病み方、死に方が、又と世にあるであらうか。

私はまた、此の巨人の巨大なる病惱記、悶死記が、文字ばかり外観ばかりの巨大に終はらずして、其の間に一脈の情味を湛たへて居る事を、限りなく嬉しく思ふ。殊に死に望んで頼朝の首を要める所の如き、作者は「いと罪深うは聞こえし」と云つては居るが、これは清盛が人間心の發露として、此の描寫の中に瞳ひとみの如く光つて居ると云つてよい。「吾妻鏡」の教へる所によると、頼朝は石橋山に敗れて討死を覺悟した時、髻こむぎの中に戴いて居た正観音の像を取り出して、傍らなる巖窟に安置した。側にゐた土肥實平が怪しんで其の由を尋ねると、彼は「我が首が平家に傳へられた時、髻の中に此の本尊のあるのを見れば、源氏の大将軍の所爲に非すと云つて、誹そしを遺すであらうから。」と答へたといふことである。討死を覺悟して、頭髮の中の守本尊を身外に排し去る頼朝と、死に臨み、佛事堂塔の供養を謝絶して敵の首を要める清盛との對照を考へると、私は誠に、此の敵にして此の敵ありといふべきであると考へる。史家は此の期を以て、佛法の深く民心に喰ひ入つた時代として居るが、私はまた、此の時代に於いて、源平の兩主將が、申し合はせた様に、佛にたよらずして自己の意志に活きようと

した事を、限りなく面白く思ふものである。

語釋 宿運忽ちに盡きぬれば。宿運は前世から持越した運命の意で、生まれぬ前から定まつた運命が盡きて了へば、一代の高僧貴僧が、えらい秘密の祈禱を行つた所で、甲斐がないといふ事。○諸天。密教に謂ふ天部の神々。凡慮云々に續けての意味は、神も佛も助けることが出来ぬ。況んや凡夫の人間が幾ら騒いだところで、命數の盡きた人の命を助けられようか、といふこと。○軍旅。旅はもと五百人一隊の事であるが、こゝでは唯だ數多の軍兵が居るといふ事。○刹鬼。刹は天竺語の鬼の事で、「閻伽の水」といふと同じく、例の異つた國語を二つ重ねた兩點讀である。○死出の山、三瀬川、黄泉中有の旅の空。淨土に迎へられぬ者は、死後地獄へ行つて恐ろしい責苦を受けねばならぬ。其の責苦を山路やまぢの險しきに譬へて、死出の山といふ。亡者が葬頭むすづか河の流れを渡るのに、山水瀬、江深淵、有橋渡といふ三つの瀬がある故に、此の川を三瀬川といふ。黄泉は人の死後に行くべく想像され、信ぜられた地下の國。中有は中陰と同じく、現在生きてゐた境涯から地獄、餓鬼、畜生といふやうな到着點に到るまでの途中の中ぶらの境涯のこと。要するに、清盛入道は生前惡業を積んだから、死後は必ず地獄へ行くものと豫定して、地獄へ行く道中の、恐ろしい山を越え、川を渡りつゝ、冥途の旅に出かけられたと云つたのである。○力にもか、はらぬ。腕力うでぢからで拒ぐことの出来ぬ「死」といふ鬼。

作者は、前には、清盛が頼朝の首を要める悶絶躓地のあつち死じにを、壯烈悲絶に描いたが、此の巨人がいよいよ最後の息を引き、「宿運忽ちに盡き」てからは、すっかり物悲しい調子に變へて、哀の樂

を奏で始めた。

身に替はり命に代はらんと、忠を存せし、數萬の軍旅は、堂上堂下に竝居たれども、これは目にも見えず、力にも拘はらぬ、無常の刹鬼をば、暫時も戦ひ返さず、又歸り來ぬ死出の山、三瀬川黄泉中有の旅の空に、只だ一所こそ赴かれけれ。

二十年の榮華を後にし、絶大の権力に別かれ、數萬の軍旅を置去にし、懸命の努力で築き上げた事業と、守り立てた一族とが、今しも首を擡げ始めた源氏の爲めに蝕まれ、掻き崩されて行くのを、もう手の達かぬ幽明の境の彼方に眺めつゝ、黄泉中有の旅の空に、唯だの一所赴かれた。とは、何といふ悲しさ、哀れさ、果敢なさ、物さびしさであらう。殊に最後の

さしも日本一州に、名を揚げ威を振ひし人なれども、身は一時の烟となつて、都の空へ立ち登り、骸はしばし徘徊ひて、濱の眞砂に戯れつゝ、空しき土とぞ成り給ふ。

の一節の如き、誠に諸行無常盛者必衰の世の様を諷示して、骨を刻み腸に喰ひ入る皮肉ともいふべきで、其の消極的に沈みながら、人の魂を深く揺り動かす味はひは、實に言語に絶するものがある。これが『平家』の作者の開卷第一に道破したところ、而して祇王、成親、俊寛、小督、實盛の最後、先帝の御入水、大原の御往生、あらゆる要所々々で繰り返すことを忘れなかつた『平家』特得の哀音である。

四

源平時代の巨人、清盛入道が最期の條を講じたのに因んで、私はここに、『太平記』に於ける足利尊氏の最期を寫した文章を引いて見たいと思ふ。第三十三卷の「將軍御逝去の事」と題した一章である。

同じき(延文三年)四月二十日、尊氏卿背に癰瘡出でて、心地例ならず御座しければ、本道外科の醫師數を盡くして参り集まり、倉公華陀が術を盡くし、君臣佐使の藥を施し奉れども、更に驗なし。陰陽頭有驗の高僧集まつて、鬼見、太山府君、星供、冥道供、藥師の十二神將の法、愛染明王、一字文珠、不動慈救延命の法、種々の懇祈を致せども、病日に随つて重くなり、時を添へて憑み少なく見え給ひしかば、御所中の男女氣を呑み、近習の従者涙を抑へて、日夜寢食を忘れたり。斯かりし程に、身體次第に衰へて、同じき二十九日寅の刻、春秋五十四歳にて、遂に逝去し給ひけり。さらぬ別かれの悲しさはさる事ながら、國家の柱石摧けぬれば、天下今も如何とて、

歎き悲しむ事限りなし。さてあるべきに非ずとて、中一日有つて、衣笠山の麓、等持院に葬し奉る。鎖龜は天龍寺の龍山和尚、起龜は南禪寺の平田和尚、奠茶は建仁寺の無徳和尚、奠湯は東福寺の鑑翁和尚。下火は等持院の東陵和尚にてぞおはしける。哀れなる哉武將に備はつて二十五年、向ふ處は必ず従ふといへども、無常の敵の來たるをば防ぐに其の兵なし。悲しい哉天下を治めて六十餘州、命に隨ふ者多しといへども、有爲の境を辭するには、伴ひて行く人もなし。身は忽ちに化して、暮天數片の煙と立ち上り、骨は空しく留まつて、卵塔一掬の塵となりにけり。別かれの涙に掻き暮れて、これさへとまらぬ月日哉。五旬程なく過ぎければ、日野左中辨忠光朝臣を勅使にて、従一位左大臣の官を贈らる。宰相中將義詮朝臣、宣旨を啓いて三度拜せられけるが、涙を抑へて、

歸るべき道しなれば位山

のぼるにつけてぬる、袖かな。

と詠ぜられけるを、勅使も哀れなる事に聞きて、有りのまゝに奏聞しければ、君限

りなく寂感あつて、新千載集を撰ばれけるに、委細の事書を取せられて、哀傷の部にぞ入れられける。勅賞の至り、誠に忝かりし事どもなり。

語釋 癰瘡。癰は背或ひは頸窩に發する悪性の瘡で、古來命取りと云はれたもの。○本道外科。神田本には「本道外經」とある。本道は内科の事、内科を醫療の根幹と見、外科に對して本道と呼んだのである。○倉公華佗。倉公、本名は淳于意、漢の文帝に仕へ太倉長となつたので、世に太倉公と呼ばれた名醫。華佗は三國時代の名醫、曹操に殺された人。○君臣佐使。調合された藥劑について、その主要なる藥を君と見、添へられた藥をその佐と見、使となる臣と見たので、おも藥、副へ藥と、いろ／＼に調合して進めたといふ意。○鬼見、泰山府君。以下は、いづれも陰陽師山伏などの行ふ、特別に重き祈禱の類。○氣を呑み。よくは解らぬが、心配の餘り息を呑み殺して安らかに呼吸もせぬといふ事であらう。○さらぬ別かれの悲しさ。在原業平の母が業平に送つたといふ歌の「世の中にさらぬ別かれのありといへばいよ／＼見まくほしき君かな」によつたので、遷れ去る事の出來ぬ別かれ、即ち死別の事。○鎖龜、起龜、奠茶、奠湯、下火。龜は柩の事で、鎖龜は亡骸を柩に納めて蓋ふ事。起龜は鎖龜の後、靈柩を起して誦經する儀式。奠茶は茶をすゝめる事、奠湯は湯をすゝめる事。下火はアゴと讀んで、茶毘即ち火葬の火を點する事。皆禪家葬儀の式で、當代一流の名僧が、尊氏の葬儀に與つて其の最後を飾つたといふ事である。○有爲の境。有爲は諸種の因縁が和合して出來上がる現象、即ち吾々の生活する現世界の諸現象の事で、「有爲の境」とは不生不滅、不増不減なる絶對常住の世界を「無爲の境」といふのに對して、生滅榮枯盛衰窮まりなき轉變の

境をいふのである。○卵塔。卵形の墓。○哀なる哉以下、無常の敵の來たるをば、防ぐに其の兵なし、^{つはもの}「有爲の境を辭するには、伴ひ行く人もなし」、^{のほ}「幕天數片の煙と立ち上り」、^{のほ}「卵塔一掬の塵と成りにけり」のあたり、佛家慣用の常文句を書いたのではあらうけれども、何となく『平家』の「入道逝去」の條を想ひ起こさしめるものがある。○五旬。七七日が過ぎて中陰が満ちたといふ事。○歸るべき道しなれば。今度折角官位を上げては戴いたが、若し父が歸つて来て、此の恩詔を拜することが出来れば、さぞ喜びませうに、もう歸らぬ旅路についたのでありますから、父の官位が上つたにつけても、唯々私共の涙が流れるので御座りまする、といふ意。

『平家』の「入道逝去」を読んだ目で、『太平記』の「將軍御逝去」を寫した此の一章を見ると、同じ巨人の同じ最期を書いたものながら、すっかり別な世界に來た様な心地がする。まづ筋は立派に辿つて、事を盡くして書いてはあるが、情味の潤ひといふものがない。文章は漢文式の對句仕立にやゝこしく飾つてはあるが、躍るやうな生命の人に迫るものがない。無論、病み方、死の方にもいろ／＼あつて、背に癪を出して醫療叶はずに死んだといふだけの尊氏の逝去は、燃えるやうな火の病に七顛八倒した清盛の最期のやうには、賑やかに寫されぬであらうが、それにしても、數十年間六十餘州をあれ程に騒がした巨人の最期に對しては、作者の心に水々しい情があり、作者の筆に傳神の力がある限り、もう少ししんみりした命のある描寫が出来たであらうにと、あたらしく思はれる。要するに『太平記』は

知識的になり道義的になつたが、同時に非文學的に非情味的になつた。外面的文飾的になつて、内面的なる感情の味はひを失つた。其の文は、報告や教訓としては、或ひは『平家』に優るかも知れぬけれども、その報告も教訓も、形を整へ詞を飾つて押賣する底の物となつたといふ氣味がある。無論細かに見れば『太平記』にもよい所がある。けれども文學的に内生命を傳へる點に於いては、『平家』を距ること遠いものになつたと云はねばならぬ。

前にも擧げた小野高尙は、その『夏山雜談』の中に、

平家物語は古き詞ありて耳遠き様なれども、幾かへり見てもあかず。太平記は文勢もはなやかに聞こゆれども數反見にくし。況んやそれより後の軍物語は二反とは見られず。何にても古き文面白き。

と云つて居るが、一面至言である。

第十六 分段の荒き波

一

『平家物語』の最後に、私は壽永四年三月廿四日に於ける、奢る平家斷末摩の一章、清盛の妻二位、尼が安徳天皇を抱いて海に赴いた哀絶の一章、「先帝の御入水」といふ標題を與へられて、此の物語が、安徳天皇の先帝と稱へられ給ふべき次ぎの帝の御代に成つた事を暗示してゐる一章を引いて見る。

文は九郎判官義経が、平家を八島から西へ西へと追つて、到頭長門の壇の浦で、袋の鼠と追ひつめた所に始まる。彼れは捷軍を續けながらも、敵の御座船に萬乗の大君のまします事と、三種の神器の鎮まらせられる事に恐れをなして、さすがに不安を感じてゐたが、いよく決戦の當の朝、大空に見えた白雲が段々下りて來て、我が船の舳先に留まつたのを見ると、それは源氏の白旗であつた。

判官是れは八幡大菩薩の、現じ給へるにこそと悦んで、兜を脱ぎ、手水嗽して、これを拜し奉り給ふ。兵共も皆かくの如し。やゝあつて沖より鯨といふ魚、一二千這うて、平家の船の方へぞ向ひける。大臣殿小博士晴信を召して、鯨は常に多けれども、未だ斯様の事なし。急度勘へ申せと宣へば、此の鯨はみ歸り候はゞ、源氏亡び候ひなんぞ、はみ通り候はゞ、御方の御軍危う覚え候と、申して果てぬに、平家の船の下を、直ぐに這うてぞ通りける。世の中は今ばかりとぞ見えし。

阿波ノ民部重能は、この三箇年が間、平家に附いて忠を致したりしかども、嫡子田内左衛門教能を生捕にせられて、今は叶はじと思ひけん、忽ちに心變はりして、源氏と一つになりけり。新中納言知盛卿、あつぱれ重能めを、斬つて捨つべかりつるものと、後悔せられけれども甲斐ぞなき。平家の方の謀には、好き武者をば兵船に乗せ、雜人原をば唐船に乗せて、源氏心憎さに、唐船を攻めば、中に取り籠めて討たんと、支度せられたりしかども、重能が返忠の上は、唐船には目も懸けず、大將軍の變し乗り給へる、兵船をぞ攻めたりける。其の後は四國鎮西の兵共、皆平家を背いて、源氏に附く。今迄隨ひ附きたりしかども、君に向つて弓を引き、主に對して太刀を抜く。彼處の岸に着かんとすれば、波高うして叶ひ難し、此處の汀に寄らんとすれば、敵箭鋒を揃へて待ち懸けたり。源平の國争ひ、今日を限りとぞ見えたりける。

去程に源氏の兵共、平家の船に乗り移りければ、水主楳取共、或ひは射殺され、或ひは斬り殺されて、船を直すに及ばず、船底に皆倒れ伏しにけり。新中納言知盛、

卿、小船に乗つて、急ぎ御所の御船へ参らせ給ひて、世の中は今ばかりと覺え候。見苦しき物をば、皆海へ入れて、船の掃除召され候へとて、掃き拭ひ塵拾はせ、艫かたに走り廻つて、手づから掃除し給ひけり。女房達、や、中納言殿、軍の様は如何にや如何にと問ひ給へば、只今珍らしき吾妻男をこそ、御覽ぜられ候はんずらめとて、からりと笑はれければ、何條只今の戯れぞやとて、聲々に喚き叫び給ひけり。二位殿は日頃より、思ひ設け給へる事なれば、鈍色の二衣打被ふたつぎぬき、練袴ねばかまの傍高く取り、神璽しんじを脇に挟み寶劍を腰にさし、主上を抱き参らせて、我れは女なりとも、敵の手には掛かるまじ、主上の御供みまもりに参るなり。御志思みこころひ給はん人々は、急ぎ續き給へやとて、静々と舷ふなばたへぞ、歩み出でられける。

主上今年は八歳にぞ成らせ御座す。御年の程より遙かに、ねびさせ給ひて、御貌みかたち嚴しう、傍も照り耀くばかりなり。御髪みかみ黒うゆらくと、御背みせ中過ぎさせ給ひけり。主上あきたる御有様みありさまにて、抑、尼前あまのまへ我れをば何地へ具して行かんとはするぞと仰せければ、二位殿幼き君に向ひ参らせ、涙をはらくと流いて、君は未だ知ろし召さ



主上の御供に参るなり

れ侍はずや。先世の十善戒行の、御力によつて、今萬乘の主とは生まれさせ給へども、惡縁に引かれて、御運既に盡きさせ給ひ侍ひぬ。先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮に御暇申させ御座し、其の後西に向はせ給ひて、西方淨土の來迎に預らんと誓はせ御座して、御念佛侍ふべし。此の國は粟散邊土と申して、物憂き境にて侍ふあの波の下にこそ、極樂淨土とて、目出度き都の侍ふそれへ具し參らせ侍ふぞと、様々に慰め參らせしかば、山鳩色の御衣に、鬢づら結はせ給ひて、御涙に濡れ、小さら美しき御手を合はせ、先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮正八幡宮に、御暇申させ御座し、其の後西に向はせ給ひて、御念佛ありしかば、二位殿やがて抱き參らせて、波の底にも都の侍ふぞと、慰め參らせて、千尋の底にぞ沈み給ふ悲しきかなや、無常の春の風、忽ちに花の御姿を散らし、痛ましき哉分段の荒き波、玉體を沈め奉る。殿をば長生と名づけて、長き柄を定め、門をば不老と號して、老いせぬ關とは書きたれども、未だ十歳の内にして、底の水屑とならせおはします。十善帝位の御果報、申すも中々愚かなり。雲上の龍降つて、海底の魚となり給ふ。大梵高臺

の關の上、釋提喜見の宮の内、古は槐門棘路の間に九族を靡かし、今は舟の中波の下にて、御身を一時に亡ぼし給ふこそ悲しけれ。

二

語釋 「判官」は九郎義經、大臣殿は平宗盛。○急度勸へ申せ。急度は「ちよつと」、「急いで」、「しつかり」の三義を兼ねた詞。「きつと」に「急いで」の意味のある事は、流布本に「きつと立ち寄り給へ」とある所を、長門本に「急ぎ立ち寄り給へ」とあるのでも察せられる。案ずるに、急ぐ意味からは「急度」と書き、嚴重に必ずといふ意味からは「屹度」と書くやうになつたのであらう。「勸へ」は「易」なり、其の他の卜筮書の本文に合はせて勸考せよといふ事。○はみ歸り、はみ通り。八坂本には、此の吉凶の關係を逆まにして、此の海鹿はみ通り候は、源氏悉く亡び候ひなんす、又はみ歸らば、味方の御軍危く見えさせ給ひて候。と書いてある。どういふ理由で、かう書いたのか解らないが、察するに、海豚が若し泳ぎもどれば、平家にはまだ惡魚を恐れ退かしめる威力があるので、勝利の兆であるか、或ひは、海豚が船底を潜つて源氏に向つて行くのは、無心の動物もまだ平家を見捨てぬ瑞相で、勝軍の前表だと見るかの相違であらう。○世の中は今はいかうとぞ見えし。海豚の前兆でもわかる如く、もう此の通り、平家の運命もこれまでだといふ事。○重能めを斬つて捨つべ

かりつるものと。前章で、知盛が重能を斬らうとしたが、宗盛に支へられて控へた故に、云つたのである。○心憎さに。立派な唐船をば、あれこそ大將軍の乗船よと、重んじ床しみて攻めるといふ事。○彼處の岸に、此處の汀に云々。私は初め此處の意味をば、これは作者の好い加減な文飾で、同じ中國側の海岸で、あつちの岸、こつちの汀と、かう云つたのであらうと思つてゐるが、二三度壇の浦に遊んで、實境を見て、其の誤りなる事を知つた。此の時の形勢は、義経は瀬戸内海を、東の方から西へくと平家を追ひつめて来る、範頼の軍は陸路を先廻りして下の關長府の海岸に待つてゐる、かくして平家は山陽道方面では海陸兩方の逃げ路を断たれたが、それならば、海峡を突切つて、九州へ遁れるかといふと、そこには名高い早潮、一時間八哩を流れるといふ日本第二の急潮が押し隔て、ゐて、それも叶はぬ、といふ絶體絶命の場合で、即ち「此處の汀」とは中國下の關側の岸の事、「彼處の岸」とは九州門司側の濱の事に相違ない。前にも引いた謠曲の「大原御幸」に、

薩摩がたへや落さんと申し、折節、上り潮に支へられ、今はかうよと見えしに、

と書いてあるのは、此の消息を寫し出したのである。○船を直すに及ばず。船の操縦の意に任せぬ事。「及ばず」は今の俗語の意味とは違ひ、「力及ばぬ事」即ち「能はず」といふ事である。○只今珍らしき吾妻男をこそ。「東男に京女」と云つて、東國が男の本場になつて居るその男といふ事。「今迄は遠く噂にのみ聞いてゐた東男を、もう間近に見られますぞ、いや、御樂み様な事ぞ。」といふ皮肉の洒落で、眞意は「もうすぐ無骨な田舎侍がやつて来ますぞ。」といふのを反對に云つたのである。○二位殿。清盛の妻時子。此の御入水の事が、「吾妻鏡」には、「及午刻、

平氏終敗傾。二品禪尼持寶劍、按察局奉抱先帝、共以没海底。」とあつて、幼帝を抱き奉つたのが、按察の局となつて居る。察するに、大雜沓の間に於ける此の大悲惨事が、見る目、語る人によつて、まち／＼に傳へられたのであらう。而して「平家」の作者は、事實と信する其の中の一つに據つたか、或ひは多くの所傳の中最も興味ありと考へたのを取つたのであらう。或ひは神器拜帯、幼帝奉擁の二事を、清盛の妻、幼帝の祖母君たる二位尼に兼ねさせる事を、最も意義深く、最も劇的であると考へて、想像の筆を揮つたのもあらう。「平家」全體が此の様な心理で書かれたので、必ずしも事實の正確を期したのではないのである。○鈍色の二衣。鈍色は青花に墨を加へたので、「にび色」ともいふ。薄黒い色の喪服。二衣は二枚がさねのこと。五枚重ねを五衣といふと同じ事。○打被き。頭からかぶるやうにしたこと。○練袴。練絹の袴。○御志思ひ給はん。ぼんやりした詞であるが、自ら重んじて侮辱を受けない志のある人といふ事で、殉死の覺悟ある人々といふ意を現はしたのであらう。○ねびさせ給ひ。年よりにませてふけて居られる事。「長門本」には「くまませ給ひ」と書いてある。○いつくしう。美しさと莊嚴な立派さとを兼ねた心。○尼前。アマセと澄んで讀んで居る。尼御前の轉訛。○十善戒行云々。前世に不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不綺語、不惡口、不兩舌、不貪欲、不瞋恚、不邪見の十善をよく行つた結果、今生で帝王に生まれたといふ事。○來迎に預らんと誓はせ。「佛様に向つて、どうぞ西方淨土に御迎へ下さい、と御願ひなさい。」といふ事であるが、救つて貰ふのに、此方で誓ふといふのは一寸をかしい。察するに是れは多分阿彌陀様が、どんな事をしてしても必ず衆生を救つてやると云つて、謂はゆる四十八種の誓願まで立て、居られるのだから、その佛様の御誓に

附け込んで、どうぞ私をも御救ひ下されと御願ひなさい、といふ意味であらう。○粟散邊土。日本は大世界の端ツべたに粟粒の散らばつてゐるやうな小國だといふ事。楞嚴經の文句を取つたのである。○山鳩色の御衣。青い色の御衣で、麴塵の御袍ともいふもの。○御涙に濡れ、小さう美しき御手を合はせ。御顔が涙一ぱいになつたことを、顔が涙に濡れたやうだと形容したのである。涙一ぱいの御顔をして、小さい紅葉のやうな御手を、殊勝氣に合はせられ、泣きじやくりをしつ、東に西に向かはせられては、天照大神様！ 南無阿彌陀佛！ と祈らせらる、御姿、手に取るやうで、實によく書いてある。○千尋はチイロと讀み、殿はテン、號はカウと澄んで讀む。○分段の荒き波。衆生が前世に行爲した業の善惡如何によつて、今生に受ける果報に分別段階のある事。即ち因果應報の理の支配は、王者と雖も免れぬといふ意で、それを海波が誰れ彼れの差別なく人を溺らすのに譬へたのである。○底の水屑。海底の水屑、水底の藻屑といふのを略したのである。○大梵高臺は大梵王の住む宮殿、「釋提喜見」は帝釋天の住む所で、共に觸目悉く人を喜ばすといふ美しい宮殿。○桃門棘路。支那の昔、周の代に、朝廷正殿の眞中なる三公の坐所の前には三本の桃を植ゑ、左右なる卿、大夫、公侯伯子男などの座の前には、九株の棘を植ゑたといふ所から來たので、大臣家、公卿殿上人達といふ事。○九族を靡かし。九族は高祖父、曾祖父、祖父、父、己、子、孫、曾孫、玄孫のこと。「靡かし」は權力によつて風靡したといふ意味ではなく、我が一族を宮廷にぞろりと棚引かせ並列させたといふ、得意榮華の光景をいふのであらう。

三

『太平記』から立ち還つて『平家』に來ると、またすツかり活き返つて、胸の高鳴りするのを感じる。文章がうまいからばかりではない、作者の筆に心が這入り、作者の同情がすツかり文字の間にしみ込んで、寫された光景が、一々命を持つて吾々の心に迫つて來るからである。此處も大體は事實の起こつた通り、順序を追うて書いたので、詳略も宜しきに叶つて、いかにもよく出來てゐるが、殊に二位の尼が神器を帶び幼帝を擁して船上に立つた所から、幼き帝を慰め參らせつゝ海中に投ずる所、投じて後に、「悲しきかなや無常の春の風」の、無韻の哀歌の起くる所などは、實に息づまるばかりの感興に悲しさと、恐ろしさと、淋しい諦めと、造化の攝理の前に俯伏する低頭感と、其の間に通じて凡てを包む、何とも云はれぬ奥床しい淨光明との融和した言語道斷の感興を覺えさせる。此の先帝の御入水は、八歳の幼帝の崩御であり、神器の冒瀆であり、平家の滅亡であり、同時に平安朝四百年に榮えた公卿文明の「おさらば」であるが、折も折に、此の我が國未曾有の大悲劇に對する、國民が斷腸の哀歌として、王者も天命に敵しかねる事を歌つた、「無常春風」、「分段荒波」の二十數句が、海底から、天上から、世界を蔽うて起こつて來たのかと思ふと、我々は唯だもう、大きい時代の魂其の物が、平

家の作者の心を動かし、彼れの筆に宿つて、此の作を成さしめたのではないかと思ふのである。

『平家物語』に對する解釋批評はこゝにとゞめて、私は次ぎに『太平記』に移りたいと思ふ。尙ほ序ながら、右の一章の中、「二位殿は日頃より」から「申すもなかく愚かなり」までの十數行は、琵琶の名家、故館山漸之進氏の家に傳はる譜本によつて、そのまゝ句讀を打つたのである。

第十七 太平記の基味と時代

『太平記』は、後醍醐天皇の御即位に筆を起こして、北條氏の滅亡、建武の中興、及び南北朝争亂の顛末を寫したもので、『平家』と同じく半歴史、半小説の文學である。四十卷の長篇で、小島法印の作と稱せられ、而してまた兒島高德が遁世後の筆ではなかつたかとも疑はれて居る。

私は前に『夏山雜談』などを引いて、『太平記』に對して氣の毒な批評をしたが、しかし『太平記』にはまた『太平記』特得の趣味と價值とがある。唯だそれが『平家』に比べて、遺憾ながら非文學的、非情味的のものであるが、しかしながらそれは時代の影響と作者の性格とから來た自然の結果で、據らぬ事であつたのであらう。

試みに、吾等の家に於ける父子繼承の消息を考へて見るに、子は父のおもなる遺産を受け繼いで、それに我が勞作の結果を加へるであらう。其の子はまた父祖のおもなる遺産を受け繼いで、それに我が勞作の結果を加へるであらう。かくして祖父より父に、父より子に、子より孫に、傳へるのであるが、其の間に於いて、遠き者より受ける影響が次第に少なくなつて、例へば孫の祖父から受ける影響が、父が父から受けた影響に比して、遙かに少なくなるのは、自然の數である。『平家物語』は王朝文學の子である。『太平記』は『平家』の子で、王朝文學の孫である。『平家』は四百年の洗鍊を経た平安朝の文學から、風雅幽玄の要素を直接に多量に受け入れて、之れに加ふるに新時代の新たに培ひ得た剛健勇壯の要素を以てした。かくして其の中には、公卿道と武士道、優柔性と武骨性、女性味と男性味、雅言格と俗言格等、いろ／＼の要素が自然に混入して、こゝに複雑にして調和のある、何とも云はれぬ渾然たる趣味の成立を見たのである。加ふるに『平家』には、王朝四百年の平和に馴れた國民が、保元平治以來の打ち續く戦亂と、驚心駭魄の悲劇とに目覺まされた無常必衰の哀感が沁み入つて、其の文章に、甚深微妙の縮りと、落着きと、讀者を誘ひ入れる同情素とを與へて居る。『平家』は斯様な時代に出で、かやうな時代の子の筆に成つたので、自然にあのやうな作が出來たのであるが、『太平記』の事情は全く之れと違つてゐた。『太平記』は、其の祖父にあたる遠い時代の平安朝から、風雅

な文學の影響を受けることが少なかった。而して専ら『平家』、『盛衰記』等の軍記に據つて、戦争や政争本位の男性的駆引を叙したので、其の結果はおのづから、武骨な單調なものとなつたが、殊に『太平記』をして非文學的、非情味的たらしめたものは、其の道徳的、知識的なる實際の空氣であつた。『平家』時代が平和期から戦争期に移る慘憺たる光景によつて極度の哀傷を感じ、而して『平家』が其の哀感を叙する事によつて、底深き落着きと同情素とを備へ得たのに反し、『太平記』時代は戦亂に飽いて平和を求め、鎌倉の政治に飽いて建て直されたる新政を求め、皇家も公卿も武家も、皆此の種の實際的理想に燃えて、懸命の努力を續けてゐた。かやうな時代に出で、かやうな時代の子の手に成つた『太平記』が實際本位となり、知識的、道義的となり、武骨になり、單調になつたのは、極めて自然の事である。而してかやうな方面に力瘤を入れた結果が、一種の理想宣傳となり、智謀奇計の説明となり、文章の表面粉飾に傾くやうになつたのは、また餘儀もなき事といはねばならぬ。

要するに、『太平記』の最もおもなる特色は、第一には、當時の國民が生死を賭して新しい理想に進んだ心持を書いた所にある。第二には智謀奇計と誇張とを本位とする戦争の細かな描寫にある。第三には心を寫さずして事を寫さうとした所にある。言ひ換へれば道義的、知識的、事件本位、文章本位になつた所、これが『太平記』の長所にして同時に短所といふべきであらう。

第十八 七生まで唯だ同じ人間に

一

私は先きに『平家』の「入道逝去」に取り合はせて、『太平記』第一の敵役、足利尊氏逝去の一章を引いた。私は又代表的巨人に關する代表的大事件を選択して、此の作の特色を手短に説明する爲め、眞先に南朝第一の忠臣にして、作者の最も尊敬と同情とを寄せた楠正成討死の一章を引いて見る。

楠判官正成、舍弟帶刀正季に向つて申しけるは、敵前後を遮つて、御方は陣を隔てたり。今は遁れぬ所と覺ゆるぞ。いざや先づ前なる敵を一散らし追ひ捲つて、後なる敵に戦はんと申しければ、正季然るべく覺え候と同じで、七百餘騎を前後に立て、大勢の中へ懸け入りける。左馬頭(足利直義)の兵共、菊水の旗を見て、よき敵也と思ひければ、取籠めて之れを討たんとしけれども、正成正季、東より西へ破つて通り、北より南へ追ひ靡け、よき敵と見るをば馳せ並べて、組んで落ちては首を

取り、合はぬ敵と思ふをば、一太刀打つて懸け散らす。正成と正季と、七度合ひて七度分かる。其の心偏に左馬頭に近づき、組んで討たんと思ふにあり。遂に左馬頭の五十萬騎、楠が七百餘騎に懸け靡けられて、又須磨の上野の方へぞ引返しける。直義朝臣の乗られたりける馬、矢尻を蹄に踏み立て、右の足を引きける間、楠が勢に追ひ攻められて、已に討たれ給ひぬと見えける所に、薬師寺十郎次郎唯だ一騎、蓮池の堤にて返し合はせて、馬より飛んでおり、二尺五寸の小長刀の石突を取り延べて、懸かる敵の馬の平頸、むながひの引廻、切つては勿ね倒しはね倒し、七八騎が程切つて落しける其の間に、直義は馬を乗り替へて、遙かに落ち延び給ひけり。

左馬頭楠に迫立てられて引き退くを、將軍(尊氏)見給ひて、新しき手を入れ替へて、直義討たすなと下知せられければ、吉良、石堂、高、上杉の人々六千餘騎にて、湊河の東へ懸け出でて、跡を切らんとぞ取り巻きける。正成正季又取つて返して此の勢にかゝり、懸けては打違へて殺し、懸け入つては組んで落ち、三時が間に十六度まで闘ひけるに、其の勢次第々に滅びて、後は僅かに七十三騎にぞ成りにける。此



全大記平太 版治萬

の勢にても打破つて落ちば落つべかりけるを、楠京を出てしより、世の中の事今は是れ迄と思ふ所存ありければ、一足も引かず戦つて、機已に疲れければ、湊河の北に當たつて、在家の一村ありける中へ走り入つて、腹を切らん爲めに、鎧を脱いで其の身を見るに、斬疵十一箇所迄ぞ負ひたりける。此の外七十二人の者共も、皆五箇所三箇所の疵を被らぬ者はなかりけり。楠が一族十三人、手の者六十餘人、六間の客殿に二行に竝居て、念佛十返計り同音に唱へて、一度に腹をぞ切つたりける。

正成座上に居つゝ、舍弟の正季に向つて、抑々最期の一念によつて、善惡の生を引くといへり。九界の間に何か御邊の願ひなると問ひければ、正季からくくと打笑ひて、七生まで唯だ同じ人間に生まれて、朝敵を滅ぼさばやとこそ存じ候へと申しければ、正成よに嬉しげなる氣色にて、罪業深き惡念なれども、我れも斯様に思ふ也。いざさらば同じく生を替へて、此の本懐を達せんと契つて、兄弟共に刺し違へて、同じ枕に伏しにけり。……抑々元弘以來、忝くも此の君に憑まれまゐらせて、忠を致し功に誇る者幾千萬ぞや。然れども此の亂又出て來て後、仁を知らぬ者は、朝恩を

捨て、敵に屬し、勇なき者は苟も死を免れんとて刑戮にあひ、智なき者は時の變を辨ぜずして道に違ふ事のみありしに、智仁勇の三徳を兼ねて、死を善道に守るは、古より今に至るまで、正成ほどの者は未だ無かりつるに、兄弟共に自害しけるこそ、聖主再び國を失ひて、逆臣横まに威を振ふべき、其の前表の驗なれ。

二

いかにも張り切つた力の文章である。吾々は之れを讀んで、先づ文章の氣魄に打たれる。吾々は此の勢強き文章に導かれて、先づ楠が七百餘騎と共に左馬頭直義が五十萬騎に駆け向ふであらう。七度も合ひつ分かれつして、重圍を切り開き切り開き、敵將を目がけて懸け進むであらう。三時、十六度の戦も其の甲斐なく、七十三騎に討ち滅らされて、在家の客殿に居竝んで無念の腹を切るであらう。而して義憤の兄弟が、「七生人間」の誓を言ひ交はして刺し違へる光景を幻影に描きつゝ、此の三徳兼備の勇將の戦死による聖代の御行末を豫想して長大息するであらう。「太平記」の文章は、實に息もつがせぬ文章である。實狀實景を目のあたりに見せて手に汗を握らせる文章である。一種の強い魂を吹

き込んで士氣を鍛へ成す文章である。凡そ是等の點に於いて、『太平記』は古今の國文學中の最上位を占むべきものであるが、惜しいかな、そこに微妙な心の潤ひの味が無い、『平家』の持つてゐる様な、細み、微けみ、寂寥味、柔軟味、曲折味、沈潜味、浸透味が無い。戦を寫すに於いて然り。死を寫すに於いて然り。景を寫すに於いて亦然り。戀を寫すに於いて亦々然りである。

讀者は『平家』が齋藤別當實盛の悲痛な討死を寫して後に、

「朽ちもせぬ空しき名のみ留め置きて、骸は越路の末の塵と、なるこそ哀れなれ。

といふ、寂しい諷諧の評語を下した事を記憶されるであらう。また清盛入道が悶死を寫しては、

「さしも日本一州に、名を揚げ威を振ひし人なれども、身は一時の煙となつて、都の空へ立ち上り、骸は暫し徘徊ひて、濱の眞砂に戯れつゝ、空しき土とぞなり給ふ。」

といひ、幼帝の御入水を寫し奉つては、

悲しきかなや、無常の春の風、忽ちに花の御姿を散らし、痛ましき哉分段の荒き波、玉體を沈め奉る。殿をば長生と名づけて、長き柄と定め、門をば不老と號して、老いせぬ關とは書きたれども、未だ十歳の内にして、底の水屑と成らせおはします。十善帝位の御果報、申すもなかく愚かなり。

と云ひつゝ、命終の刻下に於いてあらゆる高さ大きさを失つた巨人貴人が、大天地の前にひれ伏し、嚴かなる因果の理法の裡に吸ひ込まれるやうな、尊い寂しさを見せた甚深味の評語を下した事を記憶されるであらう。而して是等の微妙な着眼筆致が『平家物語』に對して、いかに床しい奥深い味はひを與へたかを記憶されるであらう。此の／＼味はひが『太平記』に無いのである。無いではないが、極めて少ないのである。『太平記』は張肘で人生に向つた。而して奥行の淺い、平面的、知識的なる語句と、向鼻の強い誇張の修辭と、而して屢は句の過ぎた古典の駢麗句とを以て、之れを飾らうとした。私は『太平記』の爲めに、實に之れを惜しまざるを得ぬ。

三

「とにかく『太平記』の命は、壯麗なる文を構へて、偉大なる魂を吹き込むところにあるが、之れに伴ふ一つの弊はくつろぐ事のない緊張にあつた。『太平記』は肘を張り眼を瞋らして目的物を睨んだ。而して油断のない智巧によつて之れを現はさうとした。七度合ひ七度分かれて敵の大將を刺さんとし、七生まで人間に生れて朝敵を滅ぼさうとした楠公兄弟の心は、やがて『太平記』の作者の人生觀で、同時にその創作觀であつたであらう。兵部卿宮護良親王は還俗して鎌倉を滅ぼされた。世が一たび鎮ま

つて後も、猶ほ楯を作がせ、鎌を砥がせて、合戦の用意を續け、剃髮染衣を促す勅諭に對しても、尊氏一人を除かぬ限りは、兵をも解かし三衣をも着けじと言はれた。鎌倉の土牢で、淵邊伊賀の刃に罹らせられても、長く御膚も冷えず、御目をも塞がれなかつたと云はれる。親王の御心は、やがて『太平記』の作者の創作觀であつたであらう。作者は後醍醐天皇の崩御を寫していふ。

南朝の年號延元三年八月九日より、吉野の主上御不豫の御事ありけるが、次第に重らせ給ふ。醫王善逝の誓約も、祈るに其の驗なく、耆婆扁鵲が靈藥も、施すに其の驗おはしませず、玉體日々に消えて、晏駕の期遠からじと見え給ひければ、大塔の忠雲僧正、御枕に近づき奉りて、涙を抑へて申されけるは、神路山の花再び開くる春を待ち、石清水の流れ遂に澄むべき時あらば、さりとて佛神三寶も捨て參らせらるゝ事は、よも候はじとこそ存じ候ひつるに、御脈已に替はらせ給ひて候由、典藥頭驚き申し候へば、今は偏に十善の天位を捨て、三明の覺路に赴かせ給ふべき御事をのみ、思召し定められ候べし。扱も最後の一念に依つて、三界に生を引くと、經文に説かれて候へば、萬歳の後の御事、萬叡慮に懸かり候はん事をば、悉く仰せ

置かれ候て、後生善所の望みをのみ、叡心に懸けられ候べしと申されたりければ、主上苦しげなる御息を吐かせ給ひて、妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者、是れ如來の金言にして、平生朕が心にありし事なれば、秦の穆公が三良を埋み、始皇帝の寶玉を隨へし事、一つも朕が心に取らず、唯だ生々世々の妄念ともなるべきは、朝敵を悉く亡ぼして、四海を泰平ならしめんと思ふばかりなり。朕即ち早世の後は、第七の宮を天子の位に即け奉りて、賢士忠臣事を圖り、義貞義助が忠功を賞して、子孫不義の行なくは、股肱の臣として天下を鎮むべし。これを思ふ故に、玉骨は縦ひ南山の苔に埋るとも、魂魄は常に北關の天を望まんと思ふ。若し命を背き義を輕んぜば、君も繼體の君に非ず、臣も忠烈の臣にあらじと、委細に綸言を遺されて、左の御手に法華經の五の卷を持たせ給ひ、右の御手には御劍を按じて、八月十六日の丑の刻に、遂に崩御成りにけり。悲しいかな、北辰位高くして百官星の如く列ると雖も、九泉の旅の路には供奉仕る臣一人もなし。奈何せん、南山の地僻にして萬卒雲の如くに集まると雖も、無常の敵の來るをば禦ぎ止むる兵更になし。唯だ中流に

船を覆して一壺の浪に漂ひ、暗夜に燈消えて、五更の雨に向ふが如し。葬禮の御事、かねて遺教ありしかば、御終焉の御形を改めず、棺槨を厚くし御座を正しうして、吉野山の麓、藏王堂の良なる林の奥に、圓丘を高く築いて、北向きに葬り奉る。

片御手に法華を、片御手に御劍を按じつゝ、御執着の崩御は、實にすさまじき御終焉で、前なる護良親王の御最期に對し、楠兄弟の最期と相對して、誠に此の君にして此の御子あり、此の臣ありといふべきであるが、此の人々の心即ち、『太平記』の作者の心で、更に適切にいふと、此の時代にして此の君も、此の親王も、此の忠臣も、此の作もあつたのであらう。私かに思ふに、文學としての『太平記』の命は、此の積極的活動性、たるみな緊張性の具現した所にある、倒れてもやまざる執着力を現はす爲めに、層々累々の花やかな文を行つた所にある。但し、積極的活動やたるみな緊張性の描寫は、如何に巧みでも、多くは一時の爽快を感せしめるだけで、深い長い同情を惹き難いものであり、消極的な哀愁衰滅の描寫は、人の心を深く長く動かし易いものであるが、『太平記』が『平家』ほどに喜ばれぬ一つの原因は、此の一面にもあるのであらう。

序に、此の後醍醐天皇崩御につゞく「悲しいかな、北辰位高くして百官星の如く列ると雖も、九泉の

旅の路には供奉仕る臣一人もなし……」のあたりの文句は、その趣致に於いて、何となく、『平家』の先帝御入水や、入道逝去の條の「悲しきかなや、無常の春の風、忽ちに花の御姿を散らし」や、「身に替はり命に代はらんと忠を存せし、數萬の軍旅は、堂上堂下に竝居たれども、是れは目にも見えず、力にもかゝはらぬ、無常の利鬼をば、暫時も戦ひ返さず」といふあたりの趣に似通つて居る。又前に擧げた正成の戦死につゞく文句は、神田本には、

同じく腹をかき切つて、枕を合はせてふしたりける。惜しきかなや、元弘已來忝くも君にたのまれ奉つて、忠をいたし功に誇る者幾千萬ぞや。

となつてゐて、殊に著るしく、『平家』の「先帝御入水」や「入道逝去」につゞいた文句に似通つた所がある。恐らく『太平記』の作者は、『平家』や『盛衰記』のあのあたりを手本とし、又競争者とも見て秋波をくれつゝ、其の意氣軒昂の筆を行つたものであらうが、著るしく似通つては居りながら、文句の花が勝つて情味の實の人に迫る所が少なく、知的に目が詰んで居ると同時に、情的に潤ひの少ない傾きのあるのは、どうしたものであらう。私は道義に、智略に、事實に、文彩に重きを見出だした、作者と世間と、時代とが、三者相依り相助けて此の顯現をなしたものであると考へる。

第十九 菊水の旗影

一

『太平記』の最もおもなる興味の一つで、作者と讀者と共に神往した題材は、謀計本位の戦争記である。左に其の方面の一例として、楠正成が赤坂の軍の一節を引いて見る。

遙々と東國より上りたる大勢共、未だ近江國へも入らざる前に、笠置城已に落ちければ、無念の事に念うて、一人も京都へは入らず、或ひは伊賀伊勢の山を經、或ひは宇治醍醐の道を要つて、楠兵衛正成が楯籠つたる赤坂城へぞ向ひける。石川河原を打過ぎ、城の有様を見やれば、俄に拵へたりと覺えて、はかしく堀をもほらず、僅に堀一重塗つて、方一二町には過ぎじと覺えたる其の内に、櫓二三十が程掻き並べたり。これを見る人毎に、あな哀れの敵の有様や、此の城我等が片手に載せて、投ぐるとも投げつべし。あはれせめて如何なる不思議にも、楠が一日こらへよ

かし。分捕功名して恩賞に預らんと、思はぬ者こそ無かりけれ。されば寄手三十萬騎の勢共、打寄すると均しく、馬を踏み放ちふみ放ち、堀の中に飛び入り、櫓の下に立ち並んで、我れ前に打入らんとぞ争ひける。正成は元來籌を帷幄の中に運らし、勝つ事を千里の外に決せんと、陳平張良が肺肝の間より流出せるが如きの者なりければ、究竟の射手を二百餘人城中に籠めて、舍弟の七郎と和田五郎正遠とに、三百餘騎を差副へて、よその山にぞ置きたりける。寄手はこれを思ひも寄らず、心を一片に取つて、唯だ一揉みに揉み落さんと、同時に皆四方の切岸の下に着いたりける所を、櫓の上、狭間の陰より指しつめ引きつめ、鐵を揃へて射ける間、時の程に手負死人千餘人に及び。東國の勢共案に相違して、いや／＼此の城の爲體、一日二日には落つまじかりけるぞ。暫らく陣々を取りて役所を構へ、手分をして合戦を致せとて、攻口を少し引き退き、馬の鞍を下し、物具を脱いで、皆帷幕の中にぞ休み居たりける。楠七郎、和田五郎、遙かの山より直下して、時刻よしと思ひければ、三百餘騎を二手に分け、東西の山の本陰より、菊水の旗二旒、松の嵐に吹き靡かせ、

閑に馬を歩ませ、煙嵐を捲いて押寄せたり。東國の勢これを見て、敵か味方かとためらひ怪しむ所に、三百餘騎の勢共、兩方より吶喊を咄と作つて、雲霞の如くにたなびいたる三十萬騎が中へ、魚鱗懸りに懸け入り、東西南北へ破つて通り、四方八面を切つて廻るに、寄手の大勢あきれて陣を成し兼ねたり。城中より三つの木戸を同時に颯と排いて、二百餘騎鋒を並べて打つて出て、手さきを廻して散々に射る。寄手さしもの大勢なれども、僅かの敵に驚き騒いで、或ひは維げる馬に乗つて、あふれども進まず、或ひは弛せる弓に矢をはげて、射んとすれども射られず、物具一領に二三人取り付き、我がよ人のよと引き合ひける其の間に、主討たるれども従者は知らず、親討たるれども子は助けず、蜘蛛の子を散らすが如く、石川河原へ引き退く。其の道五十町が間、馬物具を捨てたる事、足の踏みどころも無かりければ、東條一郡の者共は、俄に德附いてぞ見えたりける。さしもの東國勢、思ひの外に爲損じて、初度の合戦に負けければ、楠が武略侮りにくしとや思ひけん、吐田檜原邊に、各打寄せたれども、やがて又推し寄せんとは擬せず、此に暫らく控へて、畿内の案

内者を先に立て、後攻のなき様に、山を刈り廻し、家を焼き拂うて、心安く城を攻むべきなど評定ありけるを、本間澁谷の者共の中に、親打たれ子討たれたる者多かりければ、命生きては何かせん、よしや我等が勢ばかりなりとも、馳せ向つて討死せんと憤りける間、諸人皆之れに勵まされて、我れもくと馳せ向ひけり。

彼の赤坂の城と申すは、東一方こそ山田の畔重々に高く、少し難所の様なれ、三方は皆平地に續きたるを、堀一重に堀一重塗つたれば、如何なる鬼神が籠りたりとも、何程の事が有るべきと、寄手皆これを侮り、又寄すると均しく、堀の中切岸の下まで攻め附いて、逆茂木を引きのけて打つて入らんとしけれとも、城中には音もせず。是れは如何様昨日の如く、手負多く射出だして漂ふ處へ、後攻の勢を出だして、揉み合はせんずるよと心得て、寄手十萬餘騎を分けて、後の山へ指向けて、残る二十萬騎稻麻竹葦の如く、城を取り巻いてぞ攻めたりける。斯かりけれども城中よりは、矢の一筋をも射出ださず、更に人ありとも見えざりければ、寄手いよいよ氣に乗つて、四方の堀に手を懸け、同時に上り越えんとしける處を、本より堀を



三〇六
二重に塗つて、外の塀をば切つて落すやうに拵へたりければ、城の中より、四方の塀の釣繩を一度に切つて落したりける間、塀に取り附きたる寄手千餘人、壓に打たれたるやうにて、目ばかりはたらく所を、大木大石を投げ懸け投げ懸け打ちける間、寄手又今日の軍にも、七百餘人討たれけり。東國の勢共、兩日の合戦に手懲りをして、今は城を攻めんとする者一人もなし。唯だ其の近邊に陣を取つて、遠攻めにこそしたりけれ。



元祿版 繪入太平記

三〇七
四五日が程は斯様にてありけるが餘りに暗然として守り居たるも言ひ甲斐なし。方四町にだに足らぬ平城に、敵四五百人籠りたるを、東八箇國の勢共が攻め兼ねて、遠攻めしたる事の淺猿さよなんと、後までも人に笑はれん事こそ口惜しけれ。前々は早りのまゝ楯をも衝かず、攻具足をも支度せて攻むればこそ、そゞろに人は損じつれ。今度は質を替へて攻むべしとて、面々に持楯をはかせ、其の面にいたため皮を當て、輒く打たれぬ様に拵へて、かづきつれてぞ

攻めたりける。切岸の高さ堀の深さ幾程もなければ、走り懸かつて塀に着かん事は、最安く覚えけれども、これもまた釣塀にてやあらんと危みて、左右なく塀には着かず、皆堀の中におり漬つて、熊手を懸けて塀を引きける間、既に引き破られぬべう見えける處に、城の中より、柄の一二丈長き杓に、熱湯の沸き返りたるを酌んで懸けたりける間、甲の天邊綿嚙のはづれより、熱湯身に通つて焼け爛れければ、寄手こらへかねて、楯も熊手も打捨て、ばつと引きける見苦しき、矢庭に死ぬるまでこそ無けれども、或ひは手足を焼かれて立ちもあがらず、或ひは五體を損じて病み臥する者、二三百人に及べり。寄手質を替へて攻むれば、城中工を替へて防ぎける間、今は兎も角もすべき様なくして、唯だ食攻めにすべしとぞ議せられける。

「實に威勢よくすら〜と書いて居る。楠が關東勢の裏を搔いては、意表に出で、機先を制しつゝ、敵を惱ましたやうに、作者は讀者の心をつかんで、意表に出でつゝ、其の先その先と巧みに興味を繋いで居る。面白い、實に面白い。が、唯だ惜しいのは、描寫に身に沁むやうなこっくりした味の少ないことである。腕力本位、計略本位、花やかな文章本位で、低徊して耽味させる所の少ない事である。

終はりを急ぐので委しく説明する餘裕はないが、此の戦と多少事情の似通つて居る『平家』の戦、例へば富士川、燧ヶ城、一の谷、福隆寺繩手等の合戦記と比較すれば、思ひ半ばに過ぎるであらう。要するに『太平記』には、事を寫し、事の表面を飾らうとした傾きがある。興味に釣られて、張子式に膨れあがつた心情を、そのまゝ誇張するといふ傾きがある。例へば「笠置の軍」の中に、一人の大力なる律僧の奮闘振を寫して、

本性房といふ大力の律僧のありけるが、褌衫の袖を結んで引き違へ、尋常の人の百人しても動かし難き大磐石を、軽々と脇に挟み、鞆の勢ひに引懸け、二三十續け、打ちにぞ投げたりける。數萬の寄手、楯の板を微塵に打碎かるゝのみにあらず、少しも此の石に當たる者、尻居に打居ゑられければ、東西の坂に人類れを築いて、人馬いやが上に落ち重り、さしも深き谷二つ、死人にてこそ埋めたりけれ。

といへるが如きは、此の作者が人生事實の眞といふ事に思ひを致さぬ、氣輕な表面的誇張の癖を著しく見せたものである。また妻鹿孫三郎の勇力を寫して、

唯だ一騎西朱雀を指して引きけるを、印具駿河守の勢五十餘騎にて追懸けたり、其

の中に年の程二十ばかりなる若武者、たゞ一騎馳せ寄せて、引いて歸りける妻鹿孫三郎に組まんと近づいて、鎧の袖に取り着きける所を、孫三郎これを物ともせず、長き肘を差し延べて、鎧の總角を掴んで中に提げ、馬の上三町ばかりぞ行きたりける。此の武者然るべき者にてやありけん、あれ討たすなとて、五十餘騎の兵、跡に附いて追ひけるを、孫三郎尻目にはつたと睨んで、敵も敵によるぞ。一騎なればとて、我れに近づいてあやまちすな。ほしからは是れ取らせん。請取れと云つて、左の手に提げたる鎧武者を、右の手に渡して、えいと抛げたりければ、跡なる馬武者六騎が上を投げ越して、深田の泥の中へ、見えぬ程こそ打ちこらうだれ。

といへるが如きは、格別の誇張ではないが、其の描寫が情味の伴はぬ、事件本位の興味中心になつた事を語るものであらう。吾々は之れに似通つた『平家』なる齋藤別當實盛や、薩摩守忠度や、能登守教經等の戦ひ振や、人手玉の力業の描寫と比べて見て、特にその感を深うするのである。時代がさうである。人の心がさうである。一代の興味に投ずる作者の筆が、さうなつたのに不思議はないが、吾々が『太平記』について、言ふまいと思へど惜しき第一はこれである。

第二十 太平記に於ける情味の筆

一

『太平記』は戦争本位、謀計本位、道義本位、知識本位のものではあるけれども、折々は趣味を主として、景色の美や人情の哀れを寫さうとした所もある。景色に人情を絡んだものでは、例へば名高い俊基朝臣の東下りの道行の如きが、その最もよい例であらう。

落花の雪に踏み迷ふ、片野の春の櫻がり、紅葉の錦を衣て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明かす程だにも、旅宿となれば物憂きに、恩愛の契り浅からぬ、我が故郷の妻子をば、行方も知らず思ひおき、年久しくも住み馴れし、九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出て給ふ、心の中ぞ哀れなる。憂きをば留めぬ相坂の、關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身を浮舟の浮き沈み、駒もとゞろと踏み鳴らす、勢多の長橋打渡り、行

き交ふ人に近江路や、世をうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかと哀れなり。時雨もいたく森山の、木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず、物を思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を止めて顧みる、故郷を雲や隔つらん。番場醒ヶ井柏原、不破の關屋は荒れ果てて、猶ほ漏るものは秋の雨の、いつか我が身の尾張なる。熱田の八劍伏し拜み、潮干に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕潮に、引く人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にしあれば、誰れか哀れと夕暮の、晚鐘鳴れば今はとて、池田の宿に着き給ふ。

七五の連鎖を何處までも繋いで行くところは、『平治』や『平家』の準道行文に比して大分發達はして居るが、同時にわざとらしく、文字に使はれたところがあつて、景色も浮かばず、また人の情を誘ふこともりしたところがない。

専ら人情を現はしたものは、新田義貞が勾當内侍に對する戀物語の如きがある。

中にも、彼の北臺勾當内侍の局の悲みを傳へ聞くこそあはれなれ。此の女房は頭大

夫行房の女にて、金屋の内に粧を閉ぢ、鶏障の下に媚を深くして、二八の春の頃より内侍に召されて、君王の傍らに侍り、羅綺にだも堪へざる貌は、春の風一片の花を吹き残すかと疑はる。紅粉を事とせる顔は、秋の雲半江の月を吐き出だすに似たり。されば椒房の三十六宮、五雲の漸くに遶る事をいたみ、禁漏の二十五聲、一夜の正さに長き事を恨む。去んぬる建武の始め、天下また亂れんとせし時、新田左中將常に召されて、内裏の御警護にぞ侍はれける。或る夜月冷しく風秋なるに、この勾當の内侍、半ば簾を捲きて琴を弾じ給ひけり。中將その怨聲に心引かれて、覺えず禁庭の月に立吟ひ、あやなく心そゞろにあこがれてければ、唐垣の傍に立ち紛れて窺ひけるを、内侍見る人ありと物わびしげにて、琴をば引かずなんぬ。夜痛く深けて、有明の月の隈なくさし入りたるに、たぐひまでやはつらからぬと打ち詠め、しをれ伏したる氣色の、折らば落ちぬべき萩の露、拾はゞ消えなん玉篠の、あられよりなほあだなれば、中將行方も知らぬ道にまよひぬる心地して、歸る方もさだかならず、淑景舎の傍らにやすらひかねて立ちあかす。朝より夙に歸りても、幽かなり

し面影の、なほこゝもとにある心迷ひに、世の態人の言ひかはす事も心の外なれば、いつとなく、おきもせず寝もせて夜を明かし日を暮らして、若ししるべする海人だにあらば、忘れ草の生ふといふ浦のあたりにも、尋ね行きなましと、そゞろに思ひ沈み給ふ。あまりにせん方なきまゝに、媒すべき人を尋ね出だして、そよとばかりを知らすべき、風のたよりの下萩の、穂に出づるまではなくともとて、

わが袖の涙に宿る影とだに

知らず雲井の月やすむらん。

と詠みて遣はされたりければ、君の聞召されん事も憚りありとて、よに哀れげなる氣色に見えながら、手にだに取らずと、使歸りて語りければ、中將いとと思ひしをれていふべき方なく、有るを憑みの命とも覺えずなりぬべきを、何人か奏しけん、君等閑ならず聞召して、夷心のわく方なさに、思ひそめけるも理なりと、哀れなる事に思召されければ、御遊の御次に左中將を召され、御酒たばせ給ひけるに、勾當の内侍をば、此の盃に附けてとぞ仰せ出だされける。左中將限りなく忝しと悦びて、

翌の夜やかて牛車さわやかに仕立て、かくと案内せさせたるに、内侍もはや此の年月の志に、さそふ水あらばと思ひけるにや、さのみ深け過ぎぬ程に、車のきしる音して、中門に轅を指し廻せば、侍兒一人二人、妻戸をさしかくして驚破きあへり。中將は此の幾年を戀ひ忍んで、相逢ふ今の心の中、優曇花の春待ち得たる心地して、珊瑚の樹の上に陽臺の夢長くさめ、連理の枝の頭に驪山の花自ら濃かなり。

情事の描寫では、作中第一ともいふべき所であるが、まことに美しく面白く書きつゞけてある。殊に漢文では『文選』や『朗詠集』などから、和文では『源氏物語』や『伊勢』や『土佐』などから、美しい文句を借りて来て厚化粧式に仕立てゝはあるが、文句が内容から遊離して、情のこもつた落ちついた姿が、しみじみと讀む者の魂に迫つて來ないのは、やはり筋を本位とし文飾を第一義とした結果であらう。又この邊りには句の過ぎた古典の美辭麗句が、なまなか真情の流露を妨げた趣がある。『太平記』が人情を寫した文の中で最もすぐれて居るのは、やはり小楠公が亡き父の首に泣く條などであらう。あの涙の光景を、流布本にはかう書いてある。

其の後尊氏卿楠が首を召されて、朝家私日久しく相馴れし舊好の程も不便なり、跡

の妻子共、今一度空しき貌をも、さこそ見たく思ふらめとて、遺跡へ送られける情の程こそ有難けれ。楠が後室、子息正行これを見て、判官今度兵庫へ立ちし時、様申し置きし事ども多かる上、今度の合戦に必ず討死すべしとて、正行を留め置きしかば、出でしを限りの別かれなりとは、豫ねてより思ひまうけたる事なれども、貌を見ればそれながら、目塞がり色變じて、替はり果てたる首を見るに、悲みの心胸に満ちて、歎きの涙せきあへず。今年十一歳に成りける帶刀、父が首の生きたりし時にも似ぬ有様、母が歎きのせん方もなげなる様を見て、流るゝ涙を袖に押へて、持佛堂の方へ行きけるを、母怪しく思ひて、則ち妻戸の方より行きて見れば、父が兵庫へ向ふ時、形見に留めし菊水の刀を、右の手に抜き持ちて、袴の腰を押しさげて、自害をせんとぞ仕居たりける。母急ぎ走り寄つて、正行が小腕に取り附いて、涙を流して申しけるは、梅檀は二葉より芳しといへり。汝をさなくとも父が子ならば、これ程の理に迷ふべしや。子心にもよく、事の様を思うて見よかし。故判官が兵庫へ向ひし時、汝を櫻井の宿より返し留めし事は、全く跡を弔はれん爲めにあ

らず、腹を切れとて残し置きしにもあらず。我れ縦令運命盡きて、戰場に命を失ふとも、君いづくにも御座有りと承らば、死に残りたらん一族若黨共をも扶持し置き、今一度軍を起こし、御敵を滅ぼして、君を御代にも立て進らせよと言ひ置きし處なり。其の遺言具に聞きて、我れにも語りし者が、何時の程に忘れけるぞや。かくては父が名を失ひ果て、君の御用に合ひまゐらせん事、有るべしとも覺えずと、泣く泣く諫め留めて、抜きたる刀を奪ひ取れば、正行腹を切り得ず、禮盤の上より泣き倒れ、母と共にぞ歎きける。其の後よりは正行、父の遺言母の教訓、心に染み肝に銘じつゝ、或る時は童部共を打倒し、首を取る眞似をして、是れは朝敵の首を取るなりといひ、或る時は竹馬に鞭を當て、是れは將軍を追懸け奉るなどいひて、はかなき手ずさみに至るまでも、唯だ此の事をのみ業とせる、心の中こそ恐ろしけれ。

是れは前々の文とは違つて、やゝこしい和漢の古典の引用もなく、勿體ぶつた文飾もないが、素直な文句の運びの中に、實況が具現し眞情が流露して、いかにもよく出来てゐる。私は此の邊が『太平

記』に於ける第一の名文であらうかと思つて居る。おのづからにして道義的、知識的、宣傳的なる作者の趣意にも合ひ、同時に文學的、情味的の一面をも備へ得た最上位の文章だと思つてゐる（私は此の章の花形たる後室や正行の夫たり父たる楠公正成について、「判官今度兵庫へ立ちし時」、「正行を留め置きしかば」、「君を御代にも立てまゐらせよと言ひ置きし處なり」と、敬語なしの呼び捨てにしながら、尊氏についてのみ、「楠が首を召されて」、「遺跡に送られける」、「將軍を追懸け奉る」など言はせた、足利偏尊の筆致を快く思はない。また『太平記』の作者が諸人物に對する敬語使用の態度に比べて、『平家』の作者の敬語の使ひ振を、さすがにえらいと思つてゐる者である。之れについては、本書の中にも引用した俊寛や木曾義仲に對する敬語の加へ方について一考していただきたい。）が、是れは恐らく、『太平記』の原作者が取附の初筆に達した境地ではあるまい。明治の中頃に見出だされた「神田本」といふ異本には、此處を左の如く書いて居る。

其の後尊氏卿正成が首を取りよせて、朝家に久しく相馴れし舊好も不便なり、妻子共今一度空しき貌をも見度うこそ思ふらめとて、楠が遺跡へぞ送り遣はさるゝ情の程こそ有難けれ。（中略）正行は今年十一歳に成りけるが、空しき首に取り附いて、泣き

悲しむ事限りなし。やゝあつて落つる涙を押へながら傍らへ行きけるを、若黨怪しと思ひて、跡に付いて見れば、父が兵庫へ向ふとて、神南の宿よりかへし留めし時、形見にせよとて取らせたりし、菊水作りの刀を抜いて、腹を切らんとしけるを、若黨走り寄つて取り留め、此の由を急いで告げたりければ、母は涙を押へて申しけるは、梅檀は二葉より芽てる園香ばしといへり。汝少くとも正成が子ならば、是れほどの理に迷ふべきか。少な心にも、能く／＼事のやうを思ふべし。父が兵庫へ向はれし時、道より汝をかへし留むる事、只今腹切れとて残し置きけるか。正成たとひ打死すとも、正行は残り留まつて、一族若黨を扶持し立て、今一度義兵を擧げ、朝敵を亡ぼして、君の忠功にも備へ、父の遺恨をも散ぜよとて留め置きし身ぞかし。其の庭訓を具さに聞いて、わらはにも語りし者の、いつの程に忘れけるにや……。

流布本に於ける母の追跡發見が、此の方では若黨の事になつてゐる類で、此の異本が一體に趣向が稚く、文章の拙い所を見ると、此の異本が原形——少なくとも比較的古い方の一つ——であつたのであらう。而して今の流布本の『太平記』は、このやうに拙かつたのを、同じ作者が加筆推敲したのか、或ひ

は他の優れた手腕の文章家が添削し潤色したのであらう。而して、この後出の詞華言葉に富んだ、謂はゆる流布本が原形の正本と視られて、此の神田本が一種の異本と視られるやうになつたのであらう。私は此の異本が文章が拙いながら、素樸な中に『平家』に似通つた味はひのあるのを見て、殊に床しく思つて居るのである。

第二十一 おさらば

拙い講義を長々とつゞけましたが、いよくこれで「おさらば」に致します。私の本来の希望は、『太平記』に次ぎ、室町戦國の合戦記から、江戸時代の軍記を経て、維新、西南、日清、日露の戦争記、例へば『肉弾』、『從征日記』、『此一戦』、『村に還りて』等にも及ぼしたかったので、まだ御話しすべき事、お話ししたいと思つた事の三が一にも達せぬ中に、お名残になつたのは、残念ですけれども、限りある範圍の仕事で、據ろありません。

私はまづ、我が國文學史上に於ける「軍記物語」、即ち文學軍記の何たるかを御話致しました。最もおもなる軍記物語が何かといふ事を御話致しました。其の軍記物語の種子が如何にして蒔かれ、如何にして培はれ、それが如何に變遷し發達して、完成の域に達したかをお話致しました。私はまた軍記

の内容と形式とが相並んで發達し、武人が社會の從位を占めた時は、軍記も時の文學の中に從位を占め、武人が天下の第一位を占めるに及んで、軍記も始めて時の文學の中に第一位を占めた事、そして其の時がまさしく軍記物語發達の頂點に達した時であつた事をお話致しました。私は又最も發達した軍記の複雑なる内容を概観して、其の大意を例説し、それが武人生活と戦争との描寫に力點を置きながら、同時に公卿道、戀愛道、藝術道等の種々相をも寫した事、殊に無常悲哀の人生觀によつて統一せしめた事が、其の大を成し、深きを成し、高きを成した事をお話致しました。

取りすべていふと、私は我が「軍記物語」について、「何物?」、「何故?」、「如何に?」の大意を説明しました。殊に『平家物語』をば軍記の中心にして、同時に發達の頂點に達したものと認め、其の意義、趣味、價値の説明に最大の努力を拂ひました。但し『太平記』については、折角解釋批評の筆を執りながら、言ふところ粗略に、批判が消極的であつた事は、此の大作に對して甚だ氣の毒に思ふところであります。『太平記』の文學的及び、文學史的意義について、私は曾て、舊著『新國文學史』に於いて、次ぎのやうに言ひました。

『太平記』は後醍醐天皇の即位に筆を起こして、建武中興及び南北朝争亂の顛末を寫したものである。もと『平家物語』や『源平盛衰記』あたりを模範として、之れにやゝこしき修辭の厚化粧を施し

たものであらう。花々しい戦争や、大義名分に關する調子の高い記事に満ちて、人の血を湧かすところがあり、また後世に偉大なる影響を及ぼしたものであるけれども、其の文學上の價値は、到底『平家物語』などに比較し得べきものではない。『平家』や『盛衰記』には、王朝思想と鎌倉思想との絡み合ひ、即ち公卿生活と武人生活、感情本位生活と義理本位生活との交渉を寫した所に言ふべからざる味はひがあつたが、『太平記』は、概して云へば鎌倉式の一歩張り、言ひかへれば武人生活、義理生活に偏した一本調子のものとなつた。『平家』に於いては、驕る平家の威勢といひ、西海の没落、幼帝の御入水といひ、昇り、降り、共に目の醒める様に際立つて居るけれども、『太平記』に於いては、建武の中興も、新田、楠の武勳も、足利の成功も、兩朝の和睦も、悉く微温的の好い加減な程度に止まつて、深切なる同情を喚び起こすべき所がない。『平家』に於いては記事に一種の趣味があつて、戦争にも人情味藝術味が絡んでゐるが、『太平記』に於いては、記事はすく／＼として油氣がなく、戦争は専ら張良孔明的なる謀計の、筋の變化や、荒つばい腕力の挑み合ひを寫すやうになつて、事件本位、輪廓本位、修飾本位となつて來た。『平家』に於いては、事が單純にして掴まへ易く、事件の進みが急劇に而も漸層をなして、最後の大悲劇を現したが、『太平記』に於いては、事件が複雑で、無中心で、同じ様な小事件が、廣い場面に撒布され、而も

其の小事件がのろ／＼と開展して、最後に龍頭蛇尾の妥協的調和を現じて居る。故に『太平記』は、稀有の大事事件を寫した點と、武勇義理一點張りの時代を描いた點と、後代に於ける國民の實際活動に偉大なる影響を及ぼした點とを除けば、新趣味を發揮した點に於いても、文體を完成した點に於いても、人を寫し事を叙する點に於いても、到底鎌倉の初期に現はれた『平家』その他の軍記と比較し得べきものではないのである。

これは二十餘年前の愚考でありますが、私は今日に於いても、大體に於いて之れを變更すべき必要を見出ださないので、之れを以て『太平記』に對する約要の批評と思ひます。

私はまた、『平家』以前に出た枝葉の小さい軍記についても、もう少し委しく書きたいのであります。例へば『陸奥話記』なる

武則遙拜_三皇城、誓_三天地_二言。臣既發_三子第_二應_三將軍命_一。志在_レ立_レ節、不_レ願_レ殺_レ身。若不_三苟死_一、必不_三空生_一。八幡三所照_三臣中丹_一。若惜_三身命_二不_レ致_三死力_一者、必中_三神箭_二先死矣。合軍攘_レ臂一時激怒。今日有_レ鳩翔_三軍上_一。將軍以下悉拜_レ之。則赴_三松山道以南、磐井郡中山大風澤_一。翌日到_三同郡萩馬場_一。去_三小松柵_二五町有餘也。件柵者、是宗任叔父僧良照柵也。依_三日次不_レ宜并及_三晚景_一、無_三攻撃心_一。而武貞賴貞等、先爲_レ見_三地勢_二近到之間、歩兵放_レ火燒_三柵外宿廬_一。於_レ是城內奮呼、矢石

亂發。官軍合應、爭先登。將軍命武則曰、明日之議俄乖、當時之戰已發。但兵待機發、不_レ必撰_二日時_一。故宋武帝不_レ避_二往亡_一而功。好見_二兵機_一、可_レ隨_二早晚_一矣。武則曰、官軍之怒猶如_二水火_一、其鋒不_レ可_レ當。用_レ兵之機不_レ過_二此時_一。則以_二騎兵_一圍_二要害_一、以_二步兵_一△_二城柵_一。柵東南帶_二深流之碧潭_一、西北負_二壁立之青巖_一。步騎共泥。然而兵士深江是則、大伴員季等、引_二率敢死者二十餘人_一、以_レ劍擊_レ岸、枝_レ錄登_レ巖、斬_二壞柵下_一、亂_二入城內_一、合_レ力攻撃。城中擾亂、賊衆潰敗。を取つて、之れを『今昔物語』卷二十五の

武則遙かに王城を拜して誓を立て、云はく、我れ既に子弟仲間を發して將軍の命に隨ふ、死なむ事を願みず。願はくは八幡三所、我が丹誠を照らし給へ。我れ更に命を惜まずと。若干の軍此の言を聞いて、皆一時に勵心を發す。其の時に鳩軍の上に翔る。守以下悉く此を禮す。即ち松山の道に趣いて、磐井の郡中山の大風澤に宿る。次の日其の郡の萩の馬場に至る。宗任が叔父良照、小松の楯を去ること五町餘り也。日竝宜しからず、竝に日晚れたるに依つて、責むることなし。武則が子共、彼の方の軍の勢を見んが爲めに近く至る間、歩兵等楯の外の宿屋を燒く。其の時に城の内騒ぎ呼んで、石を以て此れを打つ。爰に守武則に云はく、合戦明日と思ふと云へども、自然ら事亂れにたり。日を撰むべからずと。武則亦然也と云ふ。而るに深江の是則、大伴の員秀と

云ふ者、猛き兵二十餘人を具して、劔を以て岸を掘り、鉞を突いて巖に登つて、楯の下を斬り壞つて、城の内に亂れ入つて、劔を合はせて互に打ち合ひぬ。城の内亂れて人皆迷ふ。

に比較すると、二者の間に『將門記』對『今昔物語』と同じ關係のあつたことが明らかに知られます。思ふに漢文の和化、俗化、而して和化俗化したる漢文の讀下し式假名交り化、これが鎌倉の軍記文學が發生開展の爲めに通過した最も大きな關門の一つであつたので、多くの資料が之れを證據立て、居ります。私はかやうな方面の消息をも、更に委しく説明したいと思つたのでありましたが、大模様式な具體的説明を本位とする當座の目的の爲め、最も主要にして最も有力なる材料として、唯だ『將門記』と『今昔物語』とを擧げるに止めたのであります。

私はまた『保元』、『平治』、『平家』、『盛衰記』、『太平記』、此の五大軍記以外及び以後の軍記、準軍記についても、一應の説明を試みたいと思ひました。例へば『曾我物語』、『義經記』、『承久軍物語』、『梅松論』、『吉野拾遺』の類から、降つては『應永記』、『應仁記』、『鎌倉大草紙』、『柴田退治記』等、『正續群書類從』の合戦部を賑はして居る百數十卷の小篇を經、『信長記』、『太閤記』、『甲越軍記』、『眞田三代記』等より、明治以後の『肉彈』、『此一戰』、『從征日記』、『村に還りて』等に至るまで、是等についても、愚見を發表したいつもりでありましたが、今は何事も心に任せません。唯だ念の爲めに

勝手な遠目大掴みの一口評を試みると、『太平記』以後明治以前の軍記は、概ね『太平記』の弊を承けて、或るものは、地方々々に於ける一部のこざりあひ小競合を寫した、意氣の揚がらぬ斷片記録となりました。或るものは、他の記録の片隅に挿入されて、辛うじて餘喘を保つものとなりました。或るものは、賑やかに、面白く、出意表的にと、工夫して構成されたる奇謀勇戦の連続となりました。之れに對して、明治以後の戦争描寫は、新なる文學意識の上に立つて、新らしき様式を試み、新らしき生命を掴み得たかの觀がありますけれども、此の複雑な時代、戦争否定の假裝平和時代の戦争記録に、戦争が選まれたる男兒が一期の花を咲かす機會と信せられた『平家』時代の第一義的なる力と光とは、もう見出だされません。大雑把な批評ながら、私は部分的、介在的、奇構的、第二義的、此の四つの標語を以て、『太平記』以後の軍記、準軍記のおもなる特色を暗示することが出来るかと思ひます。

(軍記物語研究 をはり)

はり

平家が物語の相承え

『平家物語』の新研究

一

『平家物語』は、成長した文學で、生まれたままの文學ではない。變化した文學で、定形のある文學ではない。世に成長した文學、變化した文學は幾らもある、けれども『平家物語』のやうに成長し變化したのは少ないであらう。一説によれば、『平家』はもと三卷に書かれたもので、それが後に補足して六卷にされ、十二卷にされ、十三卷にされ、二十卷にされ、二十四卷にされ、三十六卷にされ、四十八卷にされたものだといふ。しかも常に卷數や、見出や、題材の數量に於いて、變化し成長したばかりでなく、内容の性質までが夥しい變化を受けて、積極が消極にされ、單純が複雑にされ、背景が轉換され、趣味が更新され、地名、人名、神名までが思ひ切つて變へられたのが、數へきれぬ程多くある。『平家』の異本といふもので、今日迄に知られて居るのが、七十幾種からあるといふが、吾々は其の凡てに通じて、全く同じ文句の三行四行と續いたのを見ることが出来ぬであらう。私は初め冒頭

なる、

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顯はす。奢れる者久しからず、唯だ春の夜の夢の如し。猛き人も終には亡びぬ。偏に風の前の塵に同じ。

といふ八句だけは、あらゆる異本に通じて同一であらうと思つて居たが、それすら「奢れる者」を「奢れる者も」、或ひは「奢れる人」とし、「猛き人」を「猛き者」としたもの、「唯だ」「偏に」の副詞を除き去つたものなどがあつて、全く同一とはいひ難いのであつた。

『平家物語』の文章は、或る人々からは、首尾に通じて立派な名文のやうに思はれて居るが、實は不純雑駁な磨きの足らぬ文章である。テニヲハが喰ひ違つて、照應の出來て居ない文句がある。前後の聯絡せぬ借用の挿み文句がある。實景を現前させる力の無い、月並な、抽象的、誇張的の文字がある。古語、新語、雅語、俗語、外國語、内國語、儀式語、通用語等、足並の揃はぬ言葉の隣接的に雜然と並べられてゐるのがある。また全體の仕組としては、年代順に目ぼしい出來事を並べて行つたといふだけ、其の本筋に似寄つた和漢の故事を、冗漫に並べたといふだけで、精選された材料を無駄なしに纏めた渾融無縫の妙味がない。で、一口に『平家』を稱して大叙事詩などといふ人があるもの、かういふ方面からは、とても『イリアッド』や、『オデッセー』や、『失樂園』などと並べらるべきものではないのである。

いのである。

作者もわからず、冊數もきまらず、文章にも三行四行と續いて同じ所が無いといふ胡亂な作物、而も不純な雑駁な作物が、どうして七百年といふ長い間、我が國民の間に、飽かず愛誦されて來たのであらう。世々の學者文人に歎美され摸倣されて來たのであらう。其の文學としての多くの缺點を認める者の心をまでも引きつけて、無限の愛着を感じさせるのであらう。私は『平家』を読み始めて、もう三十年からになる。特に英文平家物語の原材とすべき現代語の縮譯を試みるために、二年餘り（大正六七年の頃）特に此の作に親しんでからは、此の作の缺點を知ることが愈、深くなつて來たが、之れと共に、之れを愛する念も亦愈、深くなつて來るのを覺えた。何故であるか。此の作の如何なる點が、それ程に私の心を惹くのであるか。此の半抒情の小論文は、此の疑問に對する私の答である。

二

私の『平家物語』に愛着を感ずる第一は、徹底した悲哀感の現はれて居る點である。作の内容の隅々限々にまで、無常の空氣の浸透して居る事である。歡喜成功の絶頂に於いて、衰滅の哀情の含まれて

居る事を、力強く底深く暗示した趣である。榮枯盛衰の早替はりする幾多の事實を前置にし下積にして、最後に日本全土を舞臺とした平家一族の滅亡を、大きく歌ひをさめた調子である。而して其の凡てに通じて、甘い、淋しい、美しい、人を酔はす味はひの現はれて居る事である。

『平家物語』が先づ吾等の心を淋しい興奮に誘ひ入れるのは、佛家の謂はゆる序説分なる「祇園精舎」の八句である。

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顯はす。奢れる者久しからず、唯だ春の夜の夢の如し。猛き人も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ。

『梁塵秘抄』や朗詠や宴曲あたりの駢麗式を襲蹈したものであらうが、『梁塵秘抄』の法文歌に、「迦葉尊者の石のむろ、祇園精舎の鐘の聲、醍醐の山には佛法僧、鷄足山には法の聲。」といふのがある。『平家』の第一句は、恐らく是等の句に系統を引いて居るのであらう。『秘抄』の歌や朗詠宴曲などが、形式的抽象的で、内容が空虚なとは違つて、是れには平家三十年の盛衰を含蓄して、靜かに十二卷の重疊した波瀾を喚び起こす豊かな味はひがある。此の深き悲哀に裏打された、花やかな序曲に導かれ、異國の趙高、王莽、朱异、祿山、本朝の將門、純友、義親、信賴を前驅として、新らしい舞臺に堂々と現はれ出でたのが、空前の奢れる者、猛き人、心も詞も及ばれぬ榮華を極めた、六波羅の入道

前太政大臣平朝臣清盛公である。彼れは忠盛の子として、はかなき中納言家に入出入するのを名譽とする程の身分であつたが、保元の亂に、まづ其の大きな姿を認められ、つゞいて平治の亂に、競争者の源氏を倒してからは、トン／＼拍子に出世して、やがて太政大臣從一位に至り、牛車轝車ぎつしやれんしやの旨旨を蒙つて、乗りながら宮中に入出入するやうになつた。我が身の榮華ばかりでなく、一門も共に繁昌して、平族の公卿十六人、殿上人三十餘人、諸國の受領衛府等六十餘人、知行の領地は三十餘箇國に跨つて、其の八人の女は、それ／＼に、或ひは后となり、或ひは攝政、大臣、其の他の大官の内室となつた。彼れは勢に乗じて攝政基房を凌轢し、法皇を幽閉し、比叡の山法師を取りひしぎ、南都の大盧遮那佛を焼いた。かくして平家の榮華はその絶頂に達して、帝闕をも仙洞をも凌ぎ、「謀叛」といふ語が、いつの間にか「平家に叛く」といふ意味になり、剩へ皇室が平家を謀らせらるゝ企にまで適用されるやうになつた。

恐ろしい榮華である。平安朝四百年にわたる藤原氏の榮華を煎じつめても、斯うまではと疑はれる程の榮華であるが、しかも此の榮華の眞中に、衰滅哀愁の影が遠慮なく其の姿を見せ始めた。榮枯の激變は、第一に其の暗示の影を、白拍子妓王の上に見せた。妓王は二十一歳の美人である。彼女は入道相國の寵を一身に集めて、天下羨望の的となつた。而して此の恩寵が長へに續く事と思つて居ると、

其處に加賀生まれの佛といふ十六歳の白拍子が現はれて、入道に見參を乞うた。入道は怒つて追つ立てたが、やがて妓王の執成によつて、呼び返して一たび見ると、妓王の寵は忽ちにして佛に移つた。佛は其のまゝ西八條に引き留められて、妓王は直ちに御殿を追はれた。程經て再び召出だされたが、それは歌舞して佛を慰める爲めであつた。而してやがて都の住居を構はれ、命までが危うされ、遂に母と妹と共に、様をかへ世を捨て、嵯峨の奥の山里に入つた。はかなき女性、しかも一遊女の身に起こつた小さい悲劇ではある。けれども、是れがやがて、院の御所に於いて、平家が木曾に見かへられ、木曾が義經に見かへられた運命と、何處が違はう。清盛が榮華幸運に酔うて無意識に仕散らかした遊戯三昧の中に、西八條の邸内の宴席の隅に起こつた一挿話の中に、平家の運命の縮圖が早くもあり／＼と畫かれて居るのは、面白いではないか。而して前曲として斯様な小さな挿話を積み重ね積み重ねて、大厦倒壊の大悲曲を奏する此の物語の趣は、實に味はひても味ひ盡くせないではないか。

白拍子妓王に於いて、我が家の運命を暗示された清盛は、攝政基房の遭遇した、謂はゆる「殿下乗合」の悲喜劇に於いて、再び我が家の運命を暗示された。入道の孫、十三歳の資盛が、或る日鷹狩の歸途に、攝政基房の供揃を駆け破らうとして、圖らず恥辱を與へられた。入道は大きに怒つて亂暴な田舎侍を驅り集め、基房を參内の道に要して、今日を晴れと裝束した前驅隨身共を追つかけ追ひつめ、

散々に凌轢して、一々其の髻を切つた。殊に藤藏人大夫隆教の髻を切る時には、「之れを汝の髻と思ふな、主の髻と思へ。」と言ひ含めて切り離し、基房の車の内へ弓の弭を突き入れて、簾をかなぐり落すなど、散々に恥かしめて六波羅に引き上げた。入道は大きに悦んで、「神妙！」と云つて褒めたといふ。作者は基房の哀れな様子を寫して、

東帶の御袖にて、御涙を抑へさせ給ひつゝ、還御の儀式の淺ましき、申すもなかく／＼おろかななり。

大織冠淡海公の御事は、あげて申すに及ばず、忠仁公昭宣公より以來、攝政關白の、かゝる御目に逢はせ給ふ事、未だ承り及ばず。

と云つて居る。供の者が十三歳の平家の子供の無禮を懲らしたのが種となつて、攝政關白が斯様な凌辱に逢ふことでは、誠に鎌足、不比等、基經以來幾百年の藤原氏の積威も、すつかり地に落ちたといふべきであるが、是れは單に攝家藤原氏の事ではない。壇の浦以後の宗盛其の他が、是れよりも更に甚だしい凌辱を加へられて居るではないか。

もとは法皇の殊寵を負ひ、驕奢をほしまゝにして、世を世とも思はず、近きあたりの者からは、物も高く言はぬ程に怖れられ、剩へ平家を滅ぼさうとまで謀つたが、謀が現はれると、備前の兒島に流され、やがて吉備の中山有木の別所に移されて、先づ毒をすゝめられ、その後二丈ばかりの崖の下

に菱を植ゑ、そこに突き落されて無残な最期を遂げた新大納言成親卿の運命は、どうであつたか。もとは法勝寺の執行として、八十餘個所の庄務を司り、棟門平門の内に四五百人の所従眷屬に取圍まれて居たのが、一朝鬼界が島に流されて、腐れ魚に露命を繋ぎ、松の根方の枯葉の上に、骨皮の死屍を横たへた俊寛僧都の運命は、どうであつたか。奈良以降、傳教以來の長き尊き歴史を有し、夥しい僧兵を擁して、王者にまで憚られたのが、堂塔を焼かれ、座主を殺されて、見る影もなく衰へた南都北嶺の運命は、どうであつたか。

平家の三十年が藤原氏四百年の盛衰を高調に縮寫して見せたやうに、平家三十年の運命を、僅か一年の間に、更に高調に縮寫して見せたのは、木曾義仲である。信濃を出で越後を靡けてから、燧、俱利伽羅、篠原と、疾風枯葉の勢に平家を追ひ捲つて、間もなく京都を占領した旭將軍が、忽ち宇治勢多に敗れて、栗津の深田に冷たい戦死を遂げたのは、まさしく平家の運命を縮寫したのではないか。一の谷、八島、壇の浦と、息もつがせず平家を追ひ撃ち攻め滅ぼした九郎義経が、一たび金洗澤に鎌倉入を拒まれてから、暫らく虎の尾を踏む落人の身となつて、遂に奥州高館の露と消えたのは、平家滅亡の附録として「壇の浦」と「大原御幸」「六代斬られ」との間の繋ぎとなるべきものではないか。

平家の一門が俄に榮え俄に枯れた目ざましい盛衰、而して榮枯に通じて暫しも華やかな趣味を捨て

なかつた美しい生活は、それだけでも立派な一篇の哀詩を成すべきものであらう。けれども此の大哀詩を成す主なる要素が、それと同じ性質の美しい小さい哀詩で、而して其等が基礎となつて、其の上に更に美しい、更に大きな哀詩を建立させた所に、更に深い味はひがあるやうに思はれる。國文學者の中には、或ひは「平家」は、清盛の榮華を中心とした前半と、平家の没落を中心とした後半とに分けて見るべきもので、其處に「平家」の作者の非凡なる技倆が見られるといふ人もある。或ひは「平家」は、清盛を中心とした隆盛期と、義仲を中心とした流離期と、義経を中心とした滅亡期との三部に分けて見るべきもので、その中心人物の轉換する間を、寸分の隙もなく連絡せしめた所が、驚嘆に値するといふ人もある。けれども「平家」はもと、清盛の生立から壇の浦迄、委しく云へば忠盛の昇殿から「六代の被斬」迄を、ポツ／＼と年代順に並べたといふだけのもので、其の間には随分穴のあいた所、襤褸の下つた所、木に竹を接いだ所がある。「平家」が、或ひは雜駁な史料の結集と見られ、或ひは歴史たるには文學過ぎ、文學たるには歴史過ぎると云はれるのは此の爲めで、八坂本其の他の異本に見え「間」或は「あひ」と稱する所屬不明の部分などが、よく此の關係に雜駁な材料を介在させた爲めに、詩となるべき折角の題材が、裂目なしの發展を妨げられて、渾然たる統一味を缺く様になつた關係を説明して居るものである。それ故に、結構、布置、連絡、中心思想の開展などいふ點から見れば、

『平家』は頗る未熟粗笨なもので、寧ろその素人くさい無邪氣な書き方に、純樸な、無匠氣な、思無邪な味はひの現はれた貴さを賞玩すべきものであらう。斯様に『平家』には、折角の面白い物語が殺風景な機械的、事務的の叙述の挿入の爲めに、風致を壊された場合がいくらかもある。けれども考へ様によつては、面白い物づくめの寄せ集めは、いかに巧みに配合されても、人工の見え透く厭味があり、それよりは見聞の儘を年代順に排列して、叙任の次第、年中行事、事務應答の書簡などを、サラ／＼と並べて行く中に、折々、妓王妓女、有王島下り、俱利伽羅落し、扇的、弓流しといふが如き、詩趣に富んだ物語に出會すといふ方が、平凡な野を越え里を過ぎては、たま／＼山水の奇勝を見出だし、味噌汁澤庵の常食の間に、時々太牢醍醐の美味を賞するといふが如き自然味があつて、却つて讀者の心に落ちついた親和の感じを起こさせるであらう。もし又其の間に、一通りの記事はあつさりと書き流して、目ぼしい事件に逢着する毎に、力瘤を入れて入念に描寫するといふが如き印象的の工夫が加はれば、其の興味は更に一段と高まつて來るであらう。『平家』の筆致は此の筆致で、『平家』の興味は此の興味であると、私は思つて居るが、此の素樸で、自然で、無邪氣で、而も其の間に只事を疎寫し、詩趣のある事件を精叙するといふ工夫があり、其の上に稀有の時代に動かされた作者の同情が、美しく榮え美しく亡びた平家一門の榮枯物語を活かして、悲哀無常の感じを力強く暗示したといふ、

これが『平家物語』の吾等に與へる第一の面白味であると、私は思ふ。

三

茲に添へて言ひたいのは、清盛の女徳子むすめ即ち建禮門院の御出家御往生を寫した、五章から成る最後の「灌頂の卷」に就いてである。『平家物語』の中には、此の灌頂の卷を一團として、最後に加へて、別の一卷を立てたものと、此の卷の各章をば、前卷の中の適當なる所々に收めて、別に一卷を立てぬものとの二種がある。此の卷の成立に就いて、從來二つの説があつた。一つは、灌頂の卷は本來結尾の一卷として書かれたので、當初から離れて一團を成してゐたといふのである。他の一つは、此の卷の各章は本來年月の順序により、それ／＼前卷の中に收められてゐたのであつたが、此の女院の御出家に關する一團の記事が、琵琶の祕曲として重んぜられた所から、特に切り離して珍重されるやうになり、それが段々と補足される中に、おのづから獨立の一卷を成すやうになつて、遂に十二卷の外に獨立して、最後の一卷と見られるやうになつたといふのである。思ふに『平家』の原作者は、筆を忠盛の昇殿に起こして「六代の被斬」に收めたので、「灌頂の卷」に含まるゝ部分は、初めは無論それ／＼「六

代被斬」の前の然るべき場所に置かれたのであらう。是れは今の所動かぬ事であらうと思はれる。

また「灌頂の巻」といふ名稱の意義についても、從來二つの説があつた。一つは「結縁灌頂説」とも云ふべきもので、此の巻が「女院の御出家」、「六道の沙汰」、「御往生」等の殊勝微妙なる物語により、讀者に無常を悟らせ、佛土を欣求させて、佛縁を結ばしめる力があるところから、灌頂と名づけたといふのである。一つは「授職灌頂説」ともいふべきもので、灌頂の名は無常を悟らせ佛縁を結ばしめるといふ宗教上の意味から來たのではない、唯だ此の女院に關した數章が、琵琶の祕曲になつて居るので、これが彈ければ琵琶の修業を完了して師家になれるといふ所から、職を授ける祕曲の巻といふ意味で名づけられたといふのである。委しい比較論は煩はしいからやめるが、思ふに最初は必ず授職灌頂の意味で、此の祕曲視された數章が、斯道卒業の試金石とされたのであらう。

以上は「灌頂の巻」の成立と語義とに關する大體の説明であるが、但し是れは在來の説を批判して、最初本來の意義を明らかにしたといふだけで、今後「灌頂」の意義を如何様に取りべきか、「灌頂の巻」を如何なる形式に於いて保存すべきかといふ事は、自ら別の問題である。これら今後の問題については、私は「灌頂の巻」の意味をば、あくまでも結縁灌頂の意味に取ることにしたい。而して「灌頂の巻」をば、結尾獨立の別巻として、十二巻の後に据ゑたいと思つて居る。其の理由はかうである。

まづ「灌頂の巻」の位置から云へば、最初は無論、前巻の其處此處に散在してゐたので、獨立の別巻を成してゐたのではなかつたのであらう。けれども已に別巻を成して見ると、其處に一種の落着が出來、威嚴といふものが加はつて來る。殊にそれが、既成の卷々の其處此處から抜き取つて來たといふだけのものでなく、補足修正して、美しい連絡統一もあり、最終の巻としての重みもあるやうに改められ、また長い歳月を経て、多くの異本に襲用され、無數の人々に讀まれて來て見ると、書物の形の上にも、讀者の心の上にも、動かし難き一種の有機的な位置が定まつて來るのは自然の事である。思ふに斯様な有機的の固定した位置が出來、一種の威嚴品位が出來たものを、漫りに復舊して、引き抜いたものとの穴に嵌めるといふのは、誠に氣の利かぬ事であらう。殊に已に別巻として出來上がった跡について考へると、此の作の劈頭に「祇園精舎」のあれだけ重々しい、味はひの深い八句が据わつて居るのに對して、最後の「六代被斬」は、餘りに纖細かほこくして結尾の振はない嫌ひがあるではないか。而して「六代被斬」の代はりに、此の「灌頂の巻」を最後に置けば、首尾相應じて、いかにも重々しく、味はひが深く落ちついて來るではないか。同じく後人のさかしらでも、延慶本の『平家物語』が、「右大将頼朝果報目出事」の一章を最後に据ゑた類ひは、餘りと云へば言語道斷の沙汰であるが、是れは位置轉換の加筆とは云ひながら、或る意味に於いては、原作にも優つた趣味を發揮したものである。

原作とは違つた追加だからとて、軽々しく動かすべきものではない。

「灌頂の巻」は一種の祕曲で、平家琵琶卒業の試金石とされたものであるが、『平家』には尙ほ此の外に「小祕事」「大祕事」といふものがあつた。小祕事といふは「祇園精舎」、「延喜聖代」の二つで、大祕事といふは「宗論」、「劍の巻」、「鏡の巻」の三つである。此の中、「祇園精舎」だけは、甚深の意味を藏して劈頭に控へて居り、殊に意義、趣味、品位、文脈、あらゆる點から見て、拔差を許さぬからであらう。祕事とされながら、流布の讀み本のいづれにも掲げられて居るが、他の四つは音曲上の祕傳物として、すつかり本文から除き去られて居る。けれどもそれは音曲上だけの事で、『平家』の本筋から見れば、枝葉の添へ物で、決して重要な意義のあるものではない。「延喜聖代」は頼朝の舉兵に因んで、醍醐帝の治世の難有さを書き入れたものである。「宗論」は維盛の高野詣に次いで、弘法大師が宗論に勝つた事を書き入れたものである。「劍の巻」、「鏡の巻」は、壇浦の合戦の後、内侍所の都入に因んで、三種の神器の中の神劍神鏡の功德を書き入れたものである。此の中で劍の巻は、引き離し敷衍して『太平記』にも載せられる事となつた。要するに、是等は別々に引き離して考へれば、重大な意義のあるものであらうが、『平家』の本筋から見ると、有つて益なく、無くして損のないものである。同じく祕事とは云はれながら、灌頂の巻が、其の價値に於いて、是等の四つの祕事と比較にならぬ事は、これで明らかにわかるであらう。

次に「灌頂の巻」の意味について考へると、最初は無論授職灌頂の意味で、卒業考試用の數章を集めたのであらうが、それが巧みに纏められて、歲月を経る間に、いつしか結縁の意味をも生じ、殊に「祇園精舎」の冒頭と照應し、十二巻に互る榮枯の消息をも總括して、無常を教へ往生を勧める微妙な文字に満ちて居る所から、後には結縁の意味の方が重く視られるやうになつたのであらう。殊に此の巻の最後の一節に、

かくて女院は、空しう年月を送らせ給ふ程に、例ならぬ心地出來させたまひて、打臥させたまひしが、日頃より思召し設けたる御事なれば、佛の御手に懸けられたりける、五色の絲をひかへつ、南無西方極樂世界の教主、彌陀如來、本願過ち給はずは、必ず引攝し給へと、御念佛ありしかば、西に紫雲たなびき、異香室に満ちて、音楽空に聞こゆ。限りある御事なれば、建久二年二月中旬に、一期遂に終はらせ給ひけり。

といふ様な文句のあるのを見れば、此の一卷が結縁灌頂の意味に取られるのに、何の不思議もない。已に名實共に結縁の稱に相應はしき部分の出來た後であり、久しく此の意味に解釋されて來た後でもあり、また語り物の音楽として聞かれるよりは、寧ろ文學として廣く見らるゝ今日でもある。私は此

の巻に對して結縁の意味に重きをおくのに、少しの無理もないと考へる。

無常悲哀の提唱に始まつた『平家』である。榮枯の目ざましく急轉した幾多の事實の連珠の上に、大厦倒壊の大哀音を歌つた『平家』である。其の結尾に於いて、生きながら六道の輪廻を見られた太政入道の女、安徳の母后が出家得道の大往生を寫した一卷によつて、淨縁を結ばしめる、此のやうな相應はしい、味はひの深い結構がないではあるまいか。

『平家』の中には、一寸した言ひ廻はしの中に、何とも云はれぬ哀音を傳へて居る所がある。例へば齋藤別當實盛が篠原の合戦で討死した所に、

昔の朱買臣は、錦の袂を會稽山に翻し、今の齋藤別當實盛は、其の名を北國の巷に揚ぐとかや。
朽ちもせぬ空しき名のみ留めおきて、骸は越路の末の塵となるこそ哀れなれ。

と書いてある。普通ならば「功名を竹帛に垂れ」などと、勇ましい事をいふ所であらうが、「名が朽ちれば結句あきらめもつくであらうに、なまなか朽ちもせぬ名のみを残して、大事の體を邊土場末の塵芥にして了ふとは、哀れな事だ！」とは、何といふ正直な、そして無慚な言ひ方であらう。

『平家』には「哀れなれ」、「涙をはらく」と流いて「等」の悲しい言葉が、無數に繰返されて居る。「哀れ也」と云はずして哀れさを知らせるのが吾等の祕事だ。」と云つた、老近松の流儀には反して居るが、

是れも『平家』の作者の正直に無常に泣いた心持が、其のまゝ屢々文字の上に現はれたのであらう。私には『平家』の「涙をはらく」と流いて「や、「哀れなれ」、「無慚なれ」が、必ずしも老近松の言外暗示の味はひに劣らないと思ふ者で、而して斯様な點からも、悲哀無常の空氣が、此の作にこんもりと現はれて居るのを悦ぶ者である。

四

私が『平家物語』に對して第二に愛着を感ずるのは、時代の姿を美しく現はして居る點である。私は源平期の日本に三つの大きな時代相があつて、それが『保元』『平治』『平家』等の謂はゆる軍記物語に、面白く寫し出だされて居ると考へて居る。三つの時代相の第一は、武力本位の時代となつて、新興の武人が自家の武力を自覺して來た事である。第二は、武力によつて天下を得た武人が、前代王朝の文明に魅入られて公卿文明の摸倣に滅びた回顧の悲劇である。第三は、戦争があらゆる人事中の主位を占めるやうになつて來た事である。

保元平治の前後から世の中が武力本位に變はつて來た消息は、『平家』よりも『保元』『平治』の物語が、

よく説明して居る。平安朝のなかば以来、源平の武人等は段々に實力を備へて來た、けれども容易にそれを自覺しなかつた。彼等は柔弱無力なる藤原氏をば、選ばれたる階級の雲上人として、昔ながらに尊敬してゐた。立派な實力のある自分等をば、昇殿の叶はぬのが當然の地下人として、公卿に侍るのが本領の「侍」として、甘んじて犬馬の役目を勤めてゐた。諺に隣の花が赤いといふ。彼等は自分の腰に活殺自在の大刀を横たへながら、公卿の手先に弄ぶ笏楡扇を羨んでゐたのである。諺に家の飯には心があるといふ。彼等は束帶衣冠の役にも立たぬ虚飾に見とれて、護身の要具の大切な甲冑を卑んで居たのである。満仲がさうであつた。頼光、頼信、頼義、義家、爲義が、皆さうであつた。義朝にも頼政にも大分其の氣味があつた。かくして彼等は鎧袖一觸、容易に公卿殿上人を倒すべき武力を備へながら、久しく公卿殿上人の願使に甘んじて居たので、保元前後に於ける武人對公卿の關係は、譬へば眠つた獅子が背上に雛人形を乗せて居たのにも比すべきものであつた。

やがて保元の亂が恐ろしい獅子の眠りを覺まし、同時に背上なる雛人形の眠りを覺ました。戦亂は新なる時代の新なる試験器である。此の新なる試験器に逢つて、人間の位附がどれ程に變はつて來たかは、傲岸なる左府頼長が、崇徳上皇の御前に、無位無官の八郎爲朝を延いて謀を問うたのを見てもわかる。二十歳にも足らぬ八郎爲朝が、院の御前、左大臣の前をも憚らずして、傍若無人に廣言を吐

き散らしたのを見てもわかる。「保元物語」は記して居る。

爲朝は七尺ばかりなる男の、目角二つきれたるが、紺地に色々の絲を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て緘したる大荒目の鎧、同じく獅子の金物打つたるを着るまゝに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞘入れ、五人張の弓、長さ七尺五寸にて鈚打ちたるに、三十六差したる黒羽の矢負ひ、兜をば郎黨に持たせて歩み出でたる體、樊噲もかくやと覺えて由々しかりき。謀は張良にも劣らず、されば堅陣を破る事、吳子孫子が難しとする所を得、弓は養由をも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふことなし。上皇を始めまゝらせて、あらゆる人々、音に聞こゆる爲朝見んとて舉りたまふ。

劍が笏を壓し、甲冑が束帶を壓し、武人が公卿を壓した様子が、手に取るやうではないか。爲朝も初めは、御所は畏き所、大臣納言は尊い人々、而して昇殿は難有い御沙汰と思つてゐたであらう。而して多少は恐懼して神妙に首を垂れて居たであらうが、首を揚げると、頼長を始め、あらゆる人々が頼もしげに自分を仰いで居るではないか。而して畏くも上皇までが、御簾を隔て、其の中に居らせられるではないか。爲朝は意外の光景に愕然すると共に、もう天下は我が物だと感じたであらう。そして當時の新人たる武人等は、爲朝を通ほして一齊に其の眠れる眼を見開き、垂れたる首を揚げたであ

らう。實力に覺めた武人は、もう昨日の武人ではない、而して機會は機會を呼んで、打ちつゞく戦亂は、源平の武人を、九地の下より九天の上に引き上げた。

一方に於いて、落伍者の公卿殿上人が新時代の試験器にかけて篩ふるひ落さるゝ慘憺みじめさは、どうであつたか。

官軍雲霞の如く攻め來り候上、猛火既に御所に掩おほひ候。今は叶はせ給ふべからず。急いそぎ何方へも御開ひらき候べしと申せば、左府は前後に迷ひて、只だ汝今度の命助けよとばかりぞ宣ひける。左大臣殿の御馬の尻には、四位少將乗りて抱き奉りけり。東の門より御出まあつて、北白河を指して落ちさせ給ふ處に、何處よりか射たりけん、流矢一筋來つて、左大臣殿の御首の骨に立つ。成隆之れを抜いて捨てたりけれども、血の走る事、水みづ彈たまを以て水を弾はじくに異ならず。(保元物語)

東帯に牙笏の揚々としてゐた人達が、前後に迷うて、命乞ひをして、馬に助け乗せられて、流矢にあつて死ぬる。是れが頼長の跡を追うて繰返された多くの公卿殿上人の運命であつた。

平治の信頼も同じ運命に弄あそばれた。

鯢波とさぎのこまに驚おどきて、只今まで由々しく見えられつる信頼卿、顔色變はりて草葉の如くにて、南階を下られけるが、膝ひざ戦まひて下りかねたり。人なみくゝに馬に乗らんと引寄せさせたれども、肥ふりせめ

たる大の男の、大鎧は着たり、馬は大きなり、乗り煩わづふ上、主しゅの心にも似も似ず、はやり切つたる逸物いぢものなれば、つと出でんつと出でんとしけるを、舍人とねり七八人寄つて馬を抱かへたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒も、かくやと覺ゆるばかりにて、乗りがかね給ふ所を、侍二人つと寄つて、疾く召し候へとして押し上げたり。餘りにや押したりけん、弓手の方へ乗りこして、伏ふ様さまにどうと落つ。急いそぎ引き起こして見れば、顔に砂すなひしとき、鼻血流れて見苦みかりけり。義朝此の體ていを見て、日來ひは大將とて恐れ給ひけるが、はたと睨にみて、あの信頼といふ不覺人は隠かくしたりなとて、日華門を打出でて郁芳門へ向はれければ、信頼も鼻血押し拭ぬひ、とかくして馬にかき乗せられ、待賢門へ向はれけるが、物の用に逢ふべしとも見えざりけり。(平治物語)

信頼は鶴の眞似をした鳥で、吾等は彼れに於いて、新時代に目ざめて俄かに附焼刃の時世粧ときよざうをした者の失敗を見ることが出来る。義朝は新舊の兩思想に二股をかけた武人で、吾等は彼れに於いて、舊思想に未練を残した武人の迷夢が、すつかり覺めたのを見ることが出来る。蓋し新人と舊人との調和合體は容易に出来る事ではなかつた。それは保元に於ける頼長と爲朝との關係、平治に於ける信頼と義朝との關係が、よく證據立てゝ居るところである。「承久記」に、合戦がいよゝゝ京方の敗北と極つた時、京方の武將四人が、後鳥羽院に拜謁した時の様子を、かう書いて居る。

十五日卯の刻四辻殿に参りて、秀康、胤義、盛綱、重忠こそ、最後の御供仕り候はんとて参りて候へと申しければ、一院(後鳥羽院)いかなるべき身とも思召さぬ所へ、四人参りたれば、いよいよ騒がせ給ひて、我れは武士向はば、手を合はせて、命ばかりをば乞はんと思召せども、汝等参りこもりて、防ぎ戦ふならば、なか／＼悪かりなん。いづ方へも落ち行き候へ。さしもの奉公空しくなしつるこそ不便なれども、今は力及ばず。御所の近隣にも在るべからずと仰せ出だされければ、各の心の中いふもおろかなり。山田の次郎ばりこそ、されば何せんに参りけん、叶はぬもの故、一族も引きつるこそ口惜しけれとて、大音聲をあげて門をたゞき、日本第一の不覺人を知らずして浮沈みつる事の口惜しさよと、罵つて通るぞ甲斐もなき。

これは後年の事であるが、畏き王者との合體結托すら不可能なる事が、此の通りである。まして全く新しい思想に立つ武人が、公卿殿上人と合體して何が出来よう。清盛が全く藤原氏を壓服して新政を布き、頼朝が公卿の一團を京都の別天地に祭り込んで、將軍政治を創めたのも、誠に餘儀なき事である。

五

武人の夢は覺めた。而して彼等の行くべき道は爲朝、義平、義朝等の先驅者によつて暗示された。渠が成り、水が到つて、もう船を待つばかりである。船が現はれた、大船が現はれた。平清盛がそれである。

『平家』の前半は、清盛といふ巨人の、向うに前なき意志の勝利を歌つたものとも見られるが、同時に舊思想に對する新思想の壓迫、公卿に對する武人の挑戦とも見ることが出来る。武力主義の發揮は、早くも忠盛對公卿の「殿上鬪討」の章に現はれた。而して容儀格式に誇る多數の公卿殿上人が、眇なる新米武人の木刀の銀箔に威かされた笑止の失敗と、「伊勢瓶子」の歌によつて女々しい仕返しをした陰險な態度とは、彼等がもはや實力に於いて武人の敵でない事を説明すると共に、彼等の男らしからぬ反抗が執念深く續けらるべき事を暗示してゐると云つてよい。

清盛の代になつて始めて現はれた武力主義の發揮は、「殿下乗合」に於ける攝政基房凌礫の事件である。道徳的にいへば、曲は無論清盛にあつたであらう。けれども、薄暗がりを幸に、十三歳の弱者に加へた凌辱を、白日の下に堂々と仕返して、藤原氏の棟梁攝政松殿を取りひしいた所は、また一種の痛快事と云つてよい。

清盛が正面から押して行く武力主義の壓迫は、あらゆる方面に反抗を喚び起こした。やがて成親、

俊寛が起つた。後白河法皇が起たせられた。山、奈良が起つた。是等はいづれも舊思想の味方で、正面から力押しに進んで成功し得ぬ事を、裏手の權道によつて成就しようとしたものであるが、清盛は片端から之れを壓伏した。院に對し奉つては、内府重盛が理づめの諫言もあつて、さすがに手を弛めたが、宗法を笠に着る山や奈良に對しては、武道の威力を勇猛に發揮して、遂に伽藍堂塔をも、大佛をも、焼き拂ふ事を敢てした。

清盛が武力を發揮するについて最も始末に困つたのは、外にあらすして内にあつたであらう。攝關や、成親や、法皇や、山や、奈良よりも、寧ろ我が子の内府重盛であつたであらう。重盛は言行一致の賢者で、愛子で、而して上下敵味方の人望家である。其の赤心から出る理の詰んだ陰性、消極性の諫言は、どれ程陽性積極性の清盛の心を苦しめたであらう。彼れが火の様な實行意志は、此の苦手の諫言に逢ふ毎に、理と情と根とに負けて、常に其の鋒を挫かれた。其の中に、幸か不幸か、此の苦手の壓迫が取り除かれた。清盛の情は最愛を喪つた悲みに泣きながらも、其の武人的の實行意志は猛然として再び活動を始めたが、最後に現はれた敵は、舊思想の流れを汲む無力優柔の公卿ではなくして、同じ武人の競争者、武人の本領を自覺する點に於いて、彼れよりも更に強く、更に高く、更に純なる源頼朝であつた。

平家も源氏もひとしく新時代の子である。けれども平家の有つてゐた武人の魂は、大分軟弱な公卿道の感化を蒙つた。加之平家には清盛を除いて武人の自覺に生きようとする者が幾らもない。源氏の有する武士魂は純にして強かつた。而して源氏の殆んど悉くが、鐵の如き自覺に立つて復讐の心に燃えて居る。平家はもはや源氏の敵ではない。

此の頼朝と雌雄を決しようといふ間際になつて、俄に入道清盛が死んだ。奈良を焼いた佛罰だと云はれる、前代未聞の火の病に罹つて、而して

當家は保元平治より以來、度々の朝敵を平げ、勸賞身に餘り、忝くも一天の君の御外戚として、丞相の位に至り、榮花已に子孫に残す。今生の望みは、一事も思ひおく事なし。唯だ思ひおく事としては、兵衛佐頼朝が、首を見ざりつる事こそ、何よりも又本意なけれ。吾れ如何にも成りなん後、佛事孝養をもすべからず、堂塔をも立つべからず。急ぎ討手を下し、頼朝が首を刎ねて、我が墓の前に懸くべし。それぞ今生後生の孝養にて、あらんずるぞ。

といふ、いろ／＼の意味に於いて、謂はゆる罪の深い遺言を残して。

清盛の憤死は平家盛衰の分水嶺となつて、是れより、平家は秋の夕日の釣瓶落しに沈み衰へた。清盛に於いて我が國未曾有の「歡びの曲」を奏でた平家が、轉じて我が國未曾有の「哀の曲」を奏でねばな

らぬ運命とはなつたのである。

六

人事は多くは天である。源平の盛衰も其の一つで、一面から見れば、源氏も平家も、不測の運命に操られて、豫期せざる勝を勝ち、敗を敗けたのであらう。けれども成敗の跡について考へると、平家の衰へたにはいろいろの原因がある。重盛といふ大黒柱を失つたのも其の一つであらう。皇室の信任を失つたのも其の一つであらう。利福權勢を一門で獨占したのも其の一つであらう。悪政によつて民心を失つたのも其の一つであらう。けれどもこゝにそれらのいづれにもまして重大な原因、殊に文學的に見て非常に面白く、これが爲めに『平家物語』の主なる美が成立つたとも思はれる重大な原因がある。外ではない、平家の一門が平安王朝の文明に見惚れ、武人の本領を忘れて、公卿の生活を摸倣した事である。

平家は清盛に於いて天下を掌握した。而して一門の間で、朝廷の主なる顯職を占め、日本六十餘州の半ば以上を領し、女を后妃に容れ、畏くも外戚にまでなつて、宮闕にも仙洞にも優る榮華を極める

やうになつた。思ふ事は爲せる、爲せば必ず遂げられる。斯様な境遇にあつて誰れか武を練り兵を談する事を好まう。誰れか甲冑を着け劍戟をひらめかす生活を愛さう。治に居て亂を忘れずなどいふのは、苦い經驗に懲りた者か、前途に野心のある者か、若しくは超人間的な賢者かとする仕方なしの準備である。喉元過ぐれば熱さを忘れて、美味に向ひ、美的生活に赴く、これが人情ではないか。

平家の境遇はまさしく斯うであつた。而して平家の人達は、概して正直で單純で表裏の無い人達である。彼等は、秦平の世、敵の無い世界、極端に我儘の利く時代、平族でなければ人でないとまで云はれた時代に處して、氣の利かぬ武人生活に愛想をつかしたであらう。而して何がな之れに代はるべきものを求めて、すぐに前代の風流閑雅な公卿生活に目を留めたであらう。かくして彼等は腰に佩いた人斬庖刀を抛ち、身を蔽ふ窮屈な甲冑を脱ぎ捨て、相率ゐて、束帶、衣冠、詩歌、管絃の風流生活に赴いた。而してやがて新生活を手に入れて、烏帽子のため方、衣紋の畫き方に六波羅様をあみ出して、流行の魁をなすやうになり、詩歌管絃の藝術的風流道に於いても、藤原氏の名匠等と相伍して譲らぬやうになつた。彼等の公卿化、風流化、平安朝化は、『平家物語』の中に面白く寫されてゐる。治承四年の九月、頼朝の討手に向つた大將軍及び副將軍の維盛忠度を寫してはいふ。

大將軍小松權亮少將維盛は、生年二十三、容儀帶佩繪に畫くとも、筆も及び難し。重代の着背長

唐皮といふ鎧をば、唐櫃に入れて昇かせらる。路中には、赤地の錦の直垂に、萌黄匂の鎧着て、連錢蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍を置いて乗り給へり。副將軍薩摩守忠度は、紺地の錦の直垂に、黒糸絨の鎧着て、黒き馬の太う逞しきに、沃懸地の鞍を置いて乗り給へり。馬鞍鎧兜弓箭太刀刀に至る迄、光輝く程に出立たれたれば、珍らしかりし見物なり。中にも副將軍忠度は、或る宮腹の女房の許へ通はれけるが、或る夜坐したりけるに、此の女房の局に、やんごとなき女房客人来て、小夜も漸う深け行くまで歸り給はず。忠度軒端にゐんで、扇を荒く使はれければ、彼の女房野もせに集く蟲の音よと、優に口ずさみ給へば、扇をやがて使ひやみてぞ歸られける。其の後坐したる夜、いづぞや何とて扇をば、使ひ止みしぞやと問はれければ、いさ姦しなど、聞こえ侍りし程に、さてこそ扇をば、使ひ止みては候ひしかとぞ申されける。其の後此の女房、薩摩守の許へ、小袖を一重遣はすとて、千里の名錢の惜しさに、一首の歌を書き添へて、おくられける。

東路の草葉をわけん袖よりも、たゝぬ袂の露ぞこぼるゝ。
薩摩守の返事に、

別路を何か歎かん越えて行く、關も昔の跡と思へば。(巻第五)

三萬餘騎を率ひながら、富士川の水禽の羽音に驚いて、矢一つだに射すして逃げ歸つた二人の將軍

の描寫であるが、之れを見ても、公卿の文明の摸倣が、どれ程彼等を文弱にしたかがわかる。同じ維盛が後に熊野に參詣した折に、都で彼れを見知つたといふ者の物語つた話に、

あの殿の未だ四位の少將なりし安元の春の頃、院の御所法住寺殿にて五十の御賀のありしに、父小松殿は、内大臣の左大將にて御座す。叔父宗盛卿は、大納言の右大將にて、階下に着座せられき。其の外三位中將知盛、頭中將重衡以下、一門の公卿殿上人、今日を晴れと時めき、垣代に立ち給ひし中より、此の三位中將殿、櫻の花を挿頭いて、青海波を舞うて、出でられたりしかば、露に媚びたる花の御姿、風に翻る舞の袖、地を照らし天も曜くばかりなり。女院より關白殿を御使にて、御衣をかけられしかば、父の大い座を立ち、これを賜はつて、右の肩にかけ、院を拜し奉りたまふ。面目類ひ少なうぞ見えし。傍の殿上人も、いか許り羨ましくや思はれけん。内裏の女房達の中には、深山木の中の楊梅とこそ覺ゆれなんと、いはれ給ひし人ぞかし。(巻第十)

とある。維盛の優美な振舞が、どれほど時の人にめでられたか、父の重盛までがどれほど是れを面目と考へたか、内裏の女房達がどれほど之れに見惚れたか。平家の公達が翩翩として得意に宮中を立ちならした様子が、手に取るやうではないか。

重衡が生捕となつて鎌倉に送られ、千手の前にもてなされて、琵琶朗詠の一夜を送つた翌くる朝、

頼朝と齋院、次官親義とが、かういふ物語をしてゐる。

佐殿宣ひけるは、平家の人々は、此の二三箇年は、軍合戦の營みの外は、又他事あるまじきところを思ひしに、さても三位中將の琵琶の撥音、朗詠の口ずさみ、終夜立ち聞きつるに、優にやさしき人にて御座しけりと宣へば、親義申しけるは、誰れも昨夜承りたく候ひしかども、折節相勞る事の候て承らず候。此の後は常に立聞き候べし。平家は代々歌人、才人達にて渡らせ給ひ候。先年あの人々を、花に喩へて候ひしには、此の三位中將殿をば、牡丹の花に喩へて候ひしかとぞ申しける。三位中將の琵琶の撥音、朗詠の口ずさみ、兵衛佐殿後迄も有難き事にぞ宣ひける。(巻第十)

重衡が風流道の堂奥に入つた事、平家の公達が殆んど悉く歌舞音曲の達人であつた事。而してそれが味方にも敵にも愛で羨まれた事がわかる。頼朝が生捕られ人の旅中のすさびを立聞までして、生涯の思出に愛で囃しながら、堅く武人の本領を持って、其の風流を做ひもせず、做はせもしなかつたのは、彼れが武人的政治家として、特に偉い所であらう。

壽永三年十月三日の日に、新帝の御禊の行幸があつて、九郎判官義經が先陣の供奉を承つた。『平家』の作者は其の様子を寫して、かう云つて居る。

去々年先帝の御禊の行幸には、平家の内大臣宗盛公(内辨を)勤めらる。節下の幄屋について、前

に龍旗立て、居給ひたりし氣色、冠際、袖のかり、表袴の裾までも、殊に勝れて見え給へり。其の外三位中將知盛、頭中將重衡以下、近衛の司、御綱に候はれしには、又立ち雙ぶ方も無かりしぞかし。今日は九郎大夫判官義經、先陣に供奉す。是れは木曾などには似ず、以ての外に京馴れたりしかども、平家の中の撰屑よりも猶ほ劣れり。(巻第十)

殿上の交はりをさへ嫌はれた者の子孫が、十年前後の念入な修業によつて、いかに生粹の公卿に成りましたか、而してそれに比べて、東夷の源氏の最優者が、どれほど見劣りがしたかは、之れによつて窺はれる。而して風流道の練達、公卿化の程度に於いて、源氏の最優者が平家の中の撰屑にも劣つたやうに、武道の練達、軍事の駈引に於いて、平家の最優者が源氏の撰屑にも劣るらしくなつて來た事は、齋藤別當實盛が蒲原の野陣で維盛に答へた所を見ても想像される。

大將軍權亮少將維盛、東國の案内者として、長井の齋藤別當實盛を召して、汝程の強弓精兵、八箇國には如何程あるぞと問ひ給へば、齋藤別當あざ笑つて、左候へば、君は實盛を大箭と思召され候にこそ。僅か十三束をこそ仕り候へ。實盛程射候ふ者は、八箇國には幾らも候。大箭と申す定の者の十五束に劣つて引くは候はず。弓の強さも健なる者の、五六人して張り候。加様の精兵共が射候へば、鎧の二三領は容易う射徹し候。大名と申す定の者の、五百騎に劣つて持つは候はず。

馬に乗つて落つる道を知らず、惡所を馳すれど、馬を倒さず。軍は又親も討たれよ、子も討たれよ、死ぬれば乗り越え乗り越え戦ふ候。西國の軍と申すは、總べて其の儀候はず。親討たれぬれば引退き、佛事孝養し、忌明けて寄せ、子討たれぬれば、其の愁へ歎きとて、寄せ候はず。兵糧米盡きぬれば、春は田作り、秋刈り收めて寄せ、夏は暑しと厭ひ、冬は寒しと嫌ひ候。東國の軍と申すは、すべて其の儀候はず……これを聞く兵共、皆震ひ慄き合へりけり。(巻第五)

物語は正史でない。除外例はいづれにもあるであらう。けれども源平兩家の武人の間に、斯様な相違を生じて來たのは、争はれぬ事である。

かくして十餘年の歲月は、平家から武人の骨を抜いて、すつかり風流閑雅の大宮人を作り上げた。忠度の歌、經正の琵琶、重衡の朗詠、敦盛の笛、『平家』に擧ぐる所は、さまで多くはないが、是れは無論九牛の一毛で、彼等は相率ゐて其の亞流となつたのであらう。其處へ、親は子の、子は親の、屍骸を乗り越え躍り越えて戦ふといふ、謂はゆる「東夷北狄」が眞幕に寄せて來た。漁陽鼙鼓動地來、驚破霓裳羽衣曲。長恨歌の白氏の句は、まさしく木曾襲來を耳にした平家の心であつた。彼等はまづ敵の影を見ずして都を落した。都落の哀れさは言語に絶してゐた。「主上都落」、「維盛都落」、「聖主臨幸」、「忠度都落」、「經正都落」、「青山の沙汰」、「一門都落」、「福原落」。第七卷の後半を賑はした彼

等が都落の種々相は、いづれも人の袖を濡さしめるものであるが、同時に久しい間の修練に成つた彼等の美しい嗜みを、咄嗟の場合に現はして、我が人情史に一種の美觀を添へて居る。

木曾に追はれた平家は、程なく九郎義經に一の谷を追はれ、八島を奪はれて、やがて壇の浦の波の上に哀れな最期を遂げた。太政入道の妻二位尼が先達となり、入道の女建禮門院の生んだ安徳天皇を抱き、三種の神器の二種を擁して。壽永四年三月の二十四日である。

何故の哀れな最期であらう。武人が公卿化した爲めである。もし「平家一門」といふ集合體に心といふものがあつたならば、言つたであらう。「我れは武人である。武人たる者が、何に迷うて公卿の眞似をばしたのであらう。滅びかけた前代の亡靈に乗憑られたばかりに、あたは一門が此の海底の藻屑とはなるのだ！」と。平家は藤原氏に得たる所によつて亡びた。而して源氏は平家の失つた所を得て興つた。壇の浦に沈んだ平家の一門は、此の得喪關係の目醒めに、悵然として源氏の勃興を見送りつゝ、音もなく海底に沈んだのである。

「武人として興つた平家が公卿生活の摸倣に亡びた、回顧の悲劇の哀れな淋しい暗示的な味はひ」、私は此の無類な時代相の美しく現はれたのを、『平家物語』に於ける中心興味の最も重要な一つと考へる。

新らしい時代相の第三は、あらゆる人事の中で、戦争が主位を占めて来た事である。

保元を境として、日本の社會はすっかり其の外観を改めた。中でも著しいのは、武人が社會の表舞臺に乗り出して来た事である。同時に戦争が社會の視聽を集めて来た事である。武人の世は甲冑劍戟の世である。甲冑劍戟の最もよく用ゐられるのは戦争である。武人の時代に戦争の重んぜられるのは當然の事であらう。而して戦争の重んぜられる世に軍記文學の榮えるのは同じく當然の事であらう。

我が從來の文學にも、戦争を寫したものが全く無かつたではない。けれどもそれは、他と伍せしめ、或ひは他に屬せしめて簡單に記されただけで、戦争のみを獨立させ、或ひは之れに主要なる地位を與へて委曲に描寫するといふ事は、未だ曾て無い事であつた。其のこれあるは鎌倉時代の軍記物語を以て初めとする。言ひ換へれば、戦争は鎌倉の軍記に於いて始めて獨立した文學となつたので、而して軍記の中で面白く、最も優れたのは『平家物語』である。

軍記の軍物語には、武人描寫と戦争描寫ともいふべき二つの部分がある。武人描寫は武人の裝束や

態度を寫したもので、概して靜的の部分である。戦争描寫は實戰の經過を寫したもので、概して動的の部分である。武人の描寫の精しくなつた趣は、かうである。

足利が其の日の裝束には、朽葉の綾の直垂に、赤革絨の鎧着て、高角打つたる兜の緒を締め、金作りの太刀を帶き、二十四指いたる切符の矢負ひ、滋藤の弓持ちて、連錢蘆毛なる馬に、柏木にみづく打つたる、金覆輪の鞍置いてぞ乗つたりける。鎧踏張り立ち揚がり、大音聲を揚げて、昔朝敵將門を亡ぼして、勸賞蒙つて、名を後代に揚げたりし、倭藤太秀郷二十代の後胤、下野國の住人、足利太郎俊綱が子、又太郎忠綱、生年十七歳に罷成る。かやうに無官無位なる者の、宮に向ひ參らせて、弓を引き矢を放つ事は、天の恐れ少なからず候へども、但し弓も矢も、冥加の程も、平家の御上にこそ留まり候はめ。三位入道殿の御方に、我れと思はん人々は、寄合へや見參せんとて、平等院の門の中へ、攻め入り攻め入り戦ひけり、(卷第四)

『古事記』や、『日本紀』や、『萬葉集』や、『今昔物語』に見えた、武人や戦争の描寫とは比較にならぬ、委しい活き／＼したものとなつて来た。それが平安朝文學に於ける束帶衣冠や、五衣や、御遊などの、單調な生ぬるい描寫に鑿いた時人に刮目させた趣が想像される。

戦争描寫の趣はかうである。

薩摩守は聞こゆる熊野育ちの大力、究竟の早業にておはしければ、六彌太を擱うで、悪い奴が、御方ぞと云はよいはせよかして、六彌太を捕つて引き寄せ、馬の上にて二刀、落ち付く所で一刀、三刀迄こそ突かれけれ。二刀は鎧の上なれば、透らず、一刀は内兜へ突き入れられたりけれども、薄手なれば死なざりけるを、取つて押へて首を搔かんとし給ふ所に、六彌太が童、後れ馳せに馳せ来て、急ぎ馬より飛んで下り、討刀を抜いて、薩摩守の右の肘を、臂の本よりふつと打ち落す。薩摩守今はかうと思はれけん、暫し退け最後の十念唱へんとて、六彌太を擱うで、弓丈ばかりぞ投げ退けらる。其の後西に向ひ、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨と宣ひも果てねば、六彌太後ろより寄り、薩摩守の首を取る。好い首討ち奉つたりとは思へども、名をば誰れとも知らざりけるが、簾に結附けられたる文を取つて見ければ、「旅宿花」といふ題にて、歌を一首詠まれたる。

行き暮れて木の下陰を宿とせば、花や今宵のあるじならまし。

忠度と書かれたりける故にこそ、薩摩守とは知りてけれ。(巻第九)

戦の経過を素直に、細かに、そして面白く活きくと書いた趣、殊に『曾我物語』や『義経記』などに見るが如き、やゝこしいを粉飾を附けず、『太平記』に見るが如き、潤ひのない勝負の記事にならずし

て、しんみりとした情味を美しく湛へて居るところ、これが『平家』特得の味はひである。東國の荒夷の武に勇んだ趣と、風流で鍛へ上げた平家の武將の悠揚たる態度との対照も、此の作の特色を面白く説明して居るものである。

『平家』の戦争描寫の面白味は、一面、戦の種々相を豊かに見せた所にある。殆んど日本全土にわたる戦である。山の戦がある、川の戦がある、海の戦がある。晝の戦、夜の戦、晴の戦、嵐の戦がある。遭遇戦がある、強襲戦がある。山攻め、寺攻め、橋合戦がある。殊に折々は、選ばれたる武者の一騎討、負次勝負があつて、其の間に美しく勝ち美しく負けた幾多の挿話があり、扇の的、鐵引、弓流し、遠矢、いろくの風流がある。義経對平家の戦だけでも、一の谷から八島、壇の浦にかけて、時、所、人の上に、それ／＼無數の變化があり、單に壇の浦に於ける平家末期の光景だけを見ても、兩家の武人が弓矢太刀薙刀で、尋常に勝敗生死する外に、幼帝を抱いて水に赴く二衣の老尼があり、波の上に吉野龍田の景色を現する五衣緋の袴があり、二領の鎧を重ね、錨をかつて波に沈む大童があり、大手をひろげて、舟から舟に敵將を追ふ勇士があり、三十人力の勇者二人を小脇にかゝへて海に入る猛將がある。而して是等の光景は、勇ましき、哀れさは其のまゝにして、春の霞のやうな美しい趣味の裡に罩められ、其の上に、無常必滅の寂しい調子に裏づけられて居る。これが平家の戦争描寫に於け

る特別なる面白味の一つであらう。

又一方から見れば、『平家』の戦争描寫の面白味は、唯だ新興武人の面目を委しく書き、實戰の経過を生き／＼と寫したといふよりは、寧ろ落伍者の公卿殿上人と武人とを並べて、新舊時代思想の推移を寫した味はひ、及び、前者の風流韻事と後者の戰場馳驅の生活とを併せ寫した味はひにあるであらう。要するに戦争描寫が委しく活き／＼となつたといふ所に、『平家』特得の趣味のある事は争はれぬことである。

武力本位、回顧の悲劇、戦争主位、此の三つの時代相の面白く寫し出だされたこと、私が『平家』に特別なる愛着を感ずる第二の因由はこゝにある。

八

次に私は『平家物語』の組織に就いて考へて見たいと思ふ。茲に組織といふのは、三卷、六卷、十卷、二十卷といふが如き冊分けや、或ひは『平家』を「世盛り」と「落日」との前後二段に分け、若しくは清盛中心の全盛期と、義仲中心の流離期と、義經中心の衰滅期との三段に分けるといふが如き、結

構上の分け方をいふのではない。唯だ『平家』が年代順に目ぼしい事實を、コロ／＼並べにいた、あの並べ方について、その由来を考へて見たいといふのである。あの折角の眞珠を藁切れで繋いだやうな、覺束ない氣の毒な繋ぎ方、あの不思議な文段組織法の我が文學史上に於ける地位を考へて見たいといふのである。

私は先きに『平家』は文學たるには歴史過ぎ、歴史たるには文學過ぎる作であると云つた。『平家』は見様によつては、空想仕立の編年史料集とも云はるべきものである。最初に祇園精舎の大趣意暗示の序説分を掲げて、最後に「灌頂の巻」を置いた所などを見ると、いかさま一貫の趣意によつて事件の自然に開展した跡を寫し、材料を精選して無駄も隙もなく磨き上げたものやうにも見えるが、精しく調べると、随分と無駄があり、隙間があつて、連絡がつかず、統一の成立たぬ所があるのみならず、乾燥な事務的の事實を並べ、枝葉の類話を數多く挿んで、其の多きを誇つて居るらしい所があるのを見る、連絡や統一を論ずるのが、そも／＼野暮の至りで、作者は唯だ史料も多く擧げよう、故事も多く取り入れよう、其の中で琵琶に合はせるに相應はしい所は、念入りに面白く書き綴つて見よう位に、漫然と考へて筆を取つたものらしくも思はれる。殊に「六代被斬」が最後の章であつたとすると、大分尻窄まりの軽いたものになつて、「祇園精舎」も全篇を支配する威力を失ひ、十二卷に充ちた面白